宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第77集

大岩田上村遺跡（おおいわたかみむら）

農用地総合整備事業「都城区域」区画整理(今町団地)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第77
『大岩田上村遺跡』 正 誤 表

ページ・図番号	誤	正
p54 12行目	宮崎市大岩田町・・・	都城市大岩田町・・・

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第77集

大岩田上村遺跡（おおいわたかみむら）

農用地総合整備事業「都城区域」区画整理(今町団地)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

宮崎県埋蔵文化財センター

調査区全景（南から）

序

宮崎県教育委員会では、農用地総合整備事業「都城区域」区画整理(今町団地)に伴い大岩田上村遺跡の発掘調査を実施しました。本書はその発掘調査報告書です。

今回の調査では、旧石器時代から中世にかけての遺構・遺物を検出しました。中でも、都城市では初めて検出された旧石器時代の細石刃石器群や、中世の道路状遺構は注目されます。先人の歩みを振り返り、郷土の歴史を解明する貴重な資料を得られたことは大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけではなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言いただいた諸先生方、ならびに地元の皆様方に心より謝意を表します。

平成１５年９月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　　米良弘康

例　言

1　本書は、農用地総合整備事業「都城区域」区画整理(今町団地)に伴う事前調査として、宮崎県教育委員会が実施した大岩田上村遺跡の発掘調査報告書である。調査は緑資源公団九州支社都城建設事業所の委託を受けて宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

2　発掘調査は、平成11年11月17日から平成12年10月25日の２か年にわたって実施した。整理作業および報告書作成は平成13年度から平成15年度の３か年で行った。

3　本書で使用した位置図は、国土地理院発行の５万分の１『都城』を、遺跡の周辺地形図等については都城市都市計画図の１万分の１図を基に作成した。

4　現地における実測図の作成は主として、南正覚雅士、堀田孝博、松本　茂が担当し、福田泰典、加藤　学、藤木　聡、日高敬子、高木祐志、松尾有年、金丸史絵、丹　俊詞、工藤基志が補助した。

5　空中写真撮影は、(有)ふじた航空写真および(有)スカイサーベイ九州に、自然科学分析は、(株)古環境研究所に委託した。

6　遺物・図面の整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・遺物実測及びトレースは、南正覚、堀田、松本と整理作業員が行った。また、銭貨の応急処置は日高(敬)、古屋美樹、小宇都あずさ、黒木　修が行った。

7　本書の執筆・編集は南正覚が担当したが、第Ⅰ章第１節は谷口武範、『第Ⅱ章第３節２．遺構と遺物(３)　道路状遺構』については『大岩田上村遺跡　第Ⅱ章第１節　Ａ区の調査(堀田執筆)』(宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第38集2001)を、『第Ⅱ章第６節 道路敷設部分の調査』については『大岩田上村遺跡　第Ⅱ章第３節Ｃ区の調査(松本執筆)』(同上)にそれぞれ加筆している。また、『第Ⅳ章まとめ 道路敷設部分の調査』についても『大岩田上村遺跡　第Ⅲ章まとめＡ区(松本執筆)』(同上)を転載している。なお、使用した遺構・遺物等の写真は南正覚、堀田、松本が撮影した。

8　土層及び土器の色調は『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修)に拠った。

9　本書で使用した方位は、座標北(座標第Ⅱ系)である。レベルは海抜絶対高である。

10　本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

竪穴住居跡・・・ＳＡ　　掘立柱建物跡・・ＳＢ　　土坑・・・・・・ＳＣ

※Ａ区で確認された馬埋葬土坑もＳＣを使用している

溝状遺構・・・・ＳＥ　　道路状遺構・・・ＳＦ　　ピット・・・・・ＳＨ　　土壙墓・・・・・ＳＸ

11　出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

12　ウマの遺体の調査については鹿児島大学農学部獣医学科　西中川　駿・久林朋憲両氏より玉稿を賜った。

13　次の方々に調査及び報告書の作成にあたり指導・助言をいただいた。記して謝意を表したい。
乗畑光博、横山哲英、米澤英明、下田代清海(敬称略)

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯 …… （谷口）　1
第２節　調査の組織 …… （南正覚）　1
第３章　遺跡の位置と環境 …… （　〃　）　3

第Ⅱ章　調査の記録

第１節　調査の経過 …… （南正覚）　8
第２節　基本層序 …… （　〃　）　9
第３節　Ａ区の調査
１．調査の概要 …… （　〃　）　10
２．遺構と遺物 …… （南正覚・堀田）　10
第４節　Ｂ区の調査
１．調査の概要 …… （南正覚）　28
２．遺構と遺物 …… （　〃　）　28
第５節　Ｃ区の調査
１．調査の概要 …… （　〃　）　30
２．遺構と遺物 …… （　〃　）　30
第６節　道路敷設部分の調査 …… （南正覚・松本）　37

第Ⅲ章　自然科学分析の結果

第１節　土層とテフラ …… 45
第２節　植物珪酸体分析 …… 49
第３節　大岩田上村遺跡出土のウマの遺体 …… 54

第Ⅳ章　まとめ …… （南正覚・松本）　56

報告書抄録 …… 67

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 4
第２図　大岩田上村遺跡グリッド配置図・調査区位置図 …… 5～6
第３図　大岩田上村遺跡周辺地形図及び調査区 …… 7
第４図　基本層序 …… 9

Ａ区

第５図　Ａ区遺構分布図 …… 11
第６図　土層断面図 …… 11
第７図　１・２号竪穴住居跡実測図 …… 12
第８図　中・近世遺構分布図・土層断面図 …… 14
第９図　１号道路状遺構実測図(１) …… 16
第10図　１号道路状遺構実測図(２) …… 17
第11図　１号道路状遺構実測図(部分)・土層断面図 … 18
第12図　１号土壙墓出土遺物実測図 …… 19
第13図　１・２号土壙墓実測図 …… 20
第14図　１・２号土壙墓出土銭貨拓影 …… 22
第15図　柵列ピット配置図 …… 23
第16図　Ａ区出土遺物実測図(１) …… 25
第17図　Ａ区出土遺物実測図(２) …… 26
第18図　Ａ区出土遺物実測図(３) …… 27

Ｂ区

第19図　Ｂ区遺構分布図 …… 29
第20図　１号土坑実測図 …… 29
第21図　Ｂ区出土遺物実測図 …… 29

Ｃ区

第22図　Ｃ区遺構分布図 …… 31
第23図　１号竪穴住居跡実測図 …… 32
第24図　１号掘立柱建物跡実測図 …… 32
第25図　１号溝状遺構実測図 …… 33
第26図　１～４号土坑実測図 …… 33
第27図　Ｃ区出土遺物実測図(１) …… 35
第28図　Ｃ区出土遺物実測図(２) …… 36
第29図　Ａ・Ｃ区トレンチ位置図 …… 38
第30図　１～６号トレンチ土層断面図 …… 39
第31図　２・３号トレンチ出土の石器 …… 41
第32図　３～５号トレンチ出土の石器 …… 42
第33図　２号トレンチ遺物出土状況 …… 42
第34図　３号トレンチ遺物出土状況 …… 42
第35図　４号トレンチ遺物出土状況 …… 43
第36図　５号トレンチ遺物出土状況 …… 43
第37図　６号トレンチ遺物出土状況 …… 43
第38図　参考遺物実測図 …… 44

表　目　次

第１表　溝状遺構一覧 …… 13
第２表　１・２号土壙墓出土銭貨一覧 …… 21
第３表　出土遺物観察表(１) …… 59
第４表　出土遺物観察表(２) …… 60
第５表　出土遺物観察表(３) …… 61
第６表　出土遺物観察表(参考資料) …… 62

図　版　目　次

巻頭図版調査区全景(南から)
図版１　Ａ区１号道路状遺構完掘状況 …… 17
図版２　Ａ区１号土壙墓検出状況 …… 20
図版３　Ａ区２号土壙墓完掘状況 …… 20
図版４　Ｃ区１号竪穴住居跡完掘状況 …… 32
図版５　Ｃ区１号掘立柱建物跡完掘状況 …… 32
図版６　細石刃と細石刃核 …… 43
図版７　Ａ区出土土器 …… 63
図版８　Ａ区出土土器 …… 64
　　Ｂ区出土土器
　　Ｃ区出土土器
　　Ａ区１号土壙墓出土土器
　　参考資料
図版９　Ａ区中・近世遺構(溝)
　　Ａ区溝(ＳＥ０２)完掘状況 …… 65
　　Ａ区土層断面
　　Ａ区１号竪穴住居跡完掘状況
　　Ｂ区ピット検出状況
　　Ａ区ウマ埋葬土坑
　　Ａ区２号竪穴住居跡完掘状況
　　Ｂ区１号土坑遺物出土状況
　　Ｃ区３号トレンチ遺物出土状
図版10　Ａ区中・近世遺構(溝)完掘状況 …… 66
　　Ａ区号道路状遺構土層断面
　　〃　　硬化面Ａ検出状況
　　〃　　ピット検出状況

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

緑資源公団(旧農用地整備公団)において、農用地整備事業として農業生産性の向上・農業経営の安定を図る圃場整備事業(204ヘクタール)やそれに伴う農産物流通の迅速化を目指した広域農道(総延長19.1㎞)建設が計画された。事業区内には多くの遺跡が分布しているため、県文化課では、発掘調査期間や面積の平準化及び調査員の確保などの課題について公団と継続して協議を行ってきている。

「今町団地」圃場整備事業区は、南北に長く地形上、大岩田上村遺跡、宮尾・立野遺跡、諏訪免遺跡の三つの遺跡が分布しており、平成７年11月から平成８年１月にかけての試掘調査によって、それぞれの遺跡の状況が確認された。さらに、事業の具体化に伴い事業地区の拡大が計画され、再度、平成11年９月に遺跡範囲の絞り込みを目的とした確認調査によって弥生時代後期の住居址等が検出された。

この結果をもとに県文化課は緑資源公団九州支社都城建設事業所と事前の協議を行い、工事の切り盛り関係でどうしても遺跡の影響が避けられない大岩田上村遺跡を調査対象とし、平成11年度に10,000㎡平成12年に15,000㎡の調査を実施することにした。

第２節　調査の組織

大岩田上村遺跡の発掘調査は下記の組織で実施した。

調査主体　宮崎県教育委員会

調査機関　宮崎県埋蔵文化財センター

平成11年度〈**発掘調査**〉

所　長	田中　守
副所長	江口京子
庶務係長	児玉和昭
調査第二係長	青山尚友
主査(調査担当)	南正覚雅士
調査員(　〃　)	松本　茂

平成12年度〈**発掘調査**〉

所　長	矢野　剛
副所長兼総務課長	菊地茂仁
副所長兼調査第二課長	岩永哲夫
総務課総務係長	亀井維子
調査第二課調査第四係長	永友良典
主査(調査担当)	南正覚雅士
調査員(　〃　)	堀田孝博

平成13年度〈**整理作業**〉

所　長	矢野　剛
副所長兼総務課長	菊地茂仁
副所長兼調査第二課長	岩永哲夫
総務係長	亀井維子
調査第二課調査第四係長	永友良典
主査(報告書担当)	南正覚雅士

平成14年度〈**整理作業・報告書作成**〉

所　長	米良弘康
副所長兼総務課長	大薗和博
副所長兼調査第二課長	岩永哲夫
総務係長	野邊文博
調査第二課調査第四係長	永友良典
主査(報告書担当)	南正覚雅士

平成15年度〈**報告書作成**〉

所　長	米良弘康
副所長兼総務課長	大薗和博
副所長兼調査第二課長	岩永哲夫
主幹兼総務係長	石川恵史
調査第二課調査第四係長	近藤　協
主査(報告書担当)	南正覚雅士

第３節　遺跡の位置と環境

大岩田上村遺跡(第１図―１)は宮崎県都城市大岩田町6809番地他に所在する。

都城市は、宮崎県の南西部にあり、東側を鰐塚(わにつか)山系、西側を霧島山系に囲まれた南北に細長い盆地の中央を占め、行政区分は宮崎県の西南部、鹿児島県との県境に接している。当遺跡は、市域南部の大岩田町に所在し、大淀川とその支流の梅北川とによって東西を挟まれた標高150～170ｍの平坦な成層シラス(二次シラス)台地上に立地し、川面との比高は約15ｍである。当該地の現況は畑地であり、南から北へ階段状につくられている。

周辺の遺跡を眺めると、本遺跡の西250ｍでは、1962年(昭和37年)の道路拡張工事の際、後に「五十市式土器」と呼称される全縄文施文の完形土器が採取されている(第１図―２)。また、同台地上の北東端には大岩田村ノ前遺跡(1)(第１図―３)が位置し、縄文時代後期～弥生時代後期の竪穴状遺構や基底部(硬化面)にピットを伴う中世の道路状遺構が確認されている。さらに、弥生時代前期～晩期の土器群も出土している。

一方、梅北川を挟んだ対岸の台地には、黒土(くろつち)遺跡(2)(第１図―４)と横尾原(よこおばる)遺跡(第１図―５)が位置する。黒土遺跡では縄文時代後期～晩期の土器・石器、弥生時代前期末の竪穴住居跡、中世の溝状遺構や道路状遺構が確認されている。中でも、擦切石包丁や磨製穿孔具の出土は注目される。横尾原遺跡では、縄文時代後期～晩期の土器・石器や奈良時代の骨蔵器２点が出土したほか、縄文時代晩期前半の竪穴住居跡が検出されている。また、大淀川を挟んだ対岸の舌状台地状には油田遺跡(3)(第１図―６)が位置する。縄文時代晩期と古墳時代中期頃の土器が多量に出土している。さらに、中世末頃の土壙墓が47基確認されている。

南西には、鴇尾(ときのお)遺跡(4)(第１図―７)と坂ノ下遺跡(4)(第１図―８)が位置する。鴇尾遺跡では、中世の畠跡と水田跡が検出されている。坂ノ下遺跡では、弥生時代後期の竪穴住居跡が確認されている。南には、梅北佐土原遺跡(5)(第１図―９)と嫁坂遺跡(6)(第１図―10)、金御岳(かねみだけ)北側山裾部には王子原遺跡(7)(第１図―11)が位置する。梅北佐土原遺跡では、縄文時代の集石遺構が確認されている。嫁坂遺跡では、中世の水田跡、道路状遺構、溝状遺構が検出されている。王子原遺跡では縄文時代の竪穴住居跡や中世の道路状遺構が確認されている。

＜参考・引用文献＞

(1)都城市教育委員会『大岩田村ノ前遺跡発掘調査報告書』　都城市文化財調査報告書第14集　1991

(2)都城市教育委員会『黒土遺跡発掘調査報告書』　都城市文化財調査報告書第28集　1994

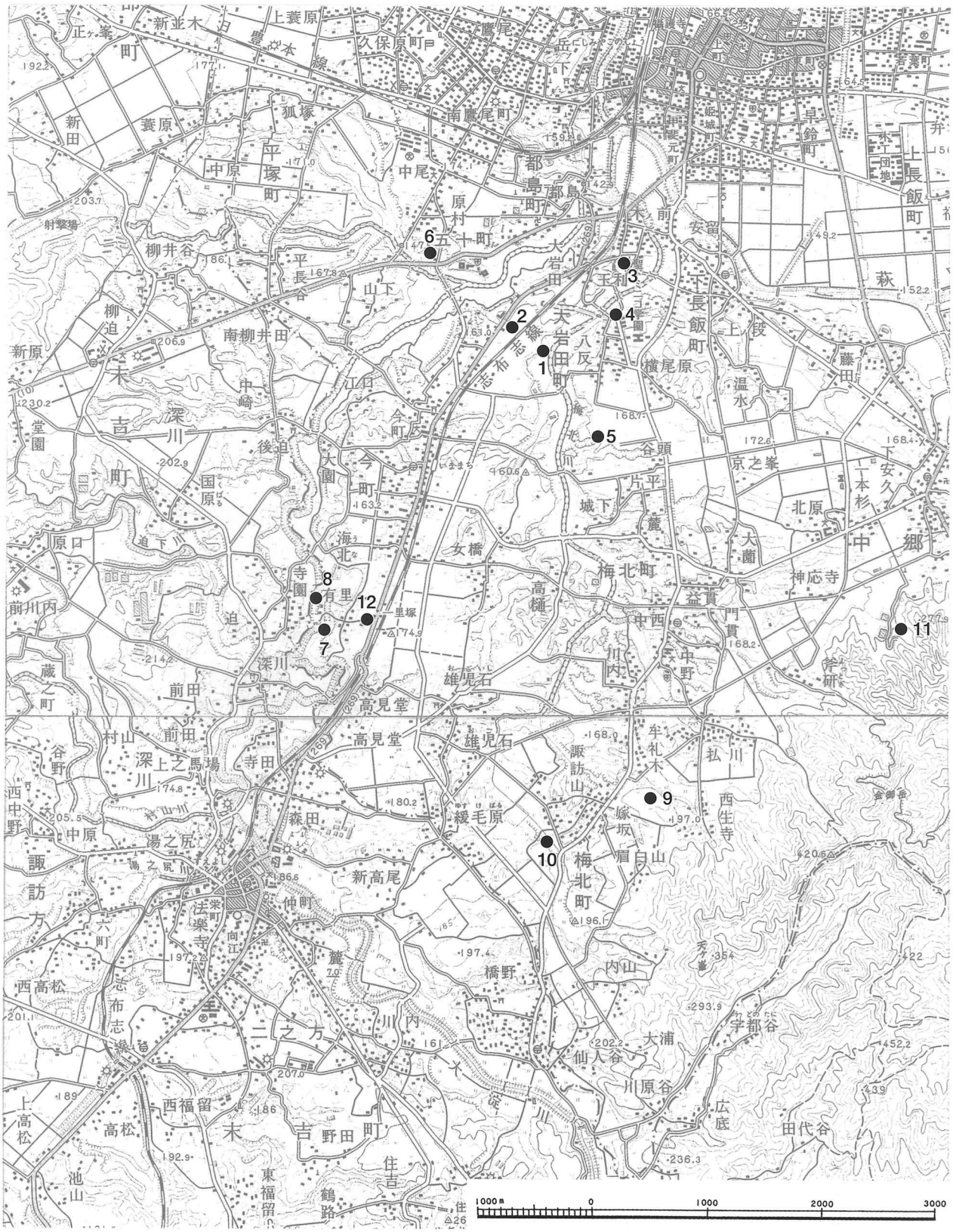
(3)都城市教育委員会『油田遺跡発掘調査報告書』　都城市文化財調査報告書第25集　1993

(4)宮崎県埋蔵文化財センター『鴇尾・坂ノ下遺跡発掘調査報告書』　宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第65集　2002

(5)宮崎県埋蔵文化財センター『梅北佐土原・中尾・蓑原遺跡発掘調査報告書』　宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第42集　2001

(6)宮崎県埋蔵文化財センター『母智丘谷・畑田・嫁坂遺跡発掘調査報告書』　宮崎県埋蔵文化財センター文化財発掘調査報告書第63集　2002

(7)宮崎県埋蔵文化財センター『王子原遺跡発掘調査報告書』　宮崎県埋蔵文化財センター文化財発掘調査報告書第45集　2001

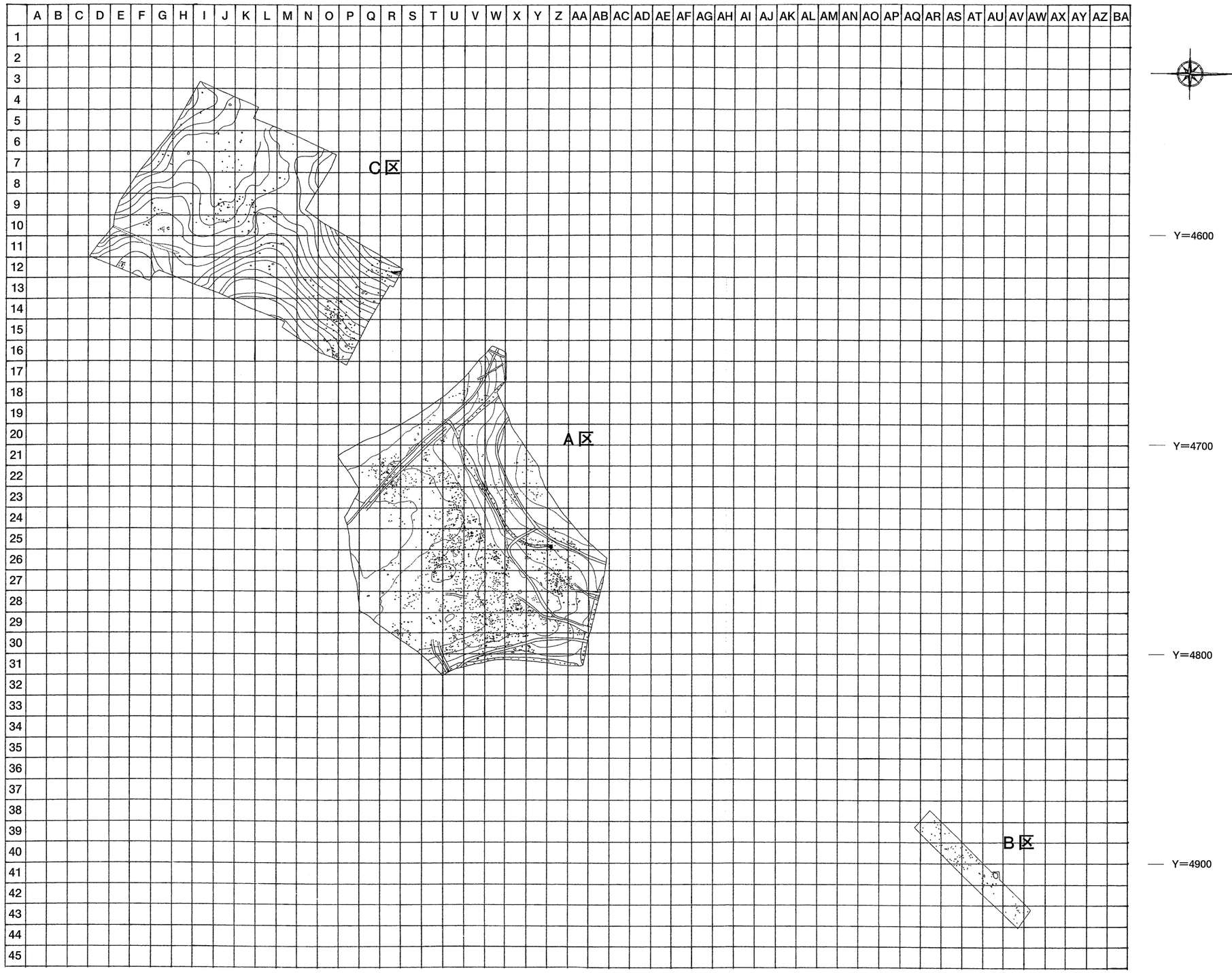


1．**大岩田上村遺跡**　2．五十市式土器採取地点　3．大岩田村ノ前遺跡　4．黒土遺跡

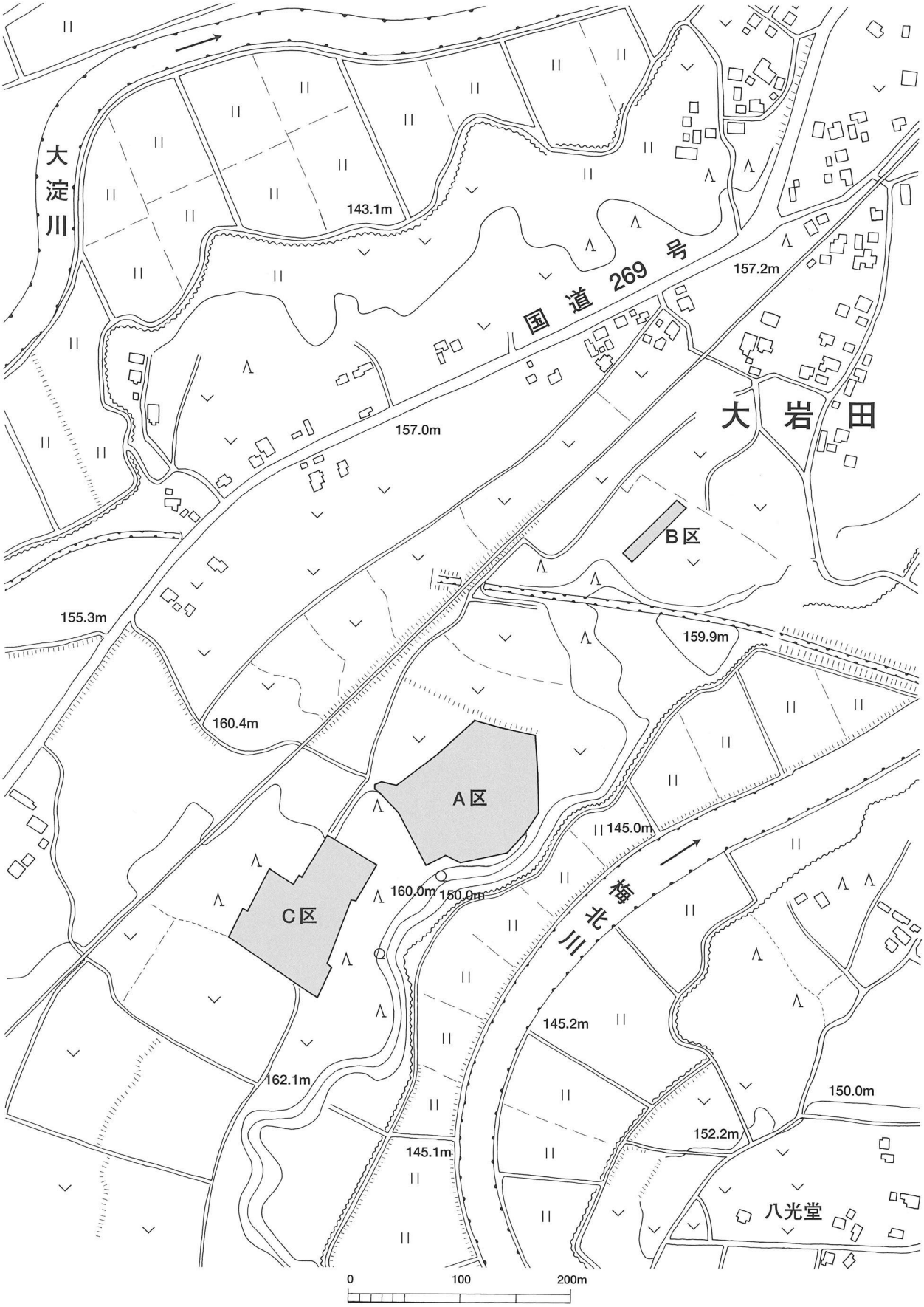
5．横尾原遺跡　6．油田遺跡　7．鴇尾遺跡　8．坂ノ下遺跡

9．梅北佐土原遺跡　10．嫁坂遺跡　11．王子原遺跡　12．今町一里塚

第１図　遺跡位置図(１／50,000)



第２図　大岩田上村遺跡グリッド配置図・調査区位置図（S=1/2,000）



第3図　大岩田上村遺跡周辺地形図及び調査区（S=1/5,000）

第Ⅱ章 調査の記録

第1節 調査の経過

大岩田上村遺跡の調査対象面積は25,000㎡ある。

「今町団地」圃場整備事業に伴って平成11年11月17日より調査を開始した。まず試掘(3ｍ×3ｍを150ヵ所設置する。)より調査区全体の遺構及び遺物包含層の確認を行った。その結果、遺構・遺物が確認できなかった3,000㎡を調査対象面積から削除し、残り22,000㎡ついて調査を実施した。調査範囲は谷等の地形により便宜上Ａ～Ｃ区(Ａ区は、試掘トレンチを入れた結果、中世遺構の残存する可能性が高いと推測された調査区西部をＡ区－Ⅰ、残りの部分をＡ区－Ⅱに区分)に分割し、各調査区の位置関係を把握し測量実測の基準とするため、国土座標に合わせた10ｍグリッドを設定した。該地は長年畑地として利用されていたため、耕作に拠る攪乱が広範囲に、しかも御池軽石層まで達していた。

本調査はＡ区－Ⅰから開始した。第Ⅰ層を重機で除去した後、第Ⅱ層から手掘りによって掘り下げを行い、第Ⅲ層上面で遺構確認を行った。ここで検出したのは中世～近世の溝状遺構及び中世の土壙墓である。その後、第Ⅴｂ層までを人力による掘削を行い、遺構検出を行ったところ縄文時代から弥生時代のピット群を検出した。

Ａ区－Ⅱについては、試掘トレンチを入れた結果、第Ⅱ・Ⅲ層では遺物が確認できなかったため第Ⅴａ層上面までを重機によって除去した。その後、第Ⅴａ層から人力による掘り下げを行い、第Ⅴｂ層上面で遺構確認を行った。その結果、縄文時代晩期の竪穴住居跡、中世～近世の溝状遺構、道路状遺構等を検出した。さらに、道路敷設部分の調査区北西隅に１箇所の確認トレンチを設定し、シラス上面まで掘り下げを行った。その結果、石鏃１点が出土したのみで遺構が確認できなかったため、平成12年８月10日でＡ区の調査を終了した。

平成12年１月７日からＡ区と併行して、新たにＢ区の調査を行った。調査では第Ⅳ層までを重機で除去した後、第Ⅴｂ層上面までを人力で掘り下げ遺構の確認を行った。その結果、土坑及びピット群が確認された。その後、第Ⅵ層の御池軽石層上面まで掘り下げたが、遺構が確認できなかったため平成12年２月７日を以て調査を終了した。

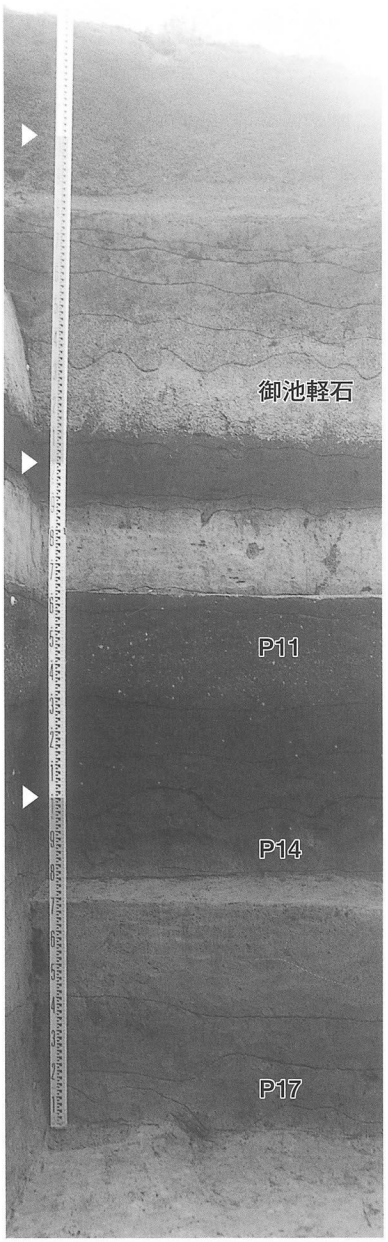
平成12年６月27日からＡ区と併行して、Ｃ区の調査を開始した。調査は第Ⅲ層までを重機で除去した後、第Ⅳ層から人力による掘削を行ったが、調査区の北東部分には径40～80㎝代の樹根が70数個残っており、抜根作業に予想以上の時間を費やしたが、抜根による周辺への影響を最小限に抑えて作業を終了することができた。その後、第Ⅴｂ層上面で精査を行い、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑等を検出した。さらに、Ｃ区では道路敷設部分に４箇所、調査区の南隅に１箇所の確認トレンチを設定しシラス上面まで掘り下げも行った。その結果、縄文時代早期前半の土器片１点、さらに下層では都城市で初めて旧石器時代後期末の石鏃、細石刃核、細石刃、剥片が確認された。平成12年10月25日を以て全ての調査を完了した。

各遺構、各地点で出土した遺物は、1500点余りで、時代的には概ね縄文時代後期～弥生時代を中心に中世・近世の遺物も僅かながら出土している。

第２節 基本層序

本遺跡の層序は、基本的に各地点ごとに同じ様相を呈している。これを17層に大別し、さらに21に細分した。なお、テフラについては『第Ⅲ章 第１節 土層とテフラ』を参照いただきたい。

層　序	色　調	特　徴
第Ⅰ層		表土
第Ⅱ層		表土
第Ⅲ層	灰白色土	文明軽石層（P3,SZ-Bm）自然堆積は部分的に暑さ3～15㎝で残存
第Ⅳ a 層	黒色土10YR1.85/1	文明軽石を含む（およそ2%程度）しまりやや強く　粘性やや高い
b	黒色土10YR2/1	文明軽石を含む（およそ1%程度）しまりやや強く　粘性やや高い
c	黒色土10YR2/1	文明軽石を含む（およそ3%程度）しまりは第Ⅳa・b層よりやや弱い　第Ⅳa・b層より粘性はやや高い
第Ⅴ a 層	黒色土10YR2/1	御池軽石を5%程度含む　しまりは第Ⅳc層と同程度　粘性は第Ⅳa・b層と同じ程度
b	黒色内10YR2/1.5	御池軽石をおよそ15%程度含む　しまりは第Ⅳa・b層と同程度　粘性も同様
第Ⅵ層	黄橙色土10YR6/8	御池軽石層（Kr-M）直径1～10㎜の黄橙色粒子のみで構成　しまりややあり　粘性なし
第Ⅶ a 層	黒色土10YR1.7/1	御池軽石～黒ニガの漸移層　直径1～10㎜の御池軽石を10%程度含む　しまり・粘性ややあり
b	黒色土10YR1.7/1	黒ニガ層　直径1㎜以下の黄橙色・白色・赤褐色粒子を微量に含む　しまり・粘性ややあり
c	黒色土10YR2/3	黒ニガ～アカホヤの漸移層　黒色土と明褐色土が斑状を呈する　しまりやや弱く粘性やや強い
第Ⅷ層	明褐色土7.5YR5/8	アカホヤ火山灰層（K-Ah）極めて微量なガラス質明褐色粒子により構成　全面にわたり黒色土が点的に混在するしまりややあり　粘性弱い
第Ⅸ層	明褐色土7.5YR5/8	アカホヤ火山豆石層　直径1～5㎜の明褐色粒子が密に堆積　しまり非常に強く粘性なし
第Ⅹ a 層	黒色土10YR1.7/1	黒褐色土（10YR2/3）が40%程度混入し斑状を呈する　直径1～10㎜の黄橙色粒子・直径1㎜以下の白色粒子を多量に含む　しまり強く粘性なし
b	黒色土10YR1.7/1	P11火山灰（Sz-Ym）混入層　直径1～10㎜黄橙色粒子・直径1㎜以下の白色粒子・赤褐色粒子を多量に含む　しまり非常に強く粘性ややあり
第Ⅺ a 層	黒褐色土10YR2/2	直径10㎜前後の黄橙色粒子を微量　直径2～3㎜の黄橙色粒子や直径1㎜以下の黄橙色・白色粒子を少量含む　しまりやや強く粘性なし
b	黒褐色土10YR2/3	土質は第Ⅺa層と同じだが、色調が僅かに明るい
第Ⅻ層	暗褐色土10YR3/4	薩摩火山灰（P14,Sz-S）混入層　直径5～10㎜黄橙色・白色粒子を微量　直径5～10㎜の黄橙色粒子を少量　直径1㎜以下の黄橙色・白色・赤褐色粒子を多量に含むしまり強く粘性なし
第ⅩⅢ層	褐色土7.5YR4/4	上半分を中心として直径10～30㎜の暗褐色土ブロック（10YR3/4）が少量混入　直径1～3㎜の黄橙色・白色粒子を微量に含む　しまり非常に強くやや粘性あり
第ⅩⅣ層	暗褐色土7.5YR3/4	直径5～10㎜の黄橙色粒子を微量　直径1～3㎜の黄橙色・白色粒子を少量含む　しまり強く粘性なし
第ⅩⅤ層	褐色土7.5YR4/4	直径1～3㎜の黄橙色・白色粒子を少量含む　しまり・粘性やや強い
第ⅩⅥ a 層	暗褐色土7.5YR3/4	暗褐色土と黒褐色土（10YR2/2）が混じり斑状を呈する　直径1～3㎜の黄橙色粒子をごく微量に含む　しまり・粘性やや強い
b	黒褐色土10YR2/2	P17（Sz-Tk6）混入層　第ⅩⅣa層と主客が入れ替わり斑状を呈する　ややしまりあり　粘性やや強い　直径1㎜以下のごく微細な赤褐色粒子（P17）を少量含む
第ⅩⅦ層	黄橙色土10YR5/8	二次堆積シラス層　所により暗褐色（10YR3/6）明赤褐色（5YR5/6）灰黄褐色土（10YR4/2）を呈するなど色調の変化が激しい　一部粘土化している　直径5～100㎜の黄橙色・明黄褐色粒子のブロックを多量に含む　ややしまりあり粘性なし



第4図　基本層序

＜註＞

各テフラの名称は下記の文献による。

小林哲夫・江崎真由美「桜島火山の噴火史」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』(Ⅷ) 名古屋大学年代測定資料研究センター　1996

早田　勉「火山灰と土壌の形成」『宮崎県史』通史編原始・古代1 宮崎県　1997

第３節　Ａ区の調査

１．調査の概要

Ａ区は面積12,000㎡、標高156.5～160ｍの北向き斜面をもつ低位丘陵地で、南側は急崖になっている。調査の結果、縄文時代後期後葉から晩期前葉にかけての竪穴住居跡(２軒)、縄文・弥生時代の両期にわたると推定されるピット群、中世の土壙墓(２基)、中世から近世の溝状遺構及び道路状遺構(37条)、時期不明の柵列(１基)と考えられる遺構を検出した。さらに、南東隅では近世の馬埋葬土坑(１基)も確認されている（第５図）。遺物は約1300点(12.2kg）が出土している。内訳は縄文土器片約1000点(10.5kg）、弥生土器片約200点(2.8kg）他である。なお、馬埋葬土坑については『第Ⅳ章 大岩田上村遺跡出土のウマの遺体』を参照いただきたい。

以下、遺構ごとにその特徴と出土遺物について記述する。

２．遺構と遺物

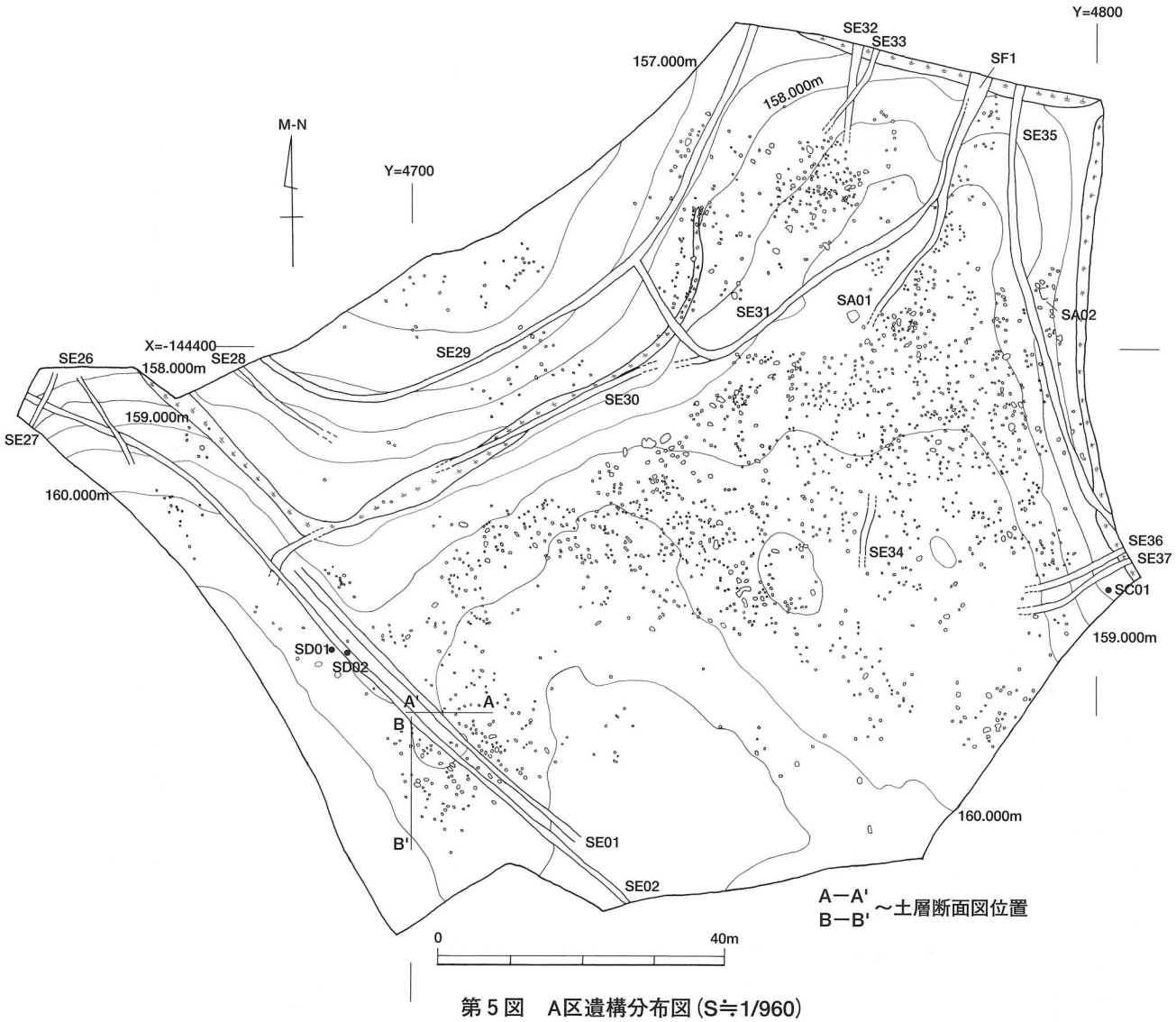
(1) 竪穴住居跡(SA)

１号竪穴住居跡(ＳＡ１：第７図)

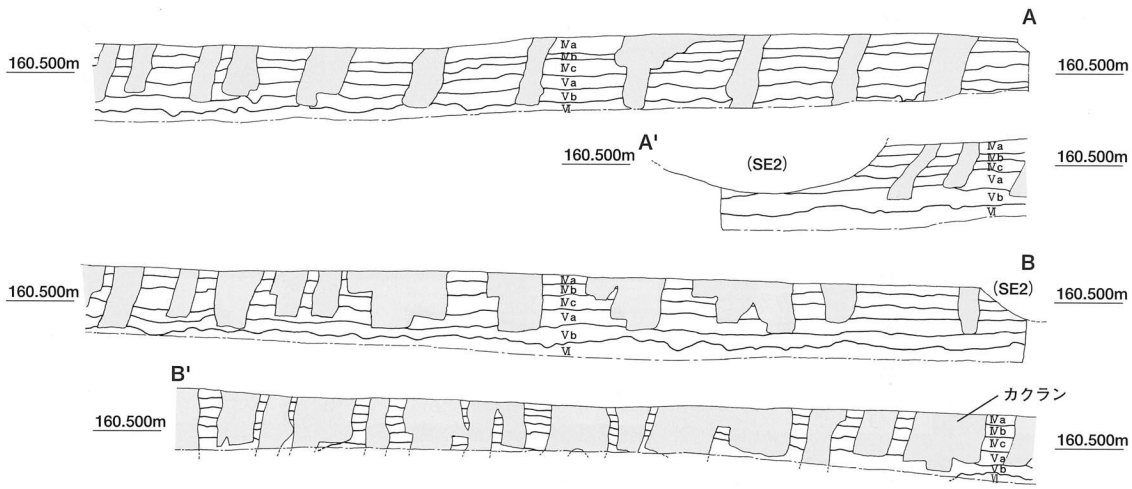
調査区の北東Ｘ―27・28グリッドで検出された。検出面は第Ⅴｂ層上面である。規模は長軸3.16ｍ、短軸2.40ｍ、床面積6.4㎡の住居跡である。主軸方向はＮ－23°－Ｗを指す。検出面からの深さは4～16㎝を測り、平面プランは楕円形を呈する。床面はほぼ平坦であるが、長軸方向が西側に、短軸方向も南側に僅かに傾斜する。埋土はほぼ単一層で極細粒～細礫相当の御池軽石を30％含むしまりのある粘質の黒色土である。遺構に伴う柱穴は確認できなかったが、６基のピットが確認されている。形態は円形および楕円形で、径が20～40㎝、深さ20～30㎝を測る。遺物は住居内の南東側で、土器片が２点、炭化物が数点がほぼ床面で確認されているが、土器片２点については小片でありしかも器種不明のため図化はしていない。出土している土器から縄文時代後期後葉から晩期前葉かけての住居跡ではないかと考えている。なお、同遺構出土の炭化物を加速器質量分析(ＡＭＳ)法による自然科学分析(放射性炭素年代測定)に委託した結果、補正年代値で2170±60年ＢＰという年代が報告されている(^{14}Ｃ年代は2220±60年ＢＰ)。

２号竪穴住居跡(ＳＡ２：第７図)

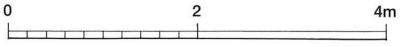
１号竪穴住居跡から東へ23ｍ、東向きの斜面の際のX―30グリッドにおいて検出した。東側が削平されているため住居の一部を失っている。検出面は第Ⅴｂ層上面である。主軸方向はＮ－８°－Ｗを指し、推定で長軸約2.7ｍ、短軸約2.0ｍ、床面積約5.2㎡の住居跡である。検出面からの深さは４～12㎝で隅丸方形プランの住居跡と想定される。床面は東から西へ３°、南から北へも３°傾斜している。埋土は３層である。遺構に伴う主柱穴は確認できなかったが、床面で主軸方向を同じくする不整楕円形の掘込みを確認している。掘込部の床面からの深さは５㎝を測る。住居内および不整楕円形の掘り込みからは遺物等は出土していないが、１号住居跡と同様に縄文時代後期後葉から晩期前葉かけての住居跡ではないかと考えている。



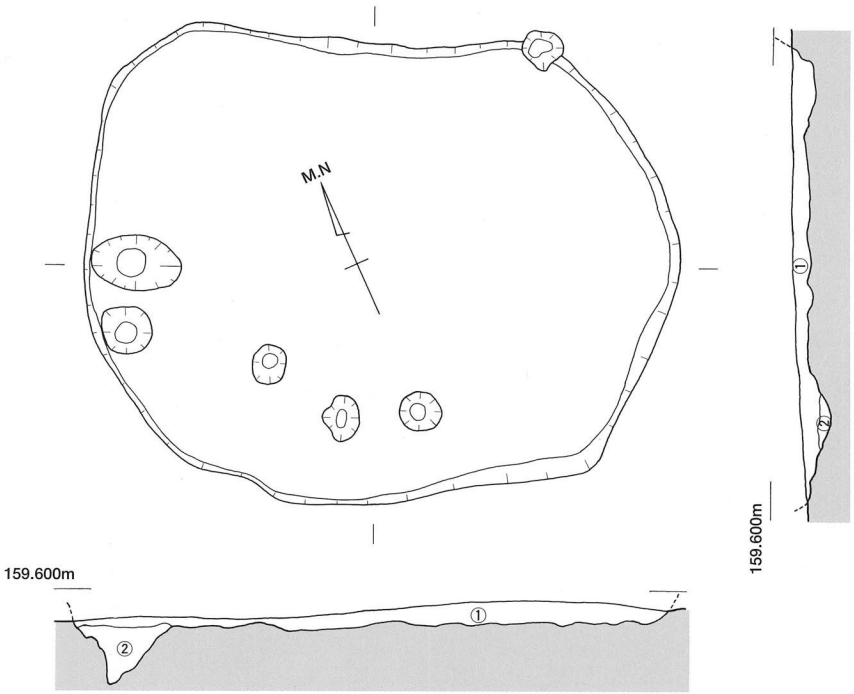
第５図　A区遺構分布図（S≒1/960）



※層序については、第Ⅱ章第２節基本層序を参照いただきたい。

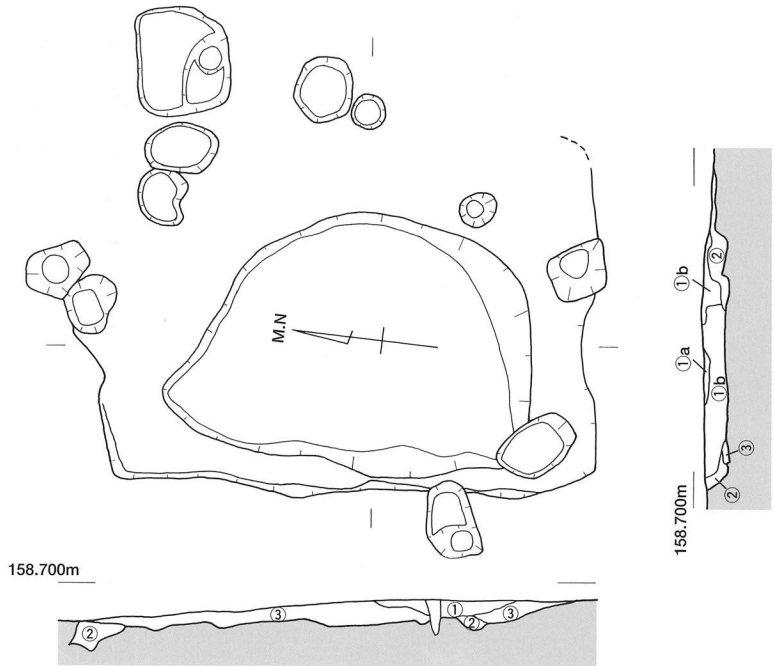


第６図　土層断面図（S=1/80）



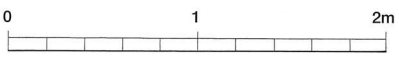
①黒色土（１０ＹＲ　1.7/1）極細粒～細礫相当の御池軽石を30%含む　粘質土　しまりあり
②黒褐色土（１０ＹＲ３/１）＋明黄褐色土（１０ＹＲ６/６）
極細粒～細礫相当の御池軽石を45%を含む　弱粘質土　しまりややあり

１号竪穴住居跡



①黒色土（１０ＹＲ1.7/1）極細粒～細礫相当の御池軽石を30%含む　粘質土　しまりあり
※a.bはaが若干御池軽石の含まれる割合が低い
②黒褐色土（１０ＹＲ３/１）＋明黄褐色土（１０ＹＲ６/６）
極細粒～細礫相当の御池軽石を45%を含む　弱粘質土　しまりややあり
③黒褐色土（１０ＹＲ３/１）極細粒～細礫相当の御池軽石を30%含む　　弱粘質土　しまりあり

２号竪穴住居跡



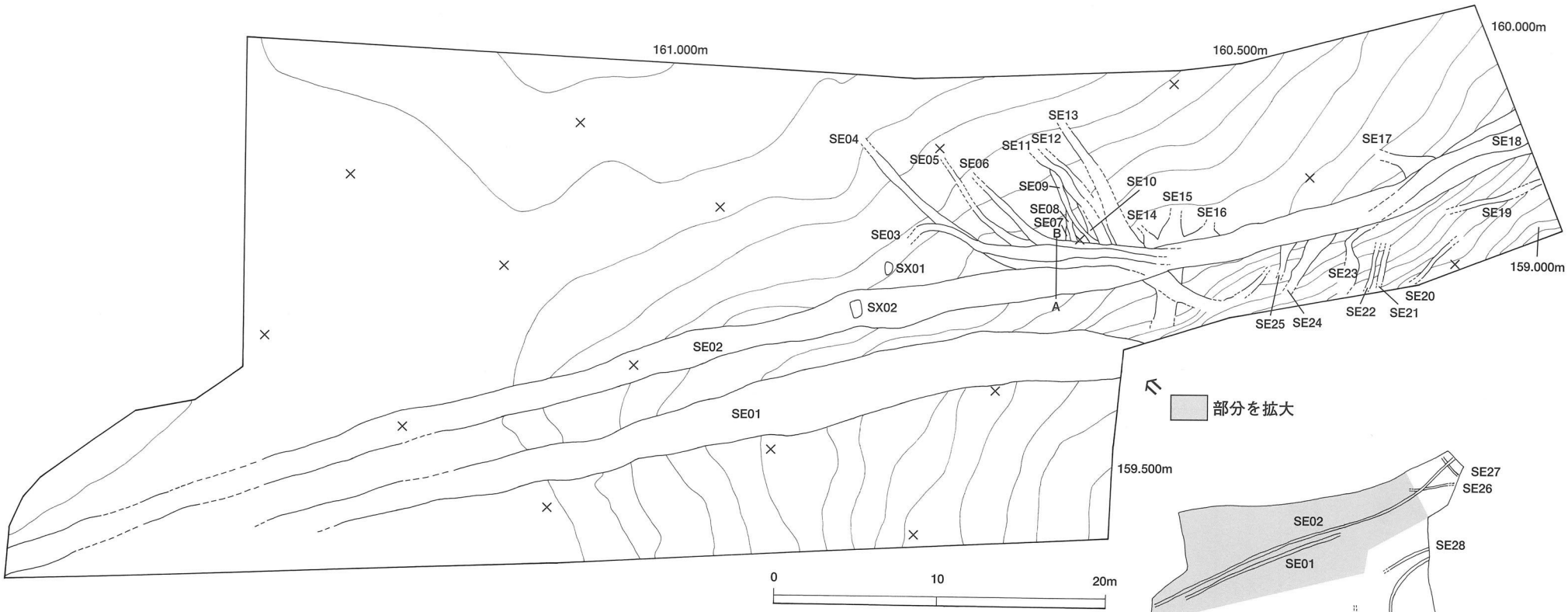
第７図　1・2号竪穴住居跡実測図（S=1/40）

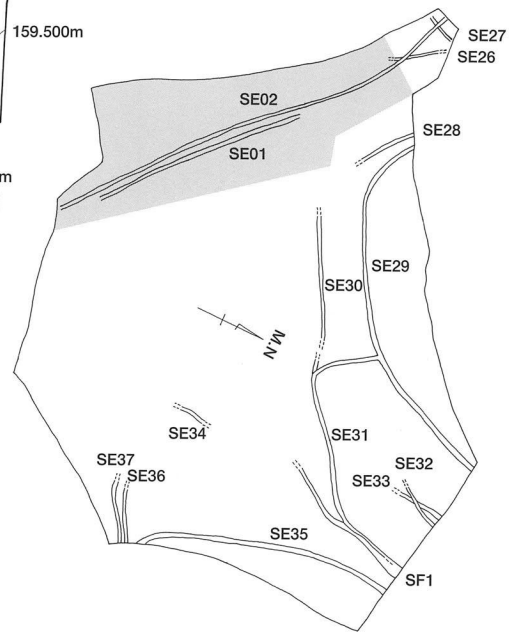
(2) 溝状遺構(SE)

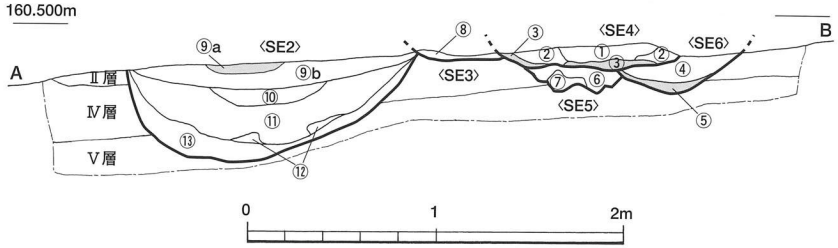
A区では中世から近世の溝状遺構が37条確認されている。その内、A区－Ⅰ(調査区西側部分)で25条が検出されている。溝の規模・断面形態・走行・切り合い関係については、下記の「溝状遺構一覧」を参照いただきたい。

遺構名	幅(m)	深さ(m)	断面形態	形　　態	切り合い関係等
SE01	1.4～3.6	0.2～0.50	U字型	北西方向に直線的に走行	
SE02	1.2～2.2	0.40～0.62	U字型	北西方向に直線的に走行	SE13～17、23～25を切る　硬化面(2)
SE03	0.4～1.0	0.02～0.24	浅U字型	北方向に走行	SE2～6を切る　硬化面(1)
SE04	0.4～1.0	0.1～0.3	浅U字型	南西から緩やかにカーブして北西に走行	硬化面(1)
SE05	0.3～0.6	0.04～0.09	浅U字型	北東方向に走行	
SE06	0.2～0.6	0.06～0.10	浅U字型	北東方向に走行し屈曲して北西に走行	SE5,7～13を切る　硬化面(1)
SE07	0.5＋α	—	浅U字型	北西方向に走行	文明軽石埋土
SE08	0.3	0.06～0.16	浅U字型	北東方向へ走行	SE7を切る
SE09	0.6	0.05～0.07	浅U字型	南西方向へ走行し屈曲して北西方向へ走行	SE8,10, SF1を切る
SE10	0.5＋α	—	浅U字型	北西方向へ直線的に走行	文明軽石埋土
SE11	0.8～1.0	0.03～0.15	浅U字型	北東方向へ走行	SE9,10,12を切る
SE12	0.2＋α	0.07	浅U字型	北東方向へ走行	
SE13	0.6～0.7	0.07	浅U字型	北東方向へ走行	文明軽石埋土
SE14	0.3～0.7	0.10	浅U字型	北東方向へ走行?	硬化面(1)　文明軽石埋土
SE15	0.8～1.8	0.17～0.20	浅U字型	東方向へ走行?	文明軽石埋土
SE16	0.3	0.10～0.13	浅U字型	南東方向へ走行?	硬化面(1)　文明軽石埋土
SE17	0.4～2.1	—	浅U字型	北東方向へ走行?	硬化面(1)
SE18	0.8～1.2	0.03～0.18	浅U字型	北西方向へ走行	SE2,17を切る
SE19	0.3～0.4	0.03	浅U字型	北西方向へ走行	
SE20	0.5～0.7	0.03	浅U字型	南東方向へ走行	
SE21	0.2～0.7	0.02	浅U字型	東方向へ走行	
SE22	0.2～0.5	0.10～0.15	浅U字型	東方向へ走行	
SE23	0.4～1.5	0.10～0.15	浅U字型	東方向へ走行	
SE24	0.3～1.0	0.10～0.20	浅U字型	東方向へ走行	
SE25	0.2	0.03	浅U字型	南東方向へ走行	
SE26	0.7～0.9	0.10～0.20	浅U字型	北西方向へ走行	SE2を切る
SE27	0.6～0.8	0.20～0.30	浅U字型	北東方向へ走行	SE2を切る
SE28	0.7～0.9	0.30～0.40	U字型	北西方向へ走行	
SE29	1.2～1.5	0.40～0.55	U字型	南西方向へカーブしながら走行	埋土中から龍泉窯系青磁(70)出土
SE30	0.75～1.0	0.15～0.25	U字型	北東方向へ走行	
SE31	0.8～1.2	0.40～0.50	U字型	北東及び北西方向へ走行	SE30を切る
SE32	0.7～1.0	0.20～0.40	浅U字型	北方向へ走行	
SE33	0.7～0.9	0.15～0.25	浅U字型	北方向へ走行	SE32を切る
SE34	0.6～0.9	0.15～0.25	浅U字型	北方向へ走行	
SE35	1.2～2.0	0.35～0.57	U字型	緩やかににカーブしながら南方向へ走行	
SE36	0.7～0.85	0.15～0.30	浅U字型	北東方向へ走行	
SE37	0.5～0.70	0.06～0.25	浅U字型	北東方向へ走行	

第1表　溝状遺構一覧







①黒色土	(2.5Y1.7/1)	15%程度の文明軽石を含む　しまりややあり　粘性低い
②灰黄黒褐色土	(10YR3.5/2)	細粒～粗粒砂相当の文明軽石をマトリックスとする　しまり非常に強く　粘性は低い
③黒色土	(10Y2/1)	約20%程度の文明軽石(細粒砂相当)を含む　しまりは非常に強く　粘性は低い　SE4の硬化面
④黒色土	(10YR2/1)	約15%程度の文明軽石(粗粒砂相当)を含む　しまり非常に強く　粘性は低い
⑤黒色土	(2.5Y2/1)	約15%程度の文明軽石(粗粒相当)を含む　しまり非常に強く　粘性は低い　上縁はSE6硬化面
⑥黒色土	(2.5Y2/1)	約20%程度の文明軽石(粗粒相当)を含む　しまり非常に強く　粘性は低い
⑦黒色土	(10YR1.85/1)	3%程度の文明軽石(細粒相当)を含む　しまり非常に強いが6より劣る　粘性は6よりやや強い
⑧黒色土	(10YR1.7/1.5)	文明軽石を含み細粒砂状を呈する　しまり強く硬化面と思われる?
⑨黒色土	(2.5Y2/1)	文明軽石を含み細粒砂状を呈する　a･bともに色調･土質は同質であるが､aは著しく硬化している
⑩明黄褐色土	(2.5Y6.5/6)	シラスの二次堆積?(人為的なものである可能性が高い)
⑪明黄褐色土	(2.5Y6.5/6)	文明軽石の一次堆積の可能性が高い(基本層序の第Ⅲ層に相当)
⑫黒色土	(2.5Y1.7/1)	わずかに文明軽石を含む　しまり強く　粘性高い
⑬黒色土	(10YR1.7/1)	わずかに御池軽石を含む　12よりもややしまり弱く　粘性高い

第8図　中･近世遺構分配図(S=1/350)･土層断面図(S=1/40)

(3)道路状遺構（ＳＦ）

１号道路状遺構(ＳＦ１：第９～11図)

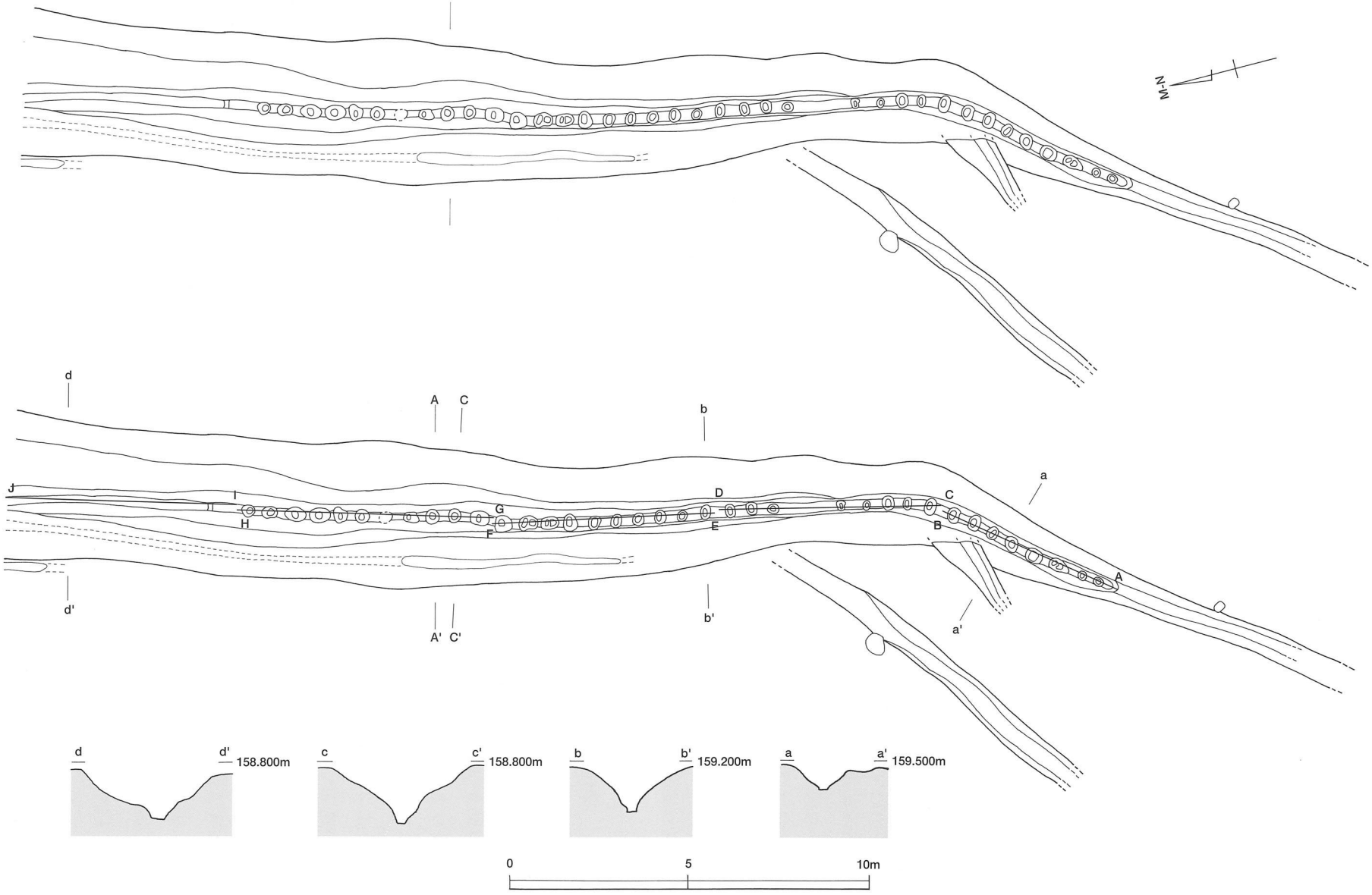
調査区の北西部、Ｘ・Ｙ－28グリッドからＹ・Ｚ・ＡＡ－29グリッドにかけて検出された。検出全長は直線距離にして約37.5m を測り、主軸はＮ－15°－Ｅと概ね北北西～南南西の方向を取るが、北端より約26ｍの地点で緩くカーブしてＮ－42°－Ｅへと転じている。幅員は上面で約0.7～4.3ｍ、深さは完掘状態で最深部約1.6mを測るが、検出面は御池軽石層(第Ⅵ層)であるため本来はさらに規模の大きいものであったと推定される。断面は大きくＶ字状を呈している。掘削は最も深い地点でＰ14火山層混入層(第ⅩⅡ層)まで達していた。硬化面は主として２箇所に認められた。一方は西側立ち上がりの中腹付近にある傾斜変節点に乗るような状態で約6.2ｍにわたって検出された。硬化面から北側にも傾斜の変節は認められ、あたかも傾斜を下っていくかのような様相であるため、この部分にも硬化面が存在した可能性が高いと考えられる。硬化面は御池軽石を含む黒色土で形成されている(硬化面Ａ)。他方は遺構底面に非常に良好な状態で残存していた。茶褐色の鉄分が析出した層理面を介在する６枚の層が観察された。Ｐ11火山灰を含む黒色土で形成されている（硬化面Ｂ）。

これら硬化面の前後関係について土層断面で観察してみると、硬化面Ａを切るようにして硬化面Ｂを伴う掘り込みがなされたことが明らかである。断面を提示した部分では、硬化面Ａのちょうど反対側にも同じような傾斜変節点があり、あたかも一連のものであるかのような印象を与えるが、他の部分では傾斜の変節や硬化面が明瞭に認められず、さらにはこれを硬化面の痕跡と仮定するならば復元される路面が約2.7ｍとなり、切り通しとしては、やや幅広の感が否めない。

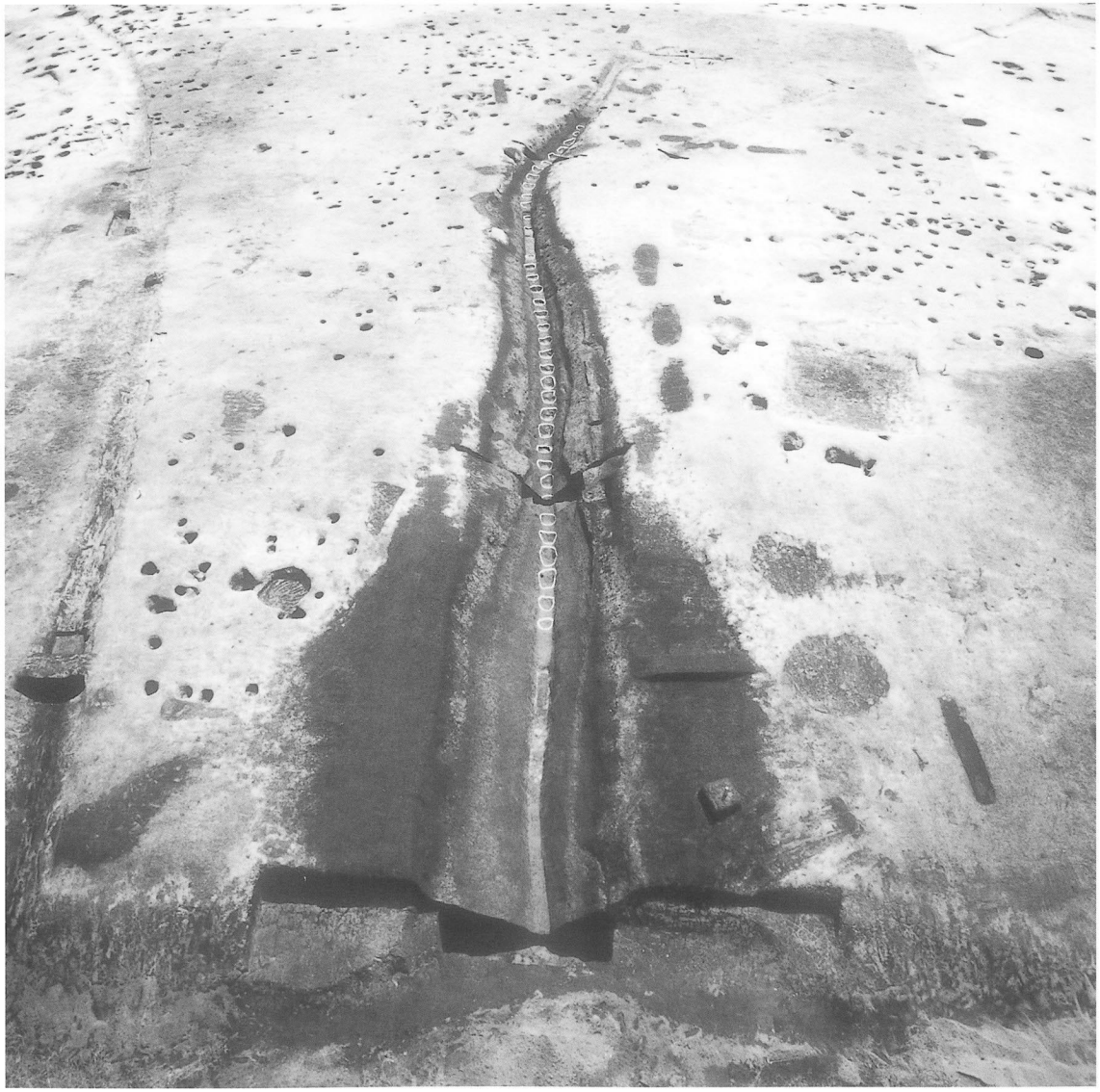
よって硬化面Ａが通行に耐えなくなったために中心を東側にずらしながら掘り下げて路面を再生していったものと考える。ただし硬化面Ａの直後に硬化面Ｂが構築されたものか、あるいは幾度かの破損・再掘削を繰り返した後、最終的に硬化面Ｂの深度に達したものかは、土層断面の観察からは明らかにできなかった。硬化面Ｂの下からピット列が検出されている。ピットは直線的距離にして約24ｍの間に37基確認された。途中にピットの空白部分があるが、残存状態が明瞭でなかったためであり、前後と同様な状態で残存していた可能性が高いと考えられる。ピットは長径約26～62㎝,短径約19～43㎝を測り、一部不整形のものが認められるが多くは楕円形を呈している。また路面の主軸方向に直行するように長径を持つピットが大半である。またこれらのピットのほとんどが道路状遺構の立ち上がりに切り込むようなかたちで掘削されている点が注目される。

先述したように硬化面Ｂには鉄分の析出した層理面が多く観察される。これら層理面の性格としては一枚一枚が路面であるか綿密な土木工事(版築)の痕跡であるかという二つの可能性が挙げられるが、立ち上がりに切り込むピットのプランにくわえて、硬化面を形成する土がいずれもＰ11火山灰を含むきわめて等質な土であり、むしろ層理面の存在によってのみ分層が可能であること、さらに消極的ながら最下の硬化面では路面としての幅員が不足するような印象があることなどから、後者の可能性が高いと判断される。道路状遺構に伴うこうしたピット列は、近接する大岩田村ノ前遺跡からも検出されており、いわゆる「波板状凹凸面」との関係が注目される。

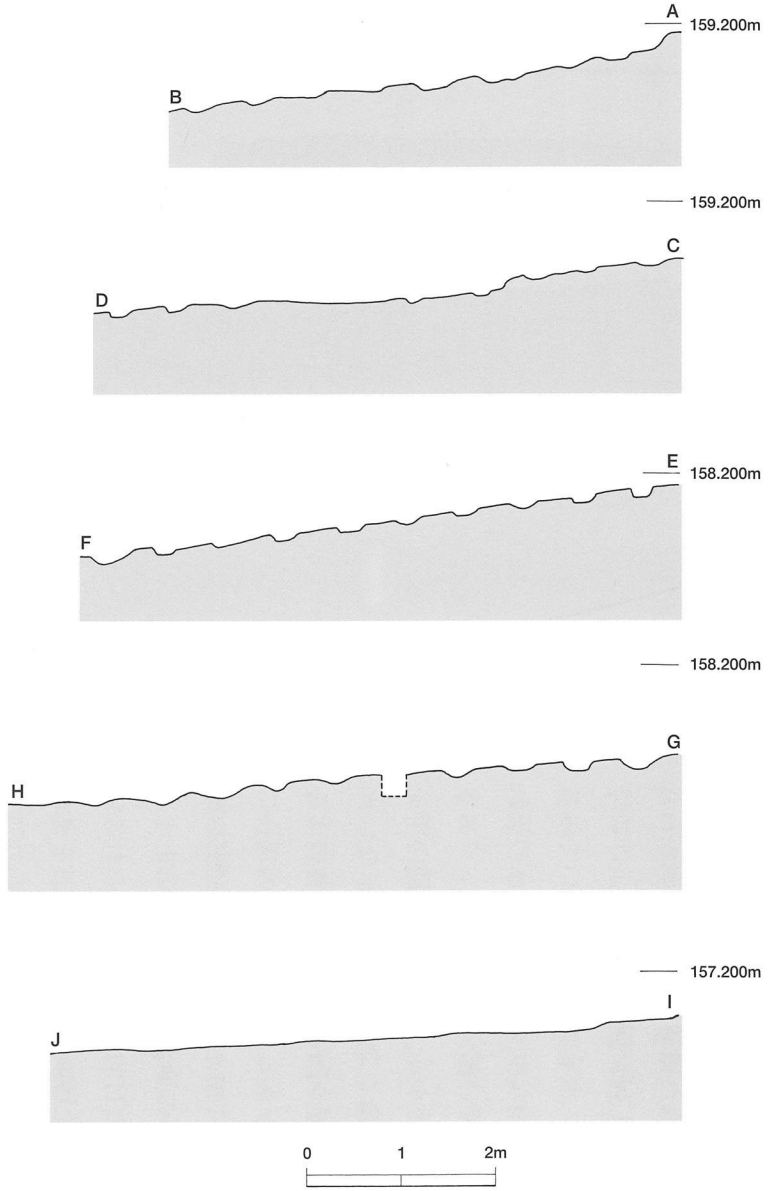
そうした観点からピット列の掘り込まれた場所を検討してみると、比較的傾斜の急な箇所であることが分かる。また一部のピットでは検出面で低レベル側にカーブの極を持つ三日月形の砂層が薄く堆積していた。大岩田村ノ前遺跡の場合、報告書掲載の図面から判断する限り、本遺跡と異なる平坦な地形に



第 9 図　1号道路状遺構実測図 (1) (S=1/160)



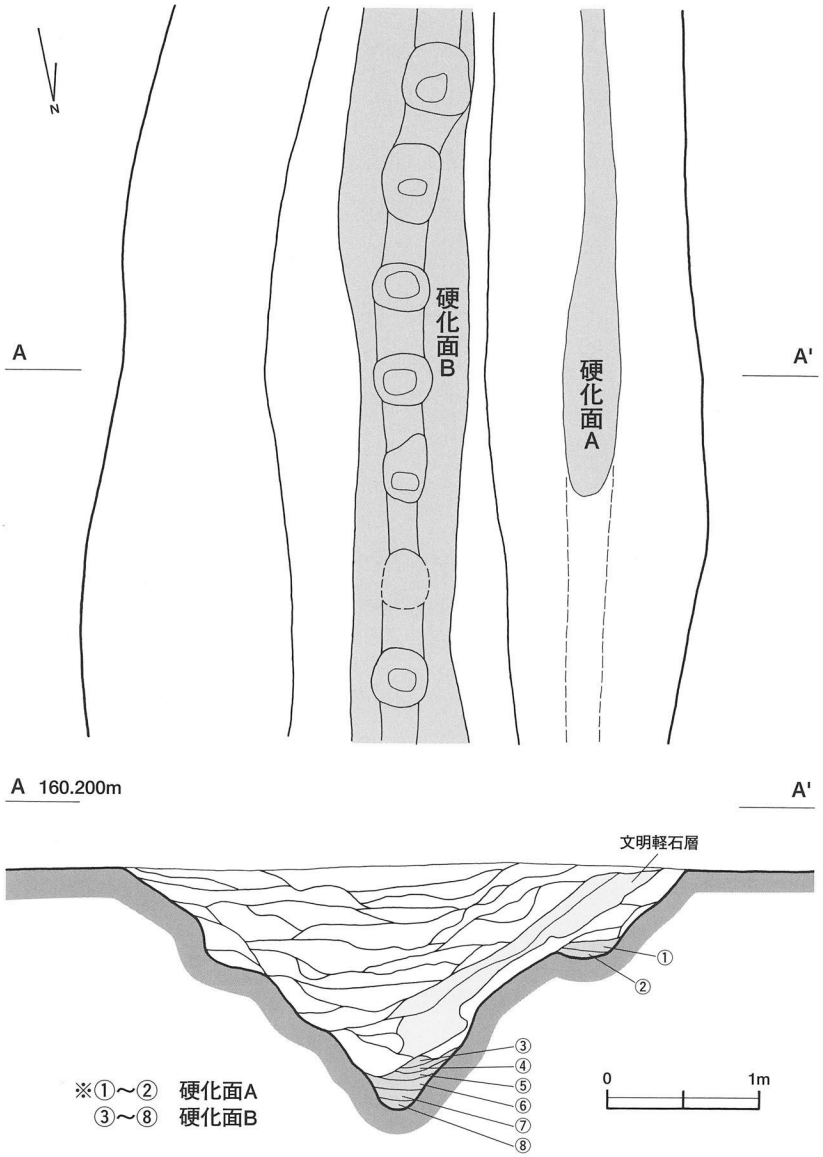
図版１　Ａ区１号道路状遺構完堀状況（北から）



第10図　1号道路状遺構実測図(2)　（S=1/80）

構築された遺構であるにもかかわらずピット列が掘られているように見えるが、水平に補助線を引いてみると、平坦な中でも凹地での水の流れてきやすい部分にのみピットがあることが分かる。これら2遺跡の所見から結論を急ぐことはできないが、排水の便を図るという説に首肯するところがある。また遺跡例の場合にはそれに加えて、傾斜部の舗装(硬化面B)の崩落することを防止するといった目的があったかもしれない。

次に土層断面について検討を進めてみたい。断面では文明3年(1471)発生の桜島噴火による火山灰と同定されている文明軽石の厚い堆積層が観察された。第11図では文明軽石層にうすく網をかけてある。調査時の所見ではこの層は不純物がほとんどない上、火山灰の粒径が下層ほど大きく上層にいくにしたがって小さくなっており、プライマリーな堆積と考えられる。またその堆積層は硬化面Bの真上にまで入り込んでいる。土層断面を提示した部分ではたまたま大きく失われているが当初はおそらくレンズ状に堆積していたものであろう。その硬化面Bであるが、表層は比較的良好な状態で残存していた。これらの状況から、硬化面Bは文明軽石の降下によって直接路面がパックされたものと考えられる。この点からすると少なくとも硬化面Bの使用年代は15世紀中葉と見なしてよい。



①黒褐色土(10YR 2/1.5) 細粒から粗粒の御池軽石を5%含む 硬化面を形成
②黒色土 (10YR 1.7/1) 細粒から粗粒の御池軽石を10%含む 硬化面を形成
③黒色土 (10YR 1.85/1) P11などのパミスを含む 弱粘質土 硬化面を形成
④黒色土 (10YR 1.7/1) P11などのパミスを含む 弱粘質土 硬化面を形成
⑤黒色土 (10YR 1.85/) P11などのパミスを含む 弱粘質土 硬化面を形成
⑥黒色土 (10YR 1.7/1) P11などのパミスを含む 弱粘質土 硬化面を形成
⑦黒色土 (10YR 1.85/) P11などのパミスを含む 弱粘質土 硬化面を形成
⑧黒褐色土(10YR 1.85/) P11などのパミスを含む 弱粘質土 硬化面を形成

第11図　1号道路状遺構実測図(部分)・土層断面図(S=1/50)

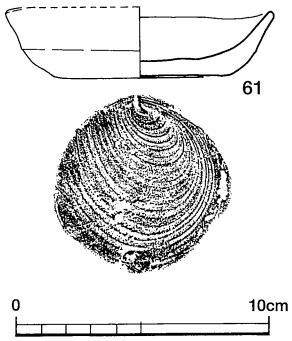
問題はその後の再編成がどのように行われたかである。先述したように土層断面提示部では文明軽石層を大きく削るような掘り込みが認められるが、他の箇所では文明軽石がより良好な堆積状況を示しており、この部分については局所的な攪乱と考えたほうがよい。ただしより浅い掘り込みが全域にわたってなされていることは確実で、また他の道路状遺構では文明軽石層の上面が硬化している状態が看取された。すなわち文明軽石降下により道路が埋没した直後から復旧が行われたことになる。なお復旧後、この道路が最終的にいつまで使用されたかについては、遺構そのものから読み取ることは困難である。

(4)土壙墓（ＳＤ）

１号土壙墓（ＳＤ１：第13図）

１号土壙墓はＴ－20グリッドの北側、南西から北東に緩やかに傾斜する斜面上に位置する。検出面は第Ⅴｂ層である。耕作による攪乱が及んでいたために、実際の掘り込み面よりもかなり下がった面での遺構検出となっている。規模は長軸1.21ｍ、短軸0.74ｍの隅丸方形プランを呈し、検出面からの深さは６～14㎝を測る。長軸方向はＮ－60°－Ｅを指す。埋土は文明軽石粒及び安永軽石粒(？)を20%程度含んだ粘性の高い黒色土の単一層である。出土遺物は床面から10～14㎝程の浮いた位置で、北側壁面よりで土師質の坏、東側壁面よりで錆着した状態の銭貨７枚が出土している。南部九州で多く認められる事例同様、７枚組の六道銭を副葬したものと想定される。
銭貨の詳細は第２表『１・２号土壙墓出土銭貨一覧』を参照いただきたい。

なお、覆土は篩(ふるい)にかけたが人骨・鉄釘等は確認できなかった。出土遺物は第12図に示している。61は土師質の坏である。口唇部が３分の１程欠損しているがほぼ完形である。調整は内外器面ともに轆轤による回転ナデが施されている。外器面には部分的にススと鉄分が付着している。切り離しは回転糸切り技法で、板状圧痕のないやや上げ底気味の底部を持つ。

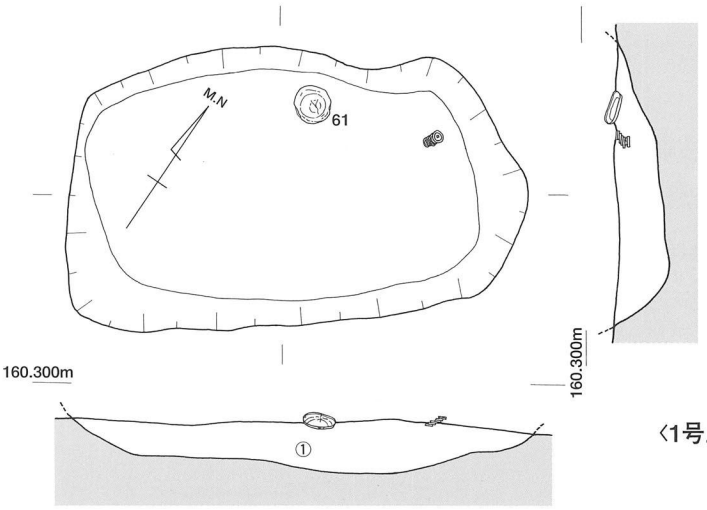


第12図　１号土壙墓出土遺物実測図(Ｓ＝1／3)

２号土壙墓（ＳＤ２：第13図）

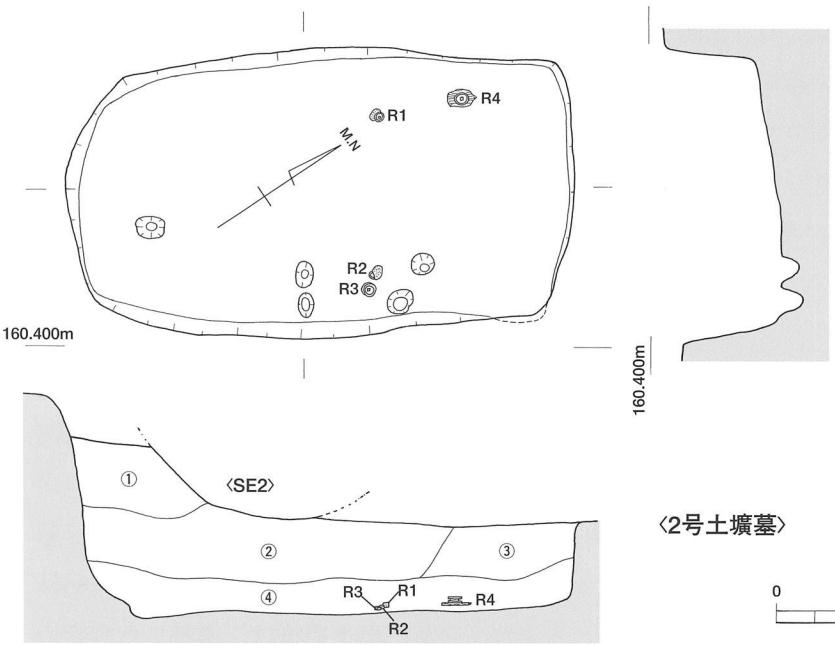
１号土壙墓の南側2.4ｍの南西から北東へ緩やかに傾斜する斜面上に位置する。長軸1.34ｍ、短軸0.76ｍ、検出面からの深さ約25㎝を測る。隅丸方形プランを呈し、長軸方向はＮ－34°－Ｅを指す。検出面は第Ⅴｂ層である。壙底から25㎝以上の上位は溝状遺構(ＳＥ２)等により削平を受けている。埋土は基本的に黒色土層であるが文明・御池軽石の混入の様子で４層に分層している。第１層～３層には文明軽石粒、第４層には文明軽石粒に加えて御池軽石粒が僅かに含まれている。出土遺物は、錆着した状態の銭貨が３地点(第13図 北からＲ１・２・３と仮称する)、銭貨３枚が載った木質１点(第13図R4と仮称する)がほぼ床面で確認されている。北東部で検出した木質に載った３枚の銭貨は、上から「元祐通寶」、「崇寧通寶」、「元祐通寶」の順に重なっていた。残りの銭貨については短軸から20㎝東側でほぼ直線上に並んだ状態で、Ｒ１は銭貨12枚、Ｒ２は８枚、Ｒ３は７枚、それぞれ錆着した状態で確認されている。また、各々の穿(せん)には特徴を同じくする緡(さし)が残存しているので、埋葬された時にはこれらの銭貨は一本の緡に通された緡銭状のものであったと推測される。錆が著しく剥離できないため銭貨名が分からないものもあるが、「洪武通寶」が出土枚数の約４割近くを占めている。銭貨については第２表『１・２号土壙墓出土銭貨一覧』を参照いただきたい。

なお、埋土は全て篩にかけたが、骨片・鉄釘等は確認できなかった。木質は長さ65.0㎜、幅47.0㎜厚さ8㎜のスギ材である。おそらく木棺の一部であったと考える。



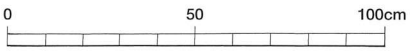
〈1号土壙墓〉

①黒色土(10YR　1.7/1)
粗粒砂相当の文明軽石粒および安永軽石粒(?)を20%程度含む　しまりは地山の第Ⅴ層よりやや弱い　粘性は高い

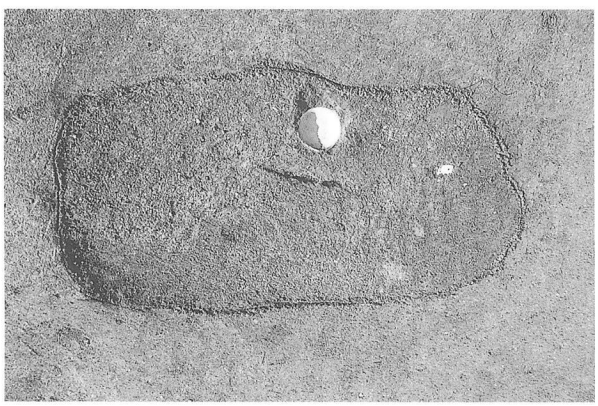


〈2号土壙墓〉

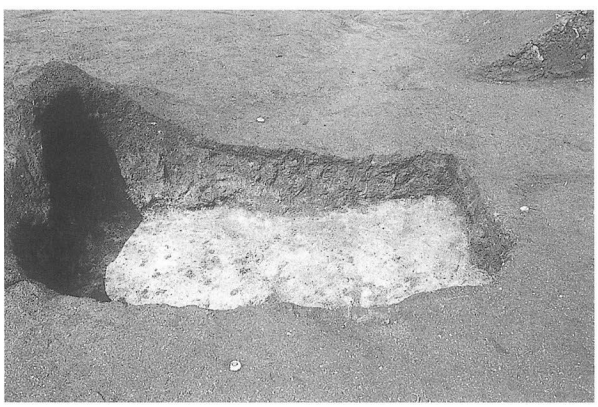
①黒色土(10YR　1.85/1)
径2～5㎜の文明軽石粒を約15%程度
同サイズの安永軽石(?)を5%程度含む
しまり弱く粘性低い
②黒色土(10YR　2.5/1)
径2～5㎜の文明軽石粒を約20%程度
同サイズの安永軽石粒(?)を7%程度含む
さらにしまり弱く粘性低い
③黒色土(10YR　2/1)
色調以外の層相は②と同じ
④黒色土(10YR　2/1)
①と同サイズの文明軽石・安永軽石(?)をそれぞれ5%、3%程度含む他、御池軽石を3%程度含む
しまり弱く粘性低い



第13図　1・2号土壙墓実測図(S=1/20)



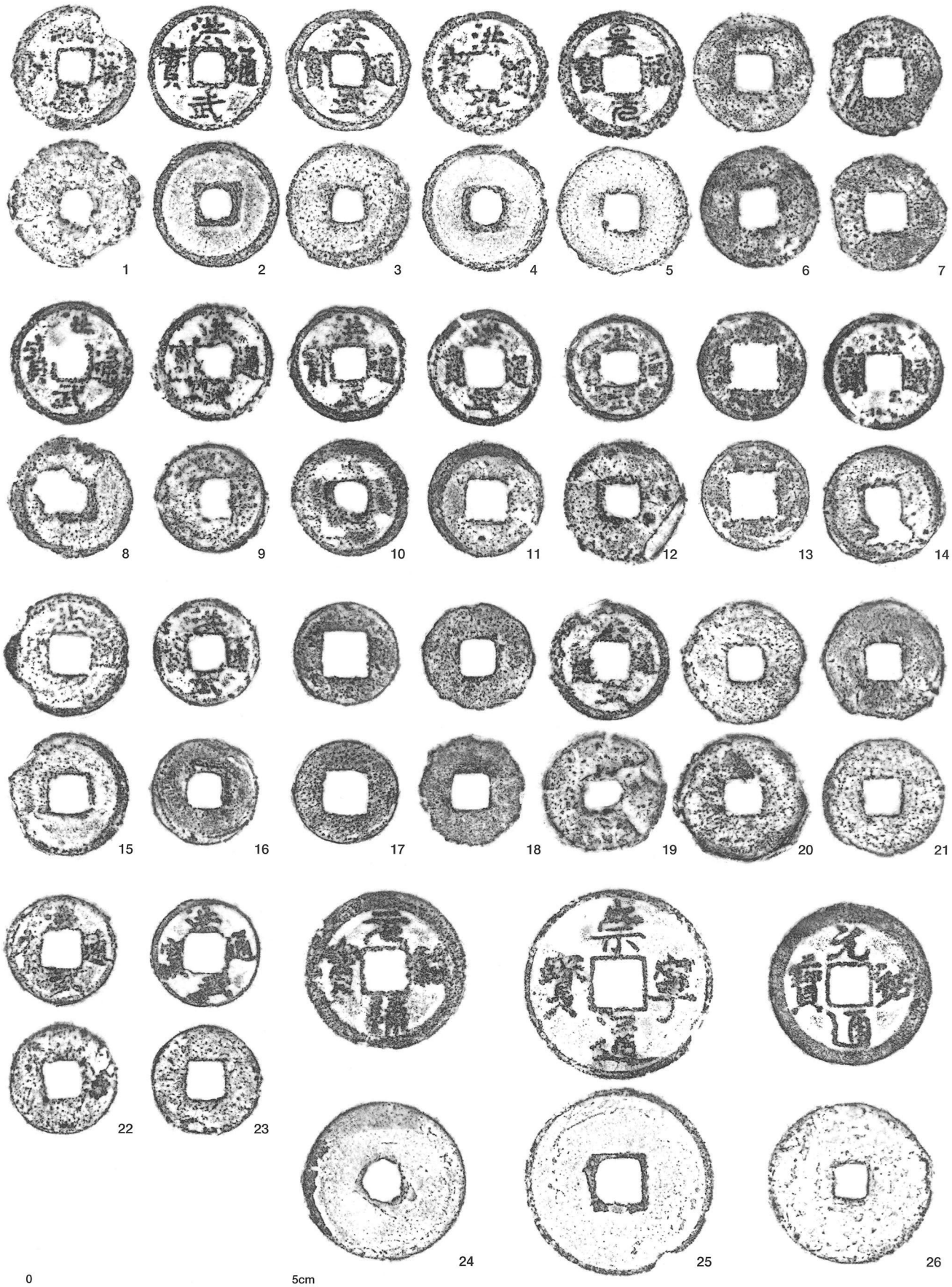
図版2　A区1号土壙墓検出状況



図版3　A区2号土壙墓完掘状況

出土遺構	挿図番号	銭貨名	王朝	初鋳年	外径(㎜)	内径(㎜)	重量(ｇ)	備　考
ＳＤ１	1	洪武通寶	明	1368年	23.2	18.6	2.5	一部欠損
ＳＤ１	—	祥符元寶	北宋	1008年	23.6	19.0	1.7	一部欠損
ＳＤ１	2	洪武通寶	明	1368年	22.9	20.4	2.8	
ＳＤ１	3	洪武通寶	明	1368年	22.9	19.1	2.5	
ＳＤ１	4	洪武通寶	明	1368年	23.6	18.8	2.8	
ＳＤ１	5	景祐通寶	北宋	1034年	23.2	19.1	2.6	
ＳＤ１	—	洪武通寶	明	1368年	?	?	0.8	一部欠損
ＳＤ２	—	?	?	?	22.6	—	(2.6)	(Ｒ１)一部欠損
ＳＤ２		?	?	?	21.6	—		(Ｒ１)一部欠損
ＳＤ２	6	無文銭(？)	?	?	21.8	—	1.6	(Ｒ１)
ＳＤ２	7	無文銭(？)	?	?	20.9	—	1.3	(Ｒ１)一部欠損
ＳＤ２	8	洪武通寶	明	1368年	22.1	19.1	2.2	(Ｒ１)一部欠損
ＳＤ２	9	無文銭(？)	?	?	20.1	18.7	(5.8)	(Ｒ１)
ＳＤ２		?	?	?	?	?		(Ｒ１)
ＳＤ２		?	?	?	?	?		(Ｒ１)
ＳＤ２		洪武通寶	明	1368年	21.6	19.0		(Ｒ１)
ＳＤ２	10	洪武通寶	明	1368年	21.5	18.2	1.4	(Ｒ１)一部欠損
ＳＤ２	11	洪武通寶	明	1368年	21.0	17.6	1.4	(Ｒ１)一部欠損
ＳＤ２	—	洪武通寶	明	1368年	21.4	17.9	0.9	(Ｒ１)一部欠損
ＳＤ２	12	洪武通寶	明	1368年	19.3	17.5	(2.4)	(Ｒ２)
ＳＤ２		?	?	?	21.6	—		(Ｒ２)一部欠損
ＳＤ２	13	無文銭(？)	?	?	19.8	—	0.9	(Ｒ２)
ＳＤ２	14	洪武通寶	明	1368年	21.3	18.7	1.3	(Ｒ２)一部欠損
ＳＤ２	15	洪武通寶	明	1368年	22.5	19.4	1.0	(Ｒ２)一部欠損
ＳＤ２	16	洪武通寶	明	1368年	19.4	16.8	1.2	(Ｒ２)
ＳＤ２	17	無文銭(？)	?	?	18.9	—	0.7	(Ｒ２)
ＳＤ２	18	無文銭(？)	?	?	20.3	—	1.2	(Ｒ２)一部欠損
ＳＤ２	—	?	?	?	22.2	18.1	1.4	(Ｒ３)
ＳＤ２	19	?	?	?	20.6	?	(2.5)	(Ｒ３)一部欠損
ＳＤ２		洪武通寶	明	1368年	21.4	17.4		(Ｒ３)一部欠損
ＳＤ２	20	無文銭(？)	?	?	22.4	20.0	2.2	(Ｒ３)一部欠損
ＳＤ２	21	無文銭(？)	?	?	21.8	19.6	1.8	(Ｒ３)一部欠損
ＳＤ２	22	洪武通寶	明	1368年	19.8	17.0	1.1	(Ｒ３)
ＳＤ２	23	洪武通寶	明	1368年	19.7	17.7	1.0	(Ｒ３)一部欠損
ＳＤ２	24	元祐通寶	北宋	1086年	30.0	23.2	7.0	(Ｒ４)折二銭 篆書
ＳＤ２	25	崇寧通寶	北宋	1102年	34.8	30.8	8.8	(Ｒ４)当十銭 一部欠損
ＳＤ２	26	元祐通寶	北宋	1086年	29.7	22.3	6.5	(Ｒ４)折二銭 行書

第２表　1・2号土壙墓出土銭貨一覧



第14図　1・2号土壙墓出土銭貨拓影（S=1/1）

(5)柵列(第15図)

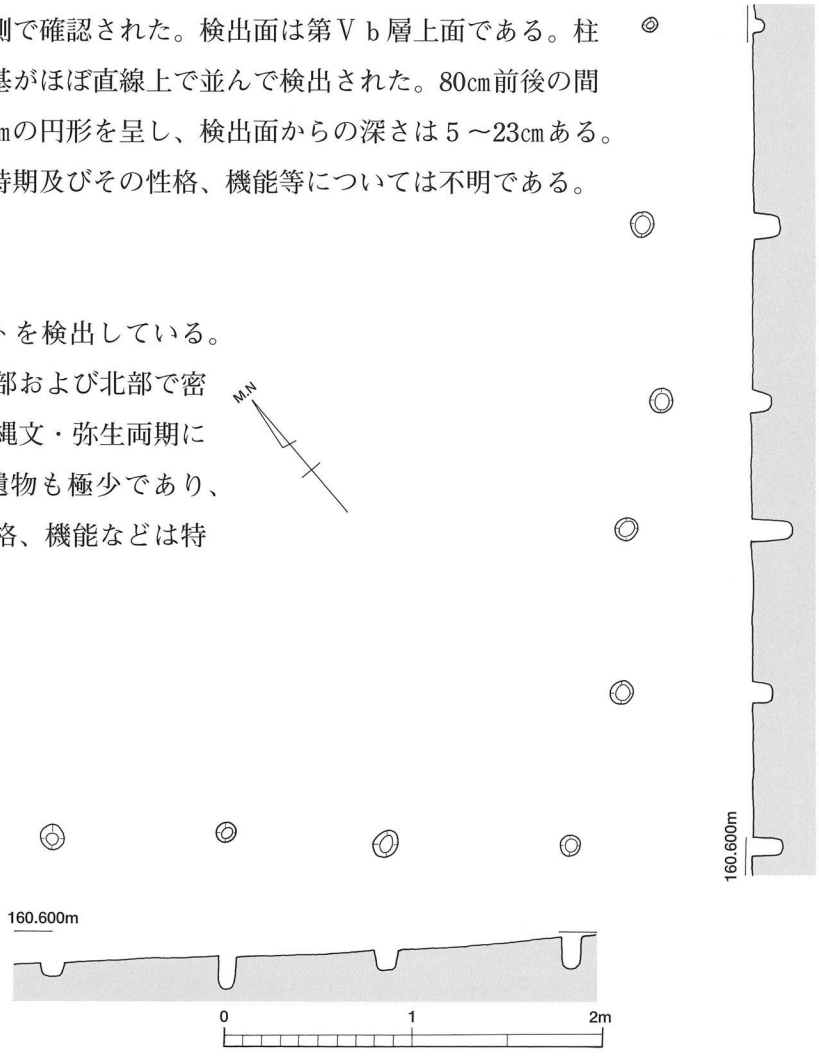
調査区のR—27・28グリッドの北側で確認された。検出面は第Ⅴb層上面である。柱穴は北東方向に6基、北西方向に4基がほぼ直線上で並んで検出された。80cm前後の間隔で配置されており、径が約8～14cmの円形を呈し、検出面からの深さは5～23cmある。柱穴からの遺物の出土はなく、構築時期及びその性格、機能等については不明である。

(6)ピット群(第5図)

調査区内より3,000基余りのピットを検出している。確認面は第Ⅴb層である。調査区西部および北部で密集が見られる。これらのピット群は縄文・弥生両期にわたる遺構と推定されるが、共伴遺物も極少であり、規則性にも乏しかったので、その性格、機能などは特定できなかった。

(7)包含層出土遺物(第16～18図)

第Ⅳ層(文明軽石を含む黒色土層)及び第Ⅴ層(御池軽石を含む黒色土層)から出土している。出土遺物は約1,300点であるが細片が多く図化できたものは僅か44点である。1～28は縄文土器の深・浅鉢、42～56は弥生土器の甕である。第16～18図に図示・掲載する。



第15図　棚列ピット配置図（S=1/40）

縄文土器（第16・17・18図　1～28）

1．全面横位のナデによる調整が施されている。外面は部分的に薄くススが付着する。
2．内器面に指頭圧痕が残る。器面調整は全面ナデで、外器面は全体に真っ黒くススが付着している。
3．精製浅鉢である。胴部が屈曲し、口縁端部は内湾している。口唇部直下外面には凹線が巡る。内外面ともミガキ調整を施し、内器面は部分的に炭化物の付着が見られる。
4．精製浅鉢で縄文晩期に比定される黒川式土器である。口唇部直下外面には沈線が巡る。
5．口唇端部外面に沈線が巡り、その下位の肥厚した部分には貝殻文が施されている。外面にはススが付着している。
6．口唇部内面は剥落している。口縁部をやや肥厚させ、口唇部下位に2条の平行沈線を巡らしている。外器面には丁寧なナデが施され、ススの付着が見られる。
7．粗製土器である。口縁部に断面三角形の幅広の粘土帯を貼付けており、口縁部に向かって僅かに外反する。内外面とも風化が著しく調整は不明である。外面にはススが付着する。

8．口縁が若干肥厚する。器面調整は外面は斜め方向の条痕後横ナデ、内面は横方向の条痕が施されている。

9．口唇部直下に断面三角形の貼付突帯を有し、外面には全体的に薄くススが付着する。

10. 口縁部に向かってわずかに開く器形である。口唇部下２㎝に径５㎜の穿孔が施してある。外器面は風化が著しく調整は不明である。

11. 精製浅鉢である。頸部に凹線を有する。外器面は横位のミガキ、内器面は風化し調整は不明である。外器面は部分的にススの付着が見られる。

12. 胴部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外湾していくものと思われる。外器面はススの付着が著しい。

13. 三角形の貼付け突帯に浅い刻み目が施されている。内外器面は横方向の条痕後ナデが施している。突帯下位にはススの付着が見られる。

14. 精製浅鉢で縄文晩期に比定される黒川式土器である。胴部が屈曲し、口縁部は短く外反する。口唇部直下外面には沈線が巡る。調整は内外面ともに口縁部から胴部上半は横位のミガキ、胴部下半は丁寧なナデが施してある。

15. 浅い刻み目を持つ貼付突帯を有する。外面にはススが付着し、内外面はナデにより仕上げられている。

16. 精製浅鉢である。口縁部が「く」字状に短く外反しており、口縁部内面には段を有す。内外器面ともミガキ調整であるが、一部風化している。

17. 精製浅鉢である。胴部は屈折している。口縁部は弧状に屈曲し、口縁端部は直線的に立ち上がり、口唇部直下外面には沈線を巡らしている。外面にススの付着が見られる。

18. 頸部に蝶ネクタイ状の貼付けを有する。外器面はススが付着している。

19. 粗製土器である。部分的に剥落しているが、横方向にやや深い沈線、斜め方向に平行な細く浅い沈線が施されている。外器面には全体的にススが付着する。

20. 精製浅鉢である。胴部屈曲部に蝶ネクタイ状の貼付突帯を有する。内外面の調整はミガキである。

21. 精製浅鉢である。口縁部外面が屈曲し内面には段を有する。内外面は横方向のミガキ調整である。

22. ７と同一個体である。外器面にススの付着が見られる。

23. 粗製深鉢である。内外面とも風化ぎみで、胴部下位にはススの付着が見られる。

24. 底部は貼付であり、貼付痕を指によりナデ消している。器面調整は内外面ともナデである。

25. 底部の立ち上がりは直線的である。器面調整は底面はケズリ、外面は横ナデ後、縦・斜め方向のミガキ、内面はナデ調整である。

26. 平底を呈し、底部外面は張り出している。内面には炭化物の付着が見られる。

27. 底部外面端部が張り出している。全面ナデによる器面調整が行われている。

28. 底部が張り出さず直線的に立ち上がる器形を呈すると思われる。外器面には丁寧な縦方向のナデが施されており、部分的にススの付着が見られる。

弥生土器(第18図　42～56)

42. ２条の断面三角形の貼付突帯を有する。内外面ともに風化が著しく調整は不明である。

43. 口縁部端部に逆「L」字形の貼付突帯を有し、口縁部には凹線が見られる。器面調整は外面が横位のミガキ、内面はナデである。

44. 突帯はつまみ出しにより作られており、口唇部上面は平坦である。内外器面ともにナデ調整である。外面には全面ススの付着が見られる。

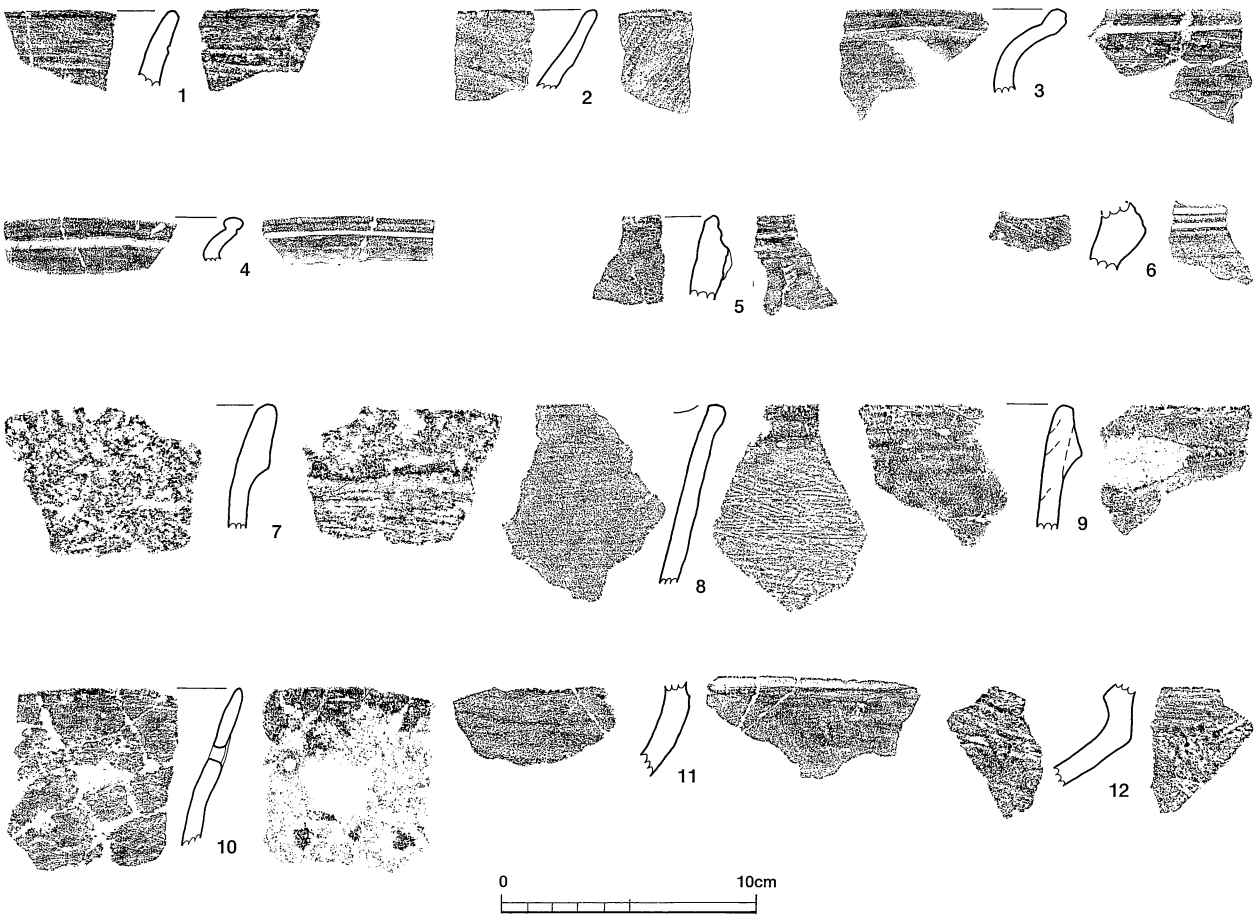
45. 口縁部端部に逆「L」字形の貼付突帯を有し、口縁部には凹線が見られる。口縁部外面に段を有する。

46～49. ２～３条の断面三角形の貼付突帯を巡らす。いずれもナデによる調整が施されているが、風化ぎみである。

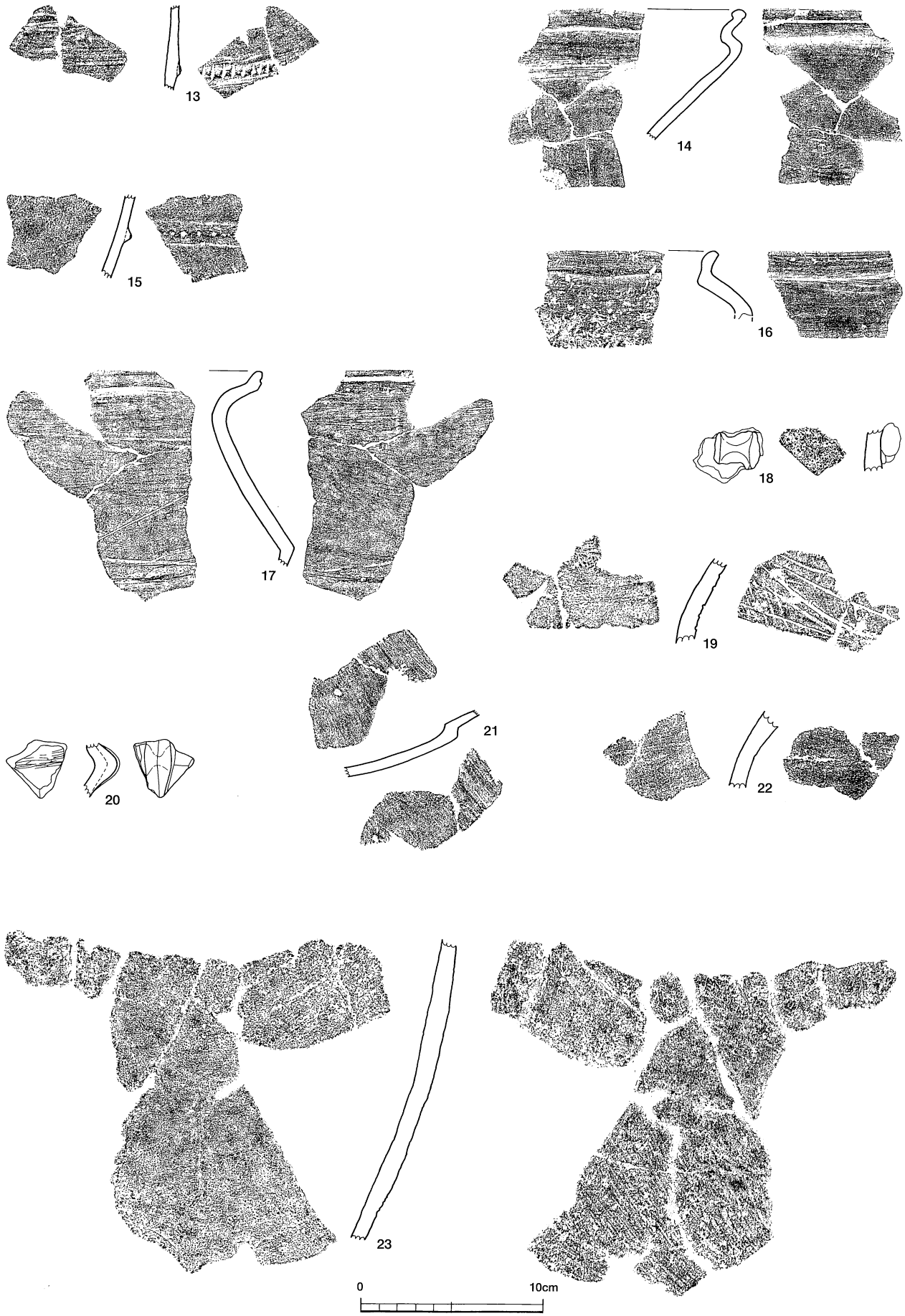
50～54. ２～４条の断面三角形の粗雑な突帯をもち、各突帯には爪で斜め方向の刻み目が施されている。この突帯が貼付によるものか、つまみ出しによるものかは不明である。内外面ともナデによる調整が行われている。

55. ３条の断面三角形の貼付突帯を巡らしている。上２本の突帯下部直下にはヘラ痕跡を残す。調整は外面が横位のナデ、内面はナデである。

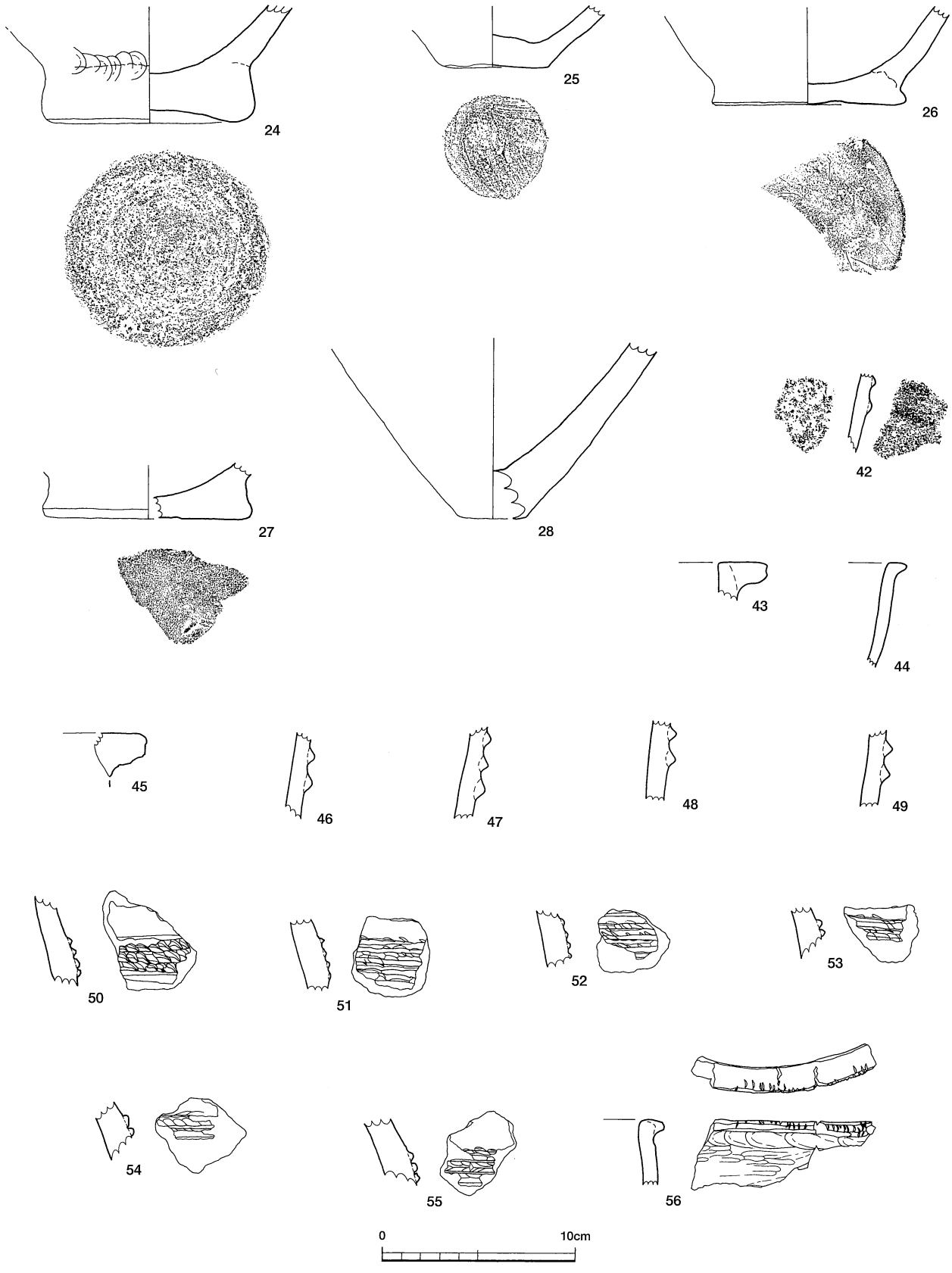
56. 口唇部上面は水平であり浅い刻み目が施されている。器面調整は外面が横方向のミガキ、内面は横方向のナデである。外面は部分的にススが付着する



第16図　A区出土遺物実測図（1）（S=1/3）



第17図　A区出土遺物実測図（2）（S=1/3）



第18図　A区出土遺物実測図(3) (S=1/3)

第４節　Ｂ区の調査

１．調査の概要

Ｂ区では、道路敷設部分の700㎡（約11m×約70m)の調査を行った。現代の耕作に依る攪乱が随所で及んでいたが、第Ⅴａ層上面で遺構検出を行った結果、土坑(１基)、ピット群が確認されている。遺物は53点(1.1kg）が出土している。内訳は縄文土器片35点(0.45kg）、弥生土器片18点(0.65kg）である。その後、第Ⅵ層上面(御池軽石層)まで掘り下げ、遺構の確認を行ったが認められなかったため調査を終了した。

以下、遺構ごとにその特徴と出土遺物について記述する。

２．遺構と遺物

(１)土坑(ＳＣ)

１号土坑(ＳＣ１：第20図)

１号土坑は、AU―41グリッドの南西隅に位置する。規模は長軸2.8ｍ、短軸1.94ｍ、検出面からの深さは8.0～24.0㎝を測る。隅丸長方形プランを呈し、長軸方向はほとんど東西の軸にのっている。検出面は第Ⅴａ層であり、南側の３分の２程を調査の際の不注意により掘りすぎてしまっている。床面は平坦で、ほぼ床面で弥生土器片が13点出土している。埋土は黒色土で御池軽石粒の混入の割合で４層に分層している。出土遺物は第21図に示している。57、58はいずれも弥生土器の甕である。

57. 胴部である。１条の断面三角形の貼付突帯をもち、調整は外面が横方向のナデ、内面は斜め方向のナデである。外面には薄くススが付着する。

58. 底部である。厚みのある平底を呈し、底部から胴部に向かってシャープに立ち上がる。器面調整は外面が横位の刷毛目、内面はナデである。内部底面に炭化物が付着する。

(２)ピット群 (第19図)

調査区内、第Ⅴａ層で約120基のピットを検出した。調査区全域に分布しているが、中央部やや南側で集中が見られる。ピットの規模は経20～40㎝、深さ20～40㎝で円形及び楕円形を呈する。埋土の状況(文明軽石の混入の度合)で３種類に分類した。これらのピット群は中世の遺構と推定されるが、供伴遺物もなく、規則性にも乏しかったので、その性格機能等については特定できなかった。

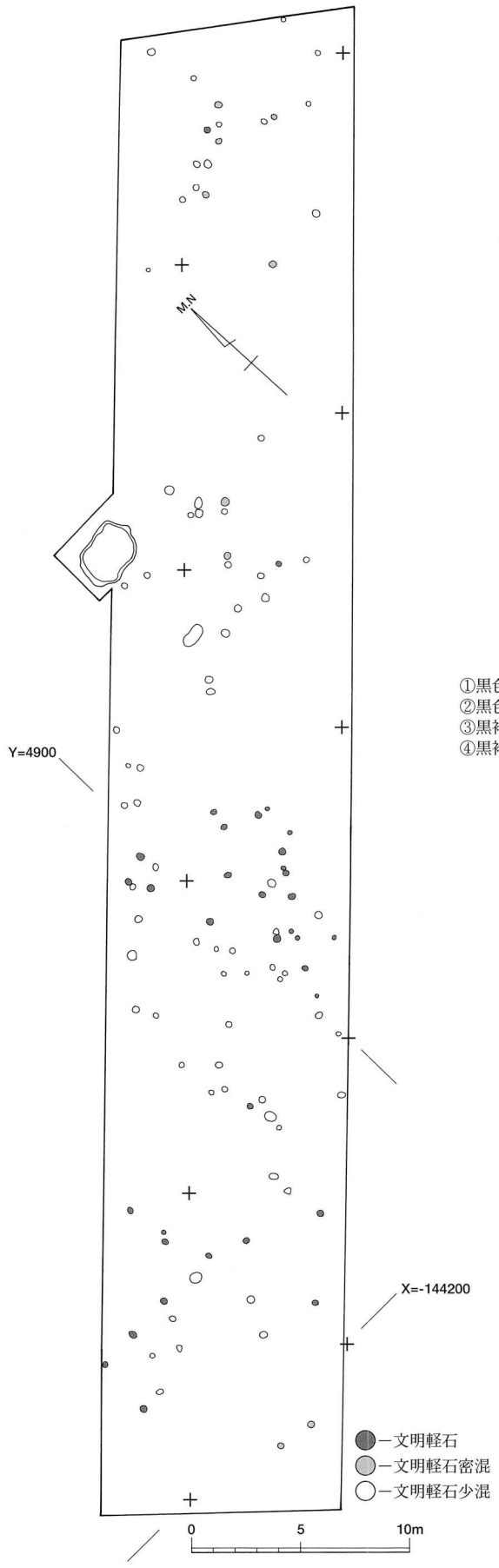
(３)包含層出土遺物 (第21図)

第Ⅳ層および第Ⅴ層から出土しているが、遺物数は土坑内も含めても僅かに53点である。29は縄文土器の深鉢、59、60は弥生土器の甕である。第21図に図示・掲載する

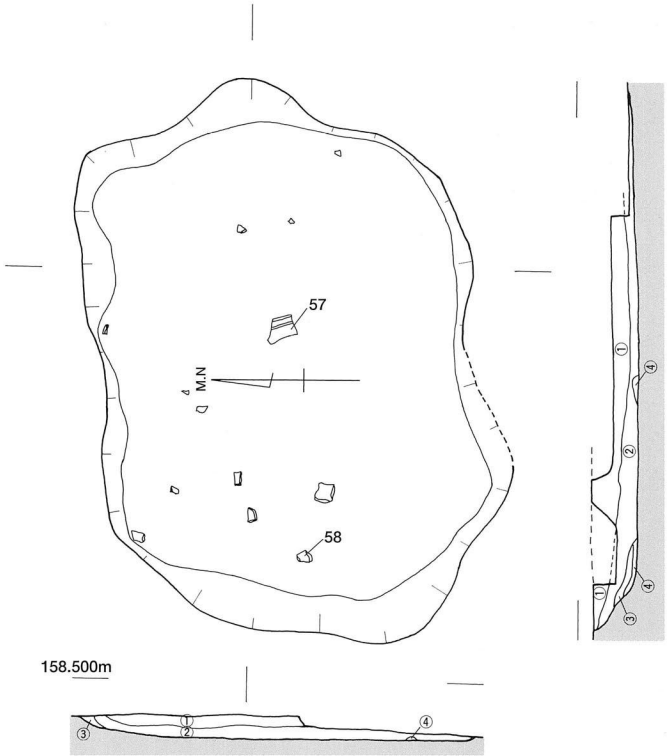
29. 胴部であり、やや「く」字状に屈曲する。外面にはヘラ撫でが施されている。

59. 口縁部である。「Ｌ」字状の口縁を呈し、口縁部上面は幅広の平坦面である。突帯貼付部には明瞭な指押さえ痕跡を残す。

60. 胴部である。断面台形状の貼付突帯を有する。外面にはやや不明瞭であるがススが付着する。

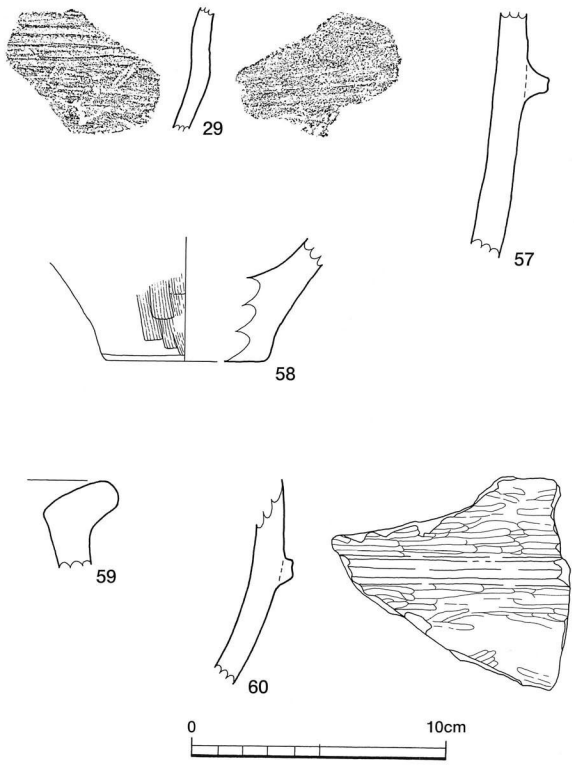


第19図　B区遺構分布図（S=1/300）



①黒色土　(10YR2／1)　非粘質土　径1mmの御池軽石粒をごくわずかに混入　しまりなし
②黒色土　(10YR2／1)　非粘質土　径1mmの御池軽石粒をわずかに混入　しまり弱い
③黒褐色土 (10YR2／2)　非粘質土　径1mmの御池軽石粒を多く混入しまり若干あり
④黒褐色土 (10YR2／2)　弱粘質土　径1mmの御池軽石粒を密に混入　径2mmの御池軽石粒をわずかに混入　しまりあり

第20図　1号土抗実測図（S=1/40）



第21図　B区出土遺物実測図（S=1/3）

第５節　Ｃ区の調査

１．調査の概要

Ｃ区は面積9,300㎡、標高161～163ｍの北向きの緩斜面である。調査は第Ⅳｃ層～第Ⅴａ・ｂ層を人力で掘り下げながら遺構検出をおこなった。その結果、竪穴住居跡(１軒)、掘立柱建物跡(１軒)、溝状遺構(１条)、土坑(４基)、ピット群を確認している（第22図）。遺物は約320点(7.5kg）が出土し、内訳は縄文土器片230点(5.6kg）、弥生土器片40点(0.6kg）等である。

Ｃ区の調査終了後、道路敷設部分に１号トレンチ～４号トレンチ(５ｍ×20ｍ)、調査区南端に５号トレンチ(５ｍ×５ｍ)、Ａ区北端に６号トレンチ(５ｍ×８ｍ)の計６ヵ所で、第Ⅶ層以下の遺物包含層の確認を行った。その結果、縄文時代前期の土器片１点と旧石器時代の細石刃石器群を確認することができた。なお、『道路敷設部分の調査』については第６節を参照いただきたい。

以下、遺構毎にその特徴と出土遺物について記述する。

２．遺構と遺物

(１)竪穴住居跡(ＳＡ)

１号住居跡(ＳＡ１：第23図)

１号住居跡はE―12グリッド北部の東向きの緩斜面で確認した。第Ⅴａ・ｂ層での検出を試みたが、黒色土での遺構検出は難しく、検出面は第Ⅵ層の御池軽石層上面まで下がってしまった。そのため、壁の立ち上がり等は確認できなかった。さらに、東西に走行する現代の攪乱をうけているなど、現状は決して良好ではなかった。主柱穴は中央に１基で、径が30～60㎝、深さ30㎝である。壁際には約16～28㎝、深さ12～28㎝のピット約10基が確認されている。遺構の床面と比定される部分は、ほぼ平坦である。ピットの配置から住居跡と比定される部分は楕円形プランを呈し、長軸3.0ｍ、短軸2.4ｍを測り、長軸方向はＮ―43°―Ｗを指す。縄文時代後期後葉から晩期前葉にかけての住居跡ではないかと考えている。

(２)掘立柱建物跡(ＳＢ)

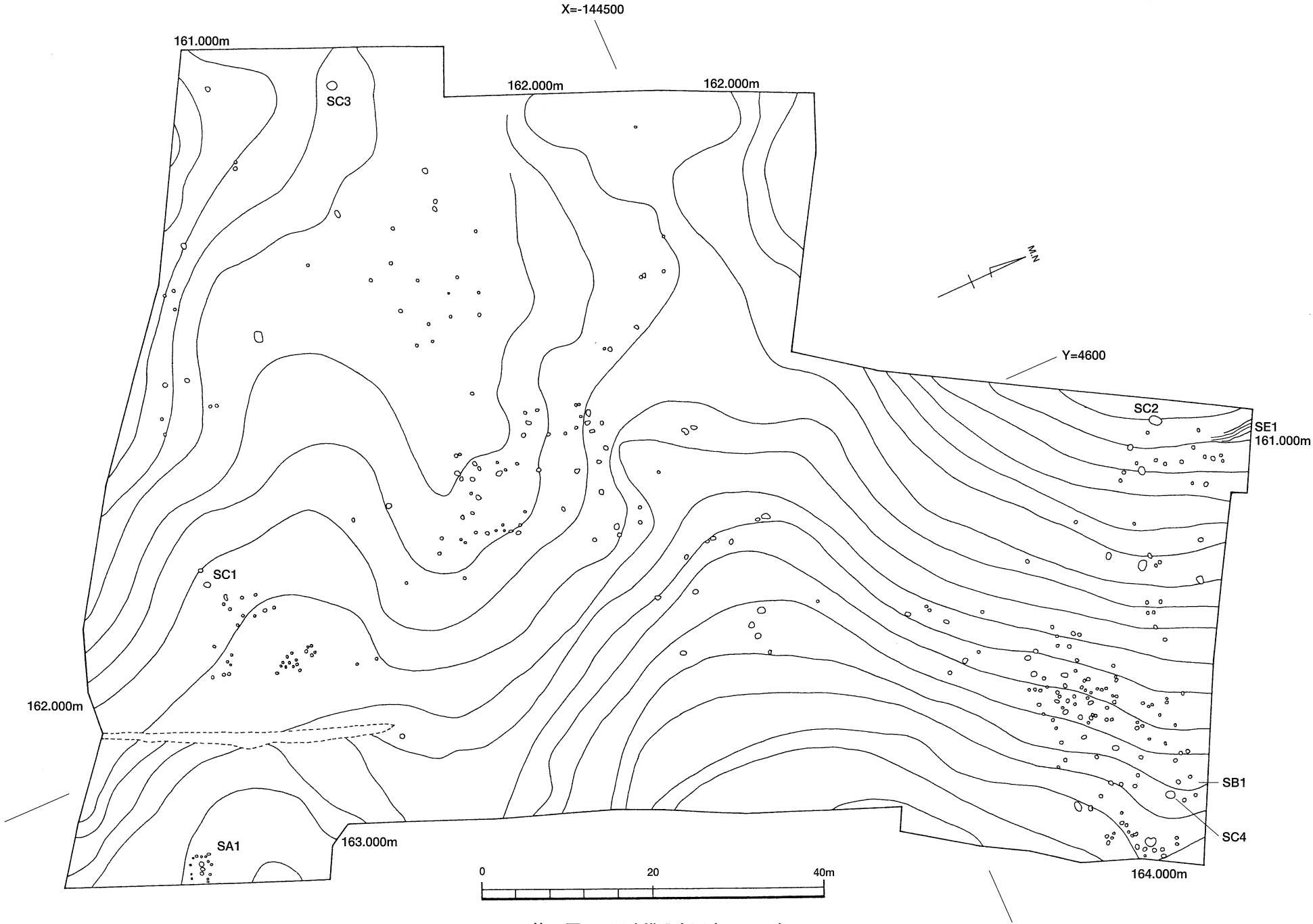
１号掘立柱建物跡(ＳＢ１：第24図)

１号掘立柱建物跡は、Ｐ―16グリッドのほぼ中央に位置し、南１ｍに２号土坑がある。構造は桁行１間、梁行１間の東西棟である。規模は桁行2.06ｍ、梁行1.60mを測る。棟方位はＮ―82°―Ｗを指す。柱穴の掘方は東側柱の北から第１柱が長軸0.42ｍ、第２柱が長軸0.40ｍ、西側柱の北から第１柱が長軸0.38ｍ、第２柱が長軸0.36ｍのいずれも楕円形を呈し、深さ0.3～0.6ｍを測る。構築時期及び性格については不明である。また、遺構に共伴する遺物は出土していない。

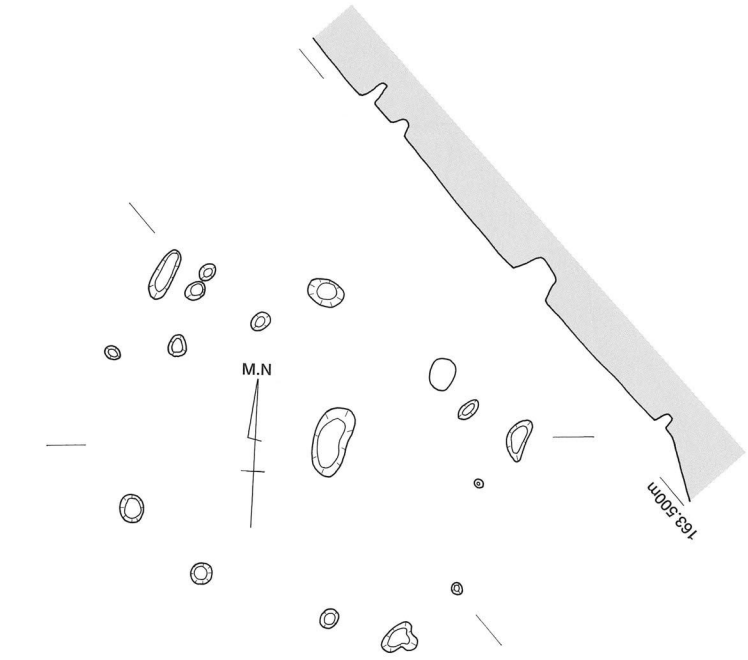
(３)溝状遺構(ＳＥ)

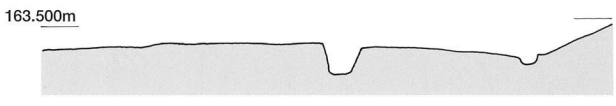
１号溝状遺構(ＳＥ１：第25図)

１号溝状遺構は、Ｒ―12グリッドに位置する。溝の北側は調査区外に延びる。第Ⅴｂ層上面で検出し



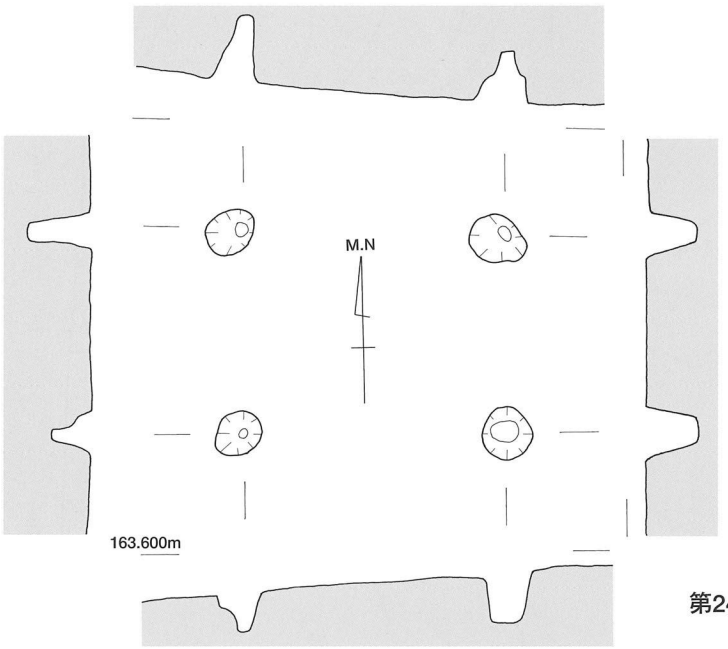
第22図　C区遺構分布図〔S=1/600〕



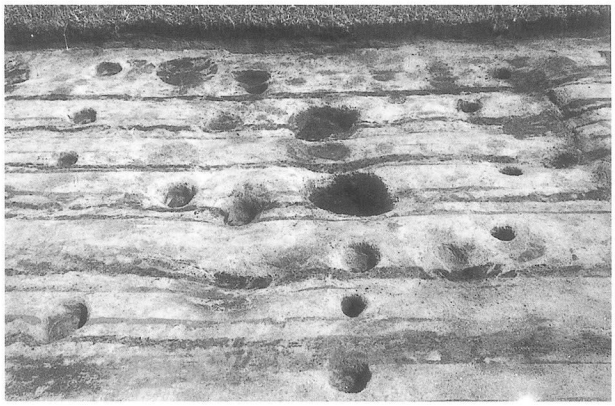


第23図　1号竪穴住居跡実測図（S=1/60）

0　1　2m

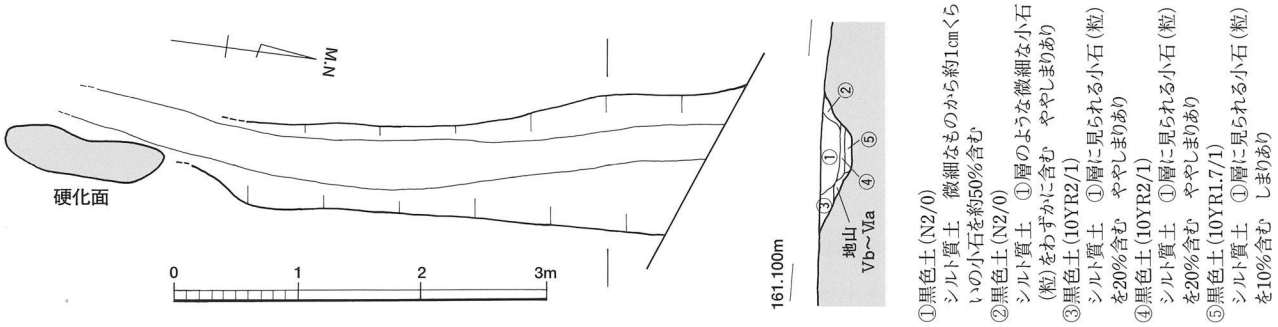


第24図　1号掘立柱建物跡実測図（S=1/60）

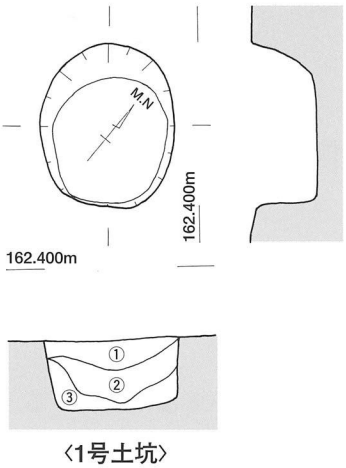


図版4　C区1号竪穴住居跡完掘状況

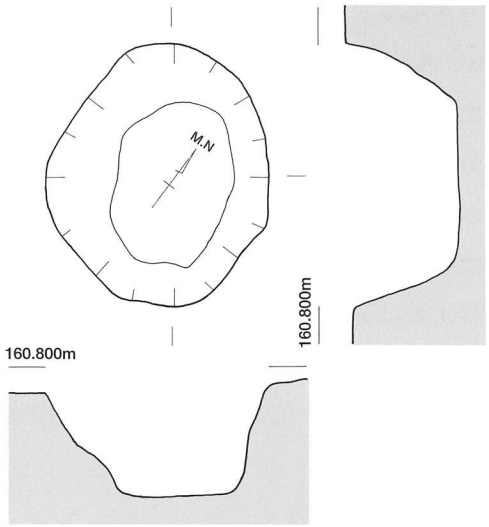
図版5　C区1号掘立柱建物跡完掘状況



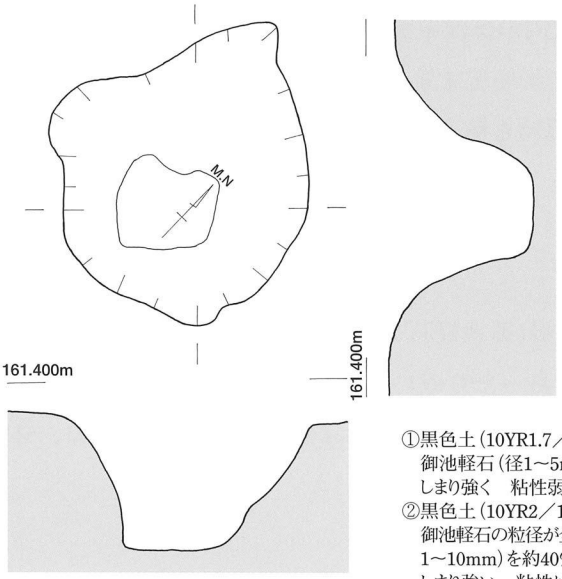
第25図　1号溝状遺構実測図（S=1/60）



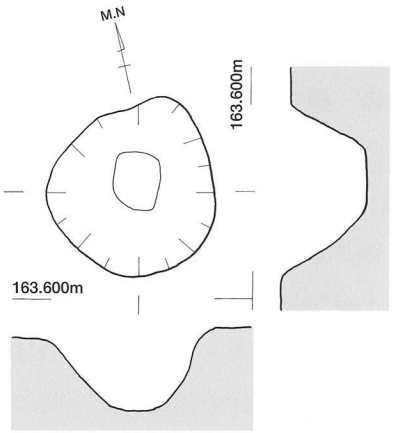
〈1号土坑〉



〈2号土坑〉



〈3号土坑〉



〈4号土坑〉

①黒色土(10YR1.7／1)
御池軽石(径1～5mm)を約20%含む
しまり強く　粘性弱い
②黒色土(10YR2／1)
御池軽石の粒径が全体的に大きくなり(径1～10mm)を約40%含む
しまり強い　粘性は①層よりある
③黒褐色土(10YR2／2)
御池軽石(径1～10mm)の混入が著しく70～80%を占める　しまり強く　粘性はほとんどなくパサパサした感じ

0　1　2m

第26図　1～4号土抗実測図（S=1/40）

た。長さ5.0ｍ、溝幅0.6～1.04ｍ、検出面からの深さは最深部で0.36ｍを測る。南から北に緩やかに傾斜している。構築時期及び性格については不明である。出土遺物はない。

(4)土坑(ＳＣ)

1号土坑(ＳＣ１：第26図)

1号土坑はＧ―９グリッドの南側に位置する。長軸方向はＮ―35°―Ｅを指す。規模は長軸0.86ｍ、短軸0.70ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さ0.36ｍを測る。埋土は黒色土で御池軽石の混入の割合で3層に分層できる。

2号土坑(ＳＣ２：第26図)

2号土坑はＲ―12グリッドの北西隅に位置する。長軸方向はＮ―46°―Ｅを指す。長軸1.40ｍ、短軸1.16ｍ、検出面からの深さ0.6ｍの楕円形を呈する。

3号土坑(ＳＣ３：第26図)

3号土坑はＪ―４グリッドの北東側に位置する。長軸1.50ｍ、短軸1.30ｍ、検出面からの深さ0.7ｍの不整形プランを呈する。長軸方向はＮ―40°―Ｅである。

4号土坑(ＳＣ４：第26図)

4号土坑はＰ―16グリッドの西側に位置し、長軸方向はＮ―５°―Ｗを指す。規模は長軸0.90ｍ、短軸0.90ｍのほぼ円形をなし、検出面からの深さ0.4ｍを測る。

1号土坑～４号土坑については、出土遺物もなく、構築時期及び用途については不明である。

(5)ピット群(第22図)

第Ⅴｂ層で約300基のピットを検出している。調査区内のほぼ中央部と南東部で集中が見られる。ピットの規模は径20～60㎝、深さ10～60㎝で円形及び楕円形を呈する。Ａ区で検出されたピット群と同様に縄文・弥生両期にわたる遺構と推定されるが、共伴遺物も極少であり、規則性もなかったので、その性格・機能を特定できていない。

(6)包含層出土遺物(第27・28図)

第Ⅳｃ層(文明軽石を含む黒色土層)及び第Ⅴａ・ｂ層(御池軽石を含む黒色土層)から出土している。出土遺物は約260点(5.2kg)であったが、殆どが細片であったり或いは摩耗が激しいために図化できたものは僅か12点である。30～41は全て縄文土器の鉢である。第27・28図に図示・掲載する。なお、弥生土器は全て細片で部位等が不明のため図化していない。

縄文土器(第27・28図　30～41)

30. 口唇部は殆どが剥落している。器面調整は外面が横ナデ、内面は丁寧な横ナデが施されている。外面には薄くススが付着している。

31. 口唇部上面に水平面を有し、器面調整は全面にミガキに近い丁寧な横ナデである。

32. 口唇部上面に水平面を持つ。内外面の調整はミガキに近い丁寧な横ナデである。外器面には薄くススが付着している。

33. 口唇部は横ナデにより平坦に成形されている。器面調整は外器面は斜め、内器面は横のミガキに近いナデが施されている。外器面にはスス、内器面には炭化物が付着している。

34. 口縁部に向かって僅かに外反する。内外器面ナデ調整で、外器面には部分的にススが付着する。

35. 本調査で最も大きい出土遺物である。口縁部が肥厚し、胴部が膨らむ器形である。口縁部外面と肩部に口縁部が肥厚し、胴部が膨らむ器形である。口縁部外面と肩部に凹線文や凹点文を施している。外器面は口辺部が横方向に、胴部の上部が横・斜め方向、下部が縦方向に研磨されているが、部分的にススが付着している。

36. 口縁部はやや外反ぎみに屈曲している。風化が著しいく調整は不明である。外面全体にススが付着する。

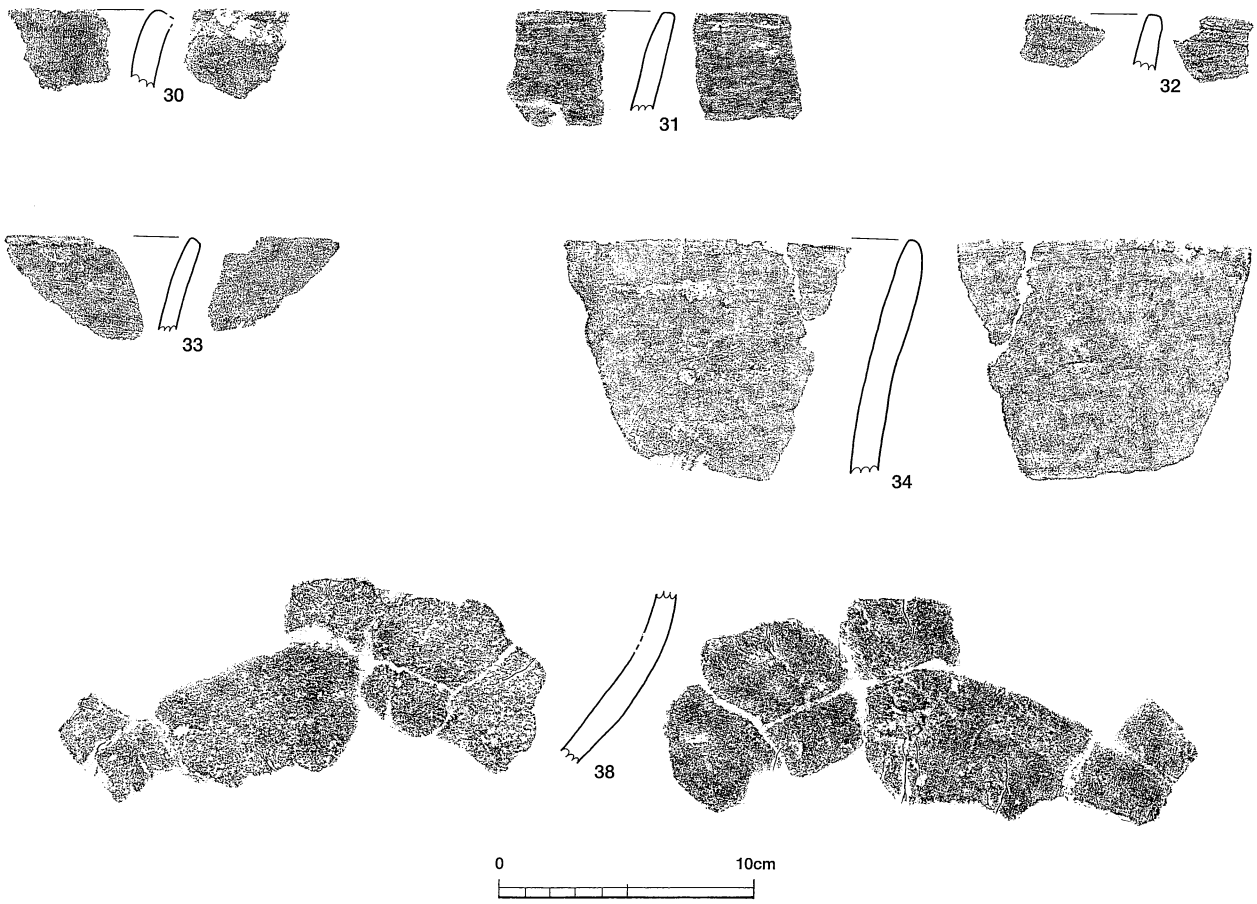
37. 2条の平行な凹線文を巡らした後、楕円形押圧を施している。器面調整は外面は丁寧なナデ、内面もナデである。

38. 内外器面はナデ調整である。外器面には部分的にススの付着が見られる。

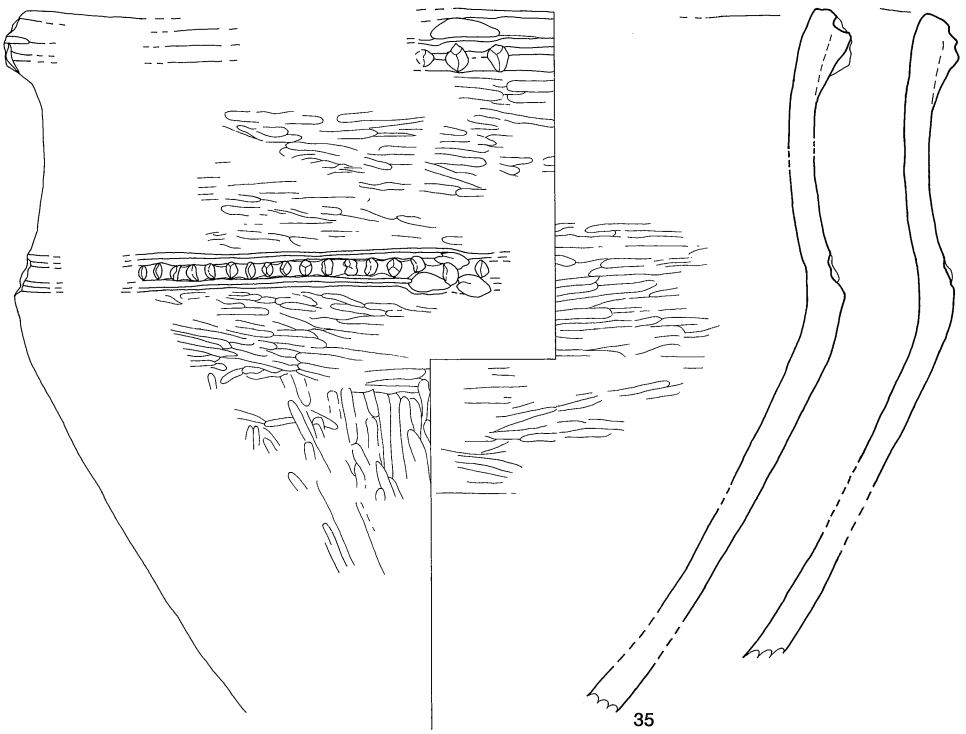
39. 底部は厚みのない平底でやや外反しながら立ち上がる。内面には炭化物、外面にはススが部分的に付着している。全体的に風化し調整は不明である。

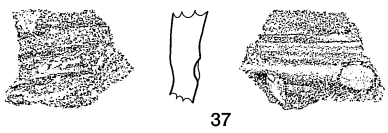
40. 厚みのある平底で、胴部へ直線的に立ち上がる。外面はミガキ、内面はナデ調整である。内面には部分的に炭化物が付着している。

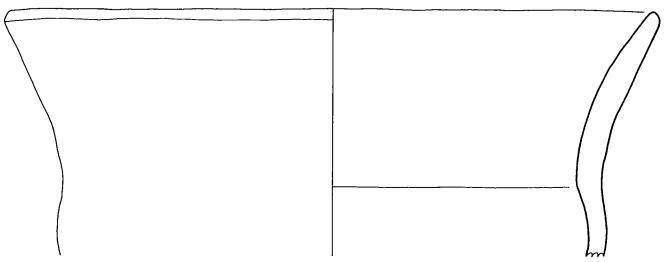
41. 上げ底状であり、胴部への立ち上がりは直線的である。底部内面には炭化物がかなり厚く付着している。

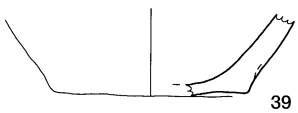


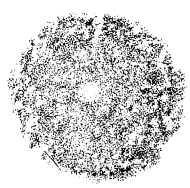
第27図　C区出土遺物実測図(1)(S=1/3)

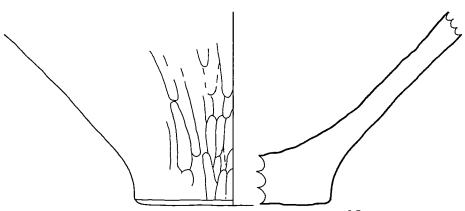


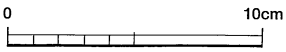












第28図　C図出土遺物実測図 (2) (S=1/3)

第6節　道路敷設部分の調査

道路敷設予定地の区域内に5箇所、他に1箇所のトレンチを設定し(第29図)、シラス(第XII層)直上まで掘り下げをおこない、遺物包含層の確認を試みた。当遺跡の周辺では、アカホヤ火山灰層(第XIII層)が良好に堆積することから、当初、縄文時代早期の遺物包含層の確認が期待された。しかしながら、1～4・6号トレンチでは、土器片の出土はみられず、当該期に属する石鏃を検出したのみであり、5号トレンチにおいてP11火山灰層の下層(第XIb層)中に土器片1点を確認するにとどまった。これとても細片であり、特徴を把握することは困難なため、図化はおこなっていない。層位的に判断するならば縄文時代早期前半の位置付けが与えられよう。各トレンチ毎の遺物出土状況はつぎのとおりである。

1号トレンチ　本トレンチでは、遺物の出土は認められない。

2号トレンチ　第XIII～第XV層にかけて剥片5点を検出した。**(第33図)**

3号トレンチ　第Xa層中より石核を1点、第XIII～第XV層にかけて、細石刃核2点、細石刃4点、剥片5点、砕片7点を検出した。**(第34図)**

4号トレンチ　第XIb層中より石鏃1点を検出した。**(第35図)**

5号トレンチ　第XIb層中より石鏃1点、土器片1点を検出した。**(第36図)**

6号トレンチ　第VII層中より石鏃1点を検出した。**(第37図)**

3号トレンチにおいて出土した剥片5点以外の遺物については図化をおこなっている**(第31・32図)**。なお、以下におこなう説明の便宜のため、石器に使用された黒曜石について、以下の類型を設ける。

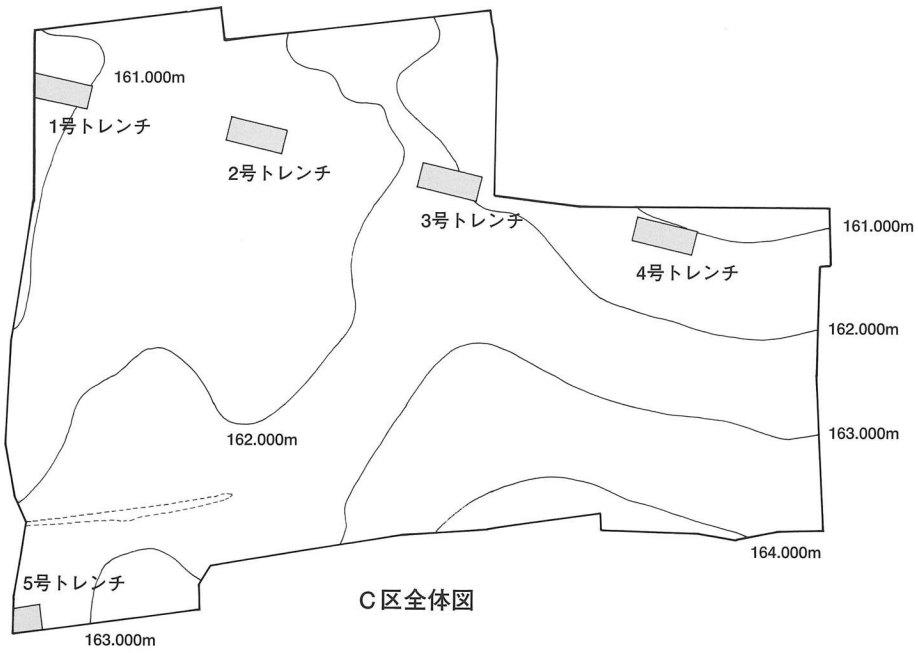
黒曜石A類　夾雑物は少なく、黒色・透明を呈する比較的良好な石質。原礫面は細かな凹凸を有しザラザラとした印象を受ける。

黒曜石B類　石質は概ね良好であるが、A類と比較し混入物が目立つ。黒色もしくは灰黒色を呈し透明感を有する。風化により肌がヌメっとした印象を与えるようになることが、この石材の特徴である。

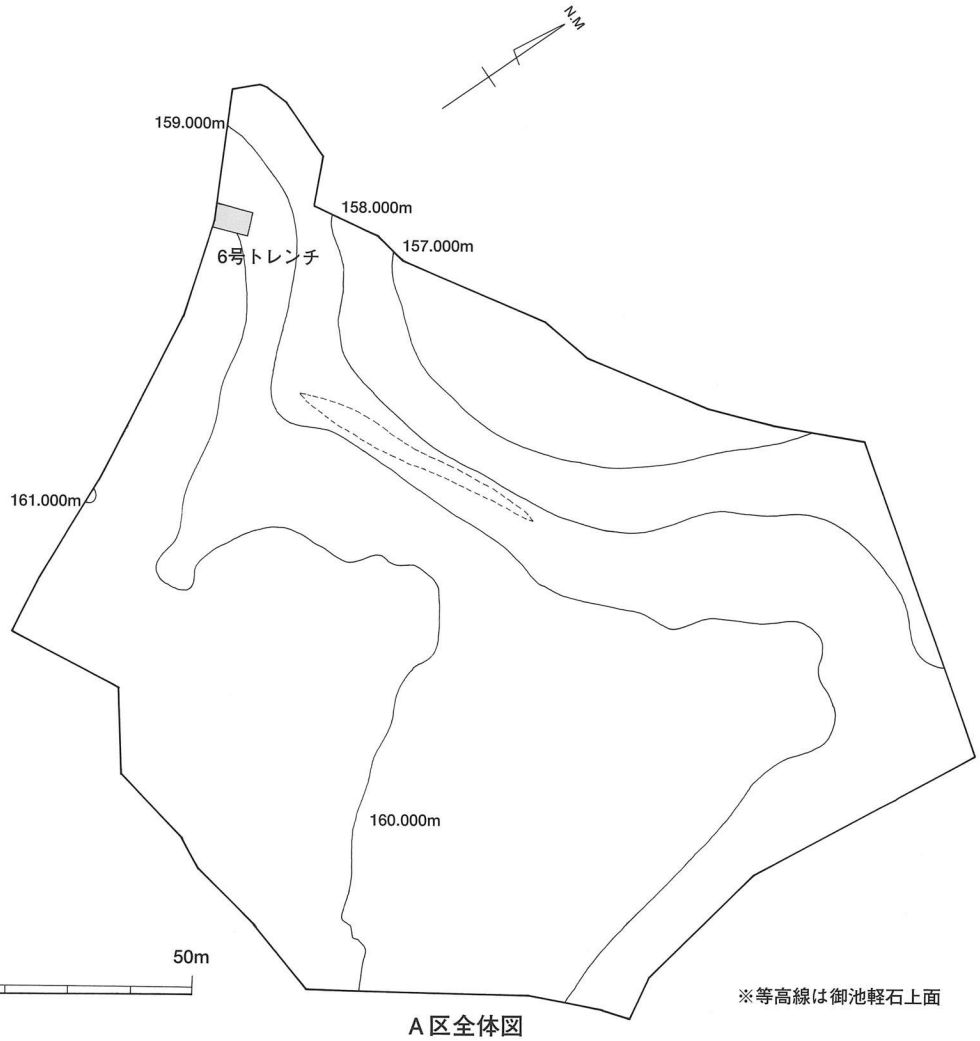
以下、個別の遺物について述べていく**(第31・32図)**。

細石刃(1～4)　1は完形品であり、背面左側縁上部には微細な剥離痕が観察される。平坦な単剥離打面を有する。頭部形状は台形を呈し、頭部調整が施されている(1)。2は複剥離打面を有し、頭部調整は観察されない。頭部形状は台形を呈する。背面左側の末端部に破損がみられるが、意図的な折断とは考えにくい。この破損以前に主要剥離面とは逆方向からの剥離痕が観察される。3・4はいずれも背面に原礫面を残し、これともう一方の剥離面とが形成する稜上から二次加工が施されている。この二次加工はいずれも主要剥離面に切られており、細石刃剥離作業以前におこなわれていた作業面調整にあたるものと考えられる。3・4ともに原礫面を打面としており、頭部調整はみられない。上記の稜上調整により、頭部形状は改変を受けている。使用石材は4点いずれも黒曜石A類である。

細石刃核(8・9)　8は計3面の作業面を有し、a面→b面→c面の順に打面転移をなされたことが推定できる。a面の剥離角は84°、c面の剥離面は81°を測る。9の最終作業面であるa面の剥離角は70°を測る。b面に観察される剥離痕についてはa面における細石刃剥離のための打面調整とも考えられる。いずれの細石刃核も黒曜石A類の小礫を用いている。



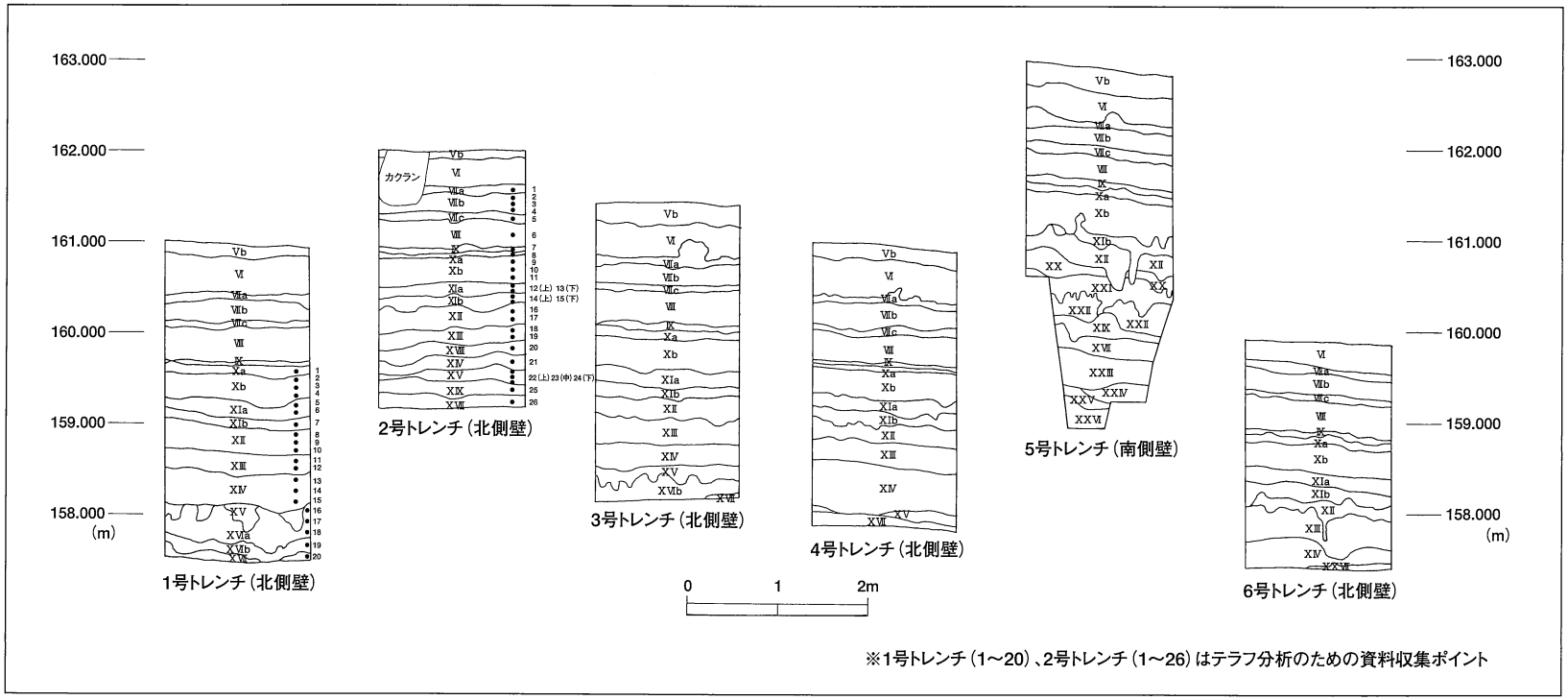
C区全体図



※等高線は御池軽石上面

A区全体図

第29図　A・C区トレンチ位置図（S=1/1,200）



第XⅧ層～第XXⅥ層の層序

※第Ⅰ層～第XⅦ層については、第Ⅰ章第2節 基本層序を参照いただきたい。

第XⅧ層	褐色土（7.5R4／4）	径1～3㎜の黄橙色粒子を少量　径1㎜以下の白色粒子を微量に含む　しまり非常に強く　粘性ややあり
第XⅨ層	褐色土（10YR4／6）	径5～100㎜の黄橙色・明黄褐色粒子・ブロックを少量含む　しまりややあり　粘性弱い
第XX層	褐色土（10YR4／6）	暗褐色土（7.5YR3／4）が混じり斑状を呈する　径1～5㎜の黄橙色粒子　径1～10㎜の白色粒子を少量含む　しまり強く　粘性やや強い
第XXⅠ層	褐色土（7.5YR4／4）	径1～3㎜の黄橙色　白色粒子を微量含む　しまりやや強く　粘性強い
第XXⅡ層	褐色土（7.5YR4／4）	上半分を中心としてかなり乱れた状態の暗褐色土（7.5YR3／4）が見られる　径1～10㎜の黄橙色粒子を少量含む　径1㎜以下の黄橙色・白色・赤褐色粒子を多量に含む　しまり非常に強く　粘性ややあり
第XXⅢ層	黄褐色土（10YR5／8）	《二次堆積シラス層》暗赤色（10R3／6）、明暗赤色（5YR5／6）、灰黄褐色（10YR4／2）などの色調を呈する層が細かく互層状に見られ水性堆積と思われる　径1～20㎜の黄橙色粒子・1～3㎜の白色・黒色粒子を多量に含む
第XXⅣ層	明黄褐色土（10YR6／8）	《一次堆積シラス層》極めて微細なガラス質明黄褐色土で構成　しまりややあり　粘性なし
第XXⅤ層	明黄褐色土（10YR6／8）	《同上》土質は第XXⅣ層と同一だが径1～10㎜の黄橙色・明黄褐色粒子　径1㎜以下の黒色粒子を極少量含む
第XXⅥ層	橙色土（7.5YR6／8）	《同上》極めて微細なガラス質橙色土で構成　径1～100㎜の黄橙色・明黄褐色粒子・ブロック　径1㎜以下の黒色粒子を多量に含む　しまり弱く　粘性なし

第30図　1～6号トレンチ土層断面図（第XⅧ層～第XXⅥ層）（S=1/80）

剥片(５～７，10～16)　５は背面に残る原礫面の観察から、小礫素材からの剥離が推定される。連続して小型の縦長剥片が剥取されていることから、幅広の細石刃である可能性もあるが、主要剥離面にツインバルブを有するため、ここでは剥片と認定した。６・７はいずれも小型の不定形剥片である。10は原礫面を打面する剥片である。11は背面側からの加圧により折損している。以上、７～11は３号トレンチからの出土であり、11に黒曜石Ｂ類が用いられる他は、黒曜石Ａ類を使用石材としている。

12～14はいずれも黒曜石Ｂ類を使用した剥片である。15・16は頁岩質の石材を用いた剥片である。15には折れ状の剥離面が複数みられるが、被熱によるハジケ痕の可能性も考えられる。頭部調整が施されている。16は、おそらく剥片剥離時の衝撃により、バルブ付近を起点として縦に亀裂が走り、剥片が半割されている。背面の剥片末端部および打面には原礫面が残存しており、そのカーブの度合いから、おおよそ拳大程度の原石形状が想定されよう。打面調整および頭部調整が観察される。以上12～17は２号トレンチからの出土である。

17は形態的特徴は細石刃核としてさし支えないものであるが、出土層位がアカホヤ直下のⅩa層であること。下位に存在する細石刃石器群とは石材も異なり、垂直分布のうえでも連続性が認められることから、縄文時代早期後半の所産と考えたい。なお、『大岩田上村遺跡』(宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第38集 2001)では図示はしていないが、文中において「第Ⅹa 層中より二次加工の有る剥片を１点 」と記したが、ここで石核と訂正する。

18～20はそれぞれ４号トレンチ～６号トレンチから出土した石鏃である。

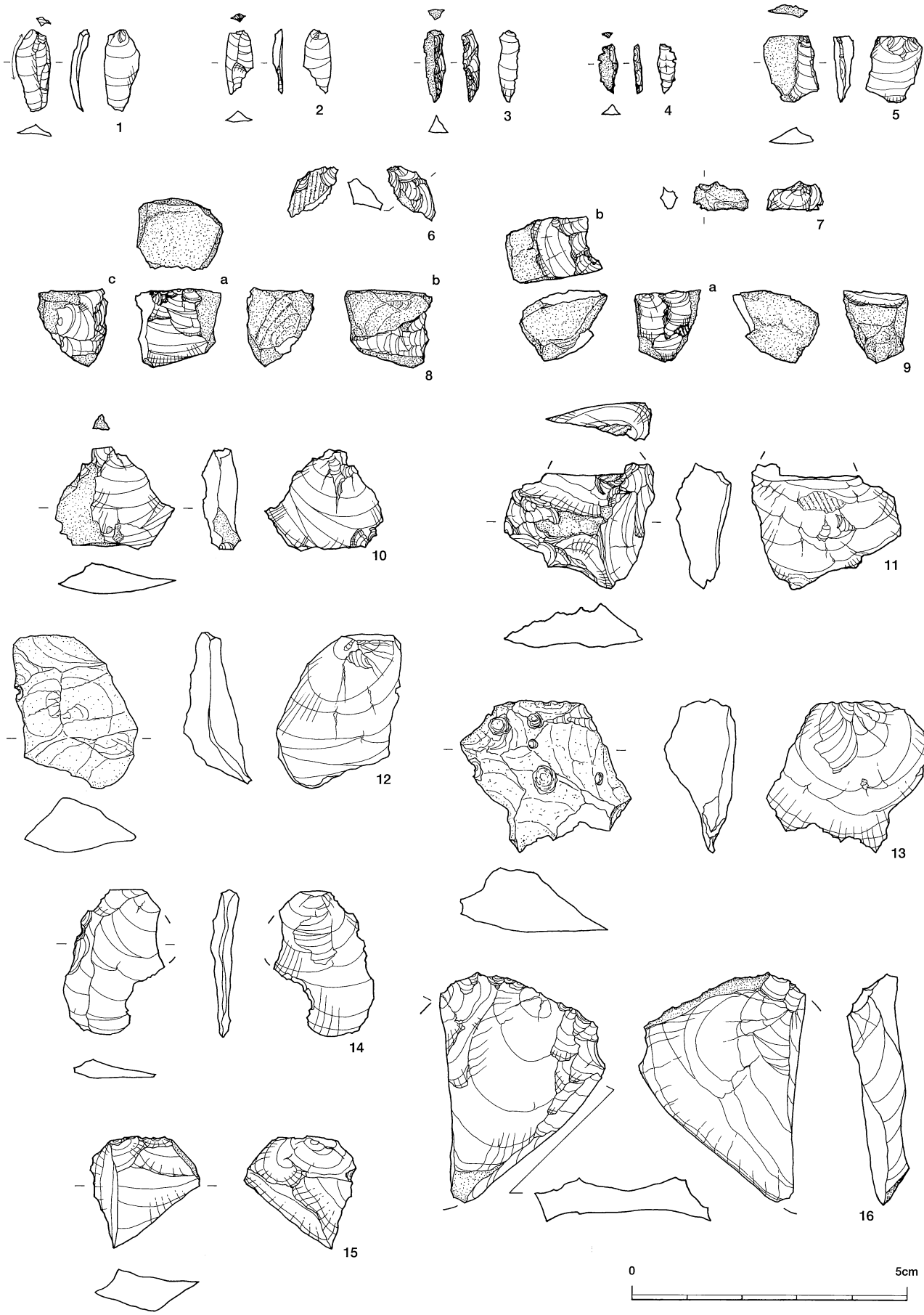
使用石材の斉一性、出土レベルのまとまりから判断するならば、11をのぞく３号トレンチ出土の遺物は細石刃石器群に属するものと捉えることが妥当であろう。また、ナイフ形石器などの成品の出土はみていないが、２号トレンチ出土の遺物の少なくともその一部および３号トレンチ出土の11については、その出土層位から推して、細石刃石器群を遡る時期の所産である可能性が高いものと考える。

遺物の出土がみられなかった他のトレンチも含めて、その地層堆積の観察所見からは、上記の石器群が残された当時のＣ区付近の地形は、比較的起伏に富んだ、現在よりもやや複雑な景観であったことが想像される。自然科学分析の結果なども踏まえ、これらの石器群がいかなる要因でこの地に残されることになったのか、今後、考究の余地があろう。

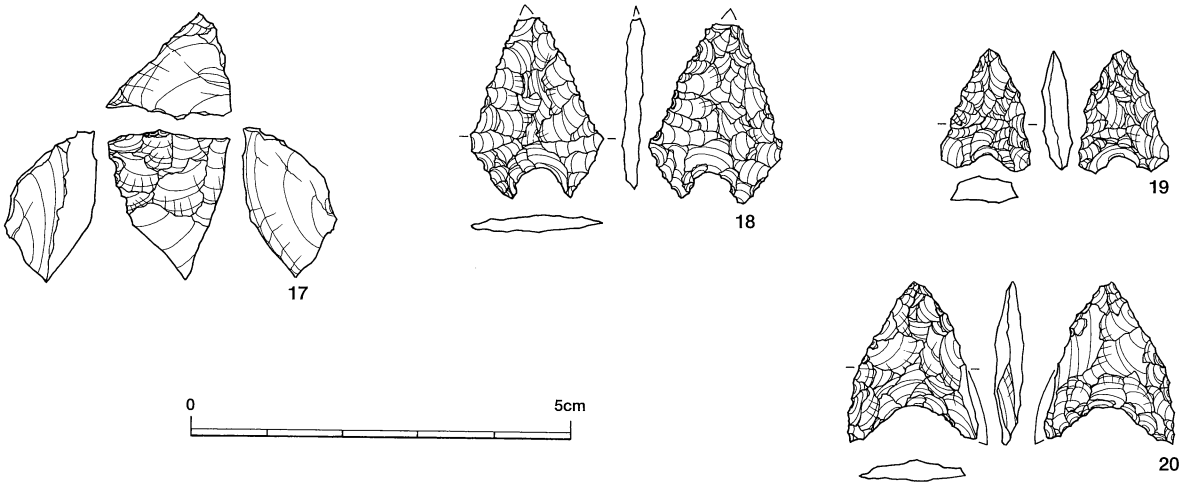
＜参考・引用文献＞

(1)頭部調整および頭部形状の類型については、下記の文献を参考にした。

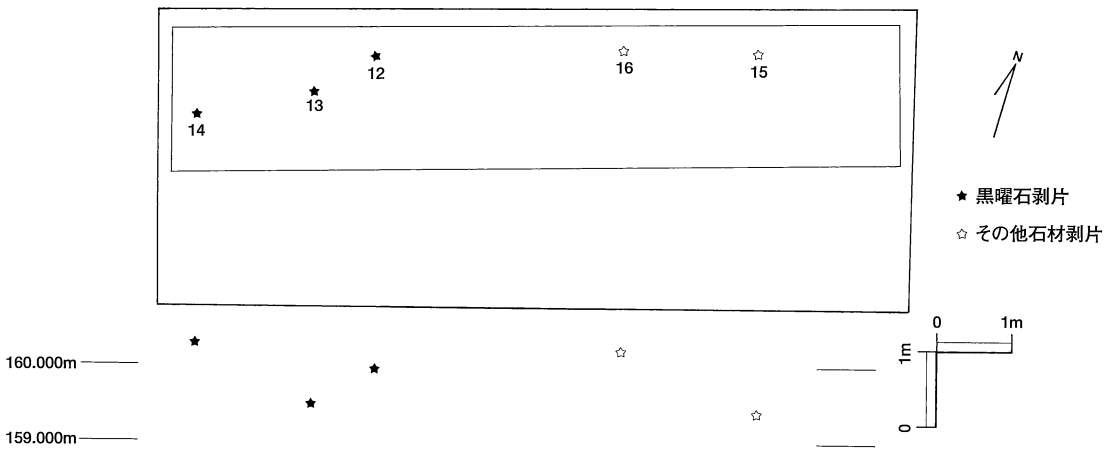
宮田栄二「細片刃の打面と頭部調整について―細石刃製作技術の追求のために―」『九州旧石器』第４号　橘昌信先生還暦記念特集号　九州旧石器文化研究会２０００



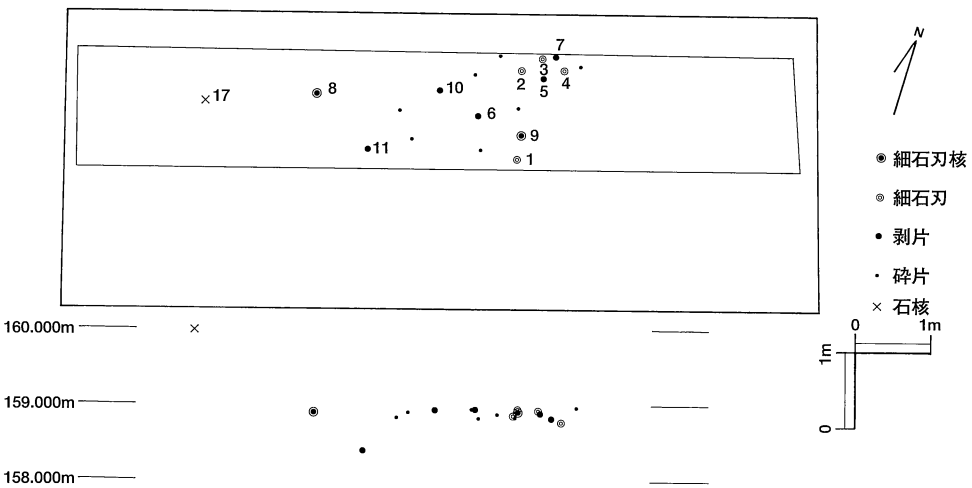
第31図　2・3号トレンチ出土の石器(S=1/1)



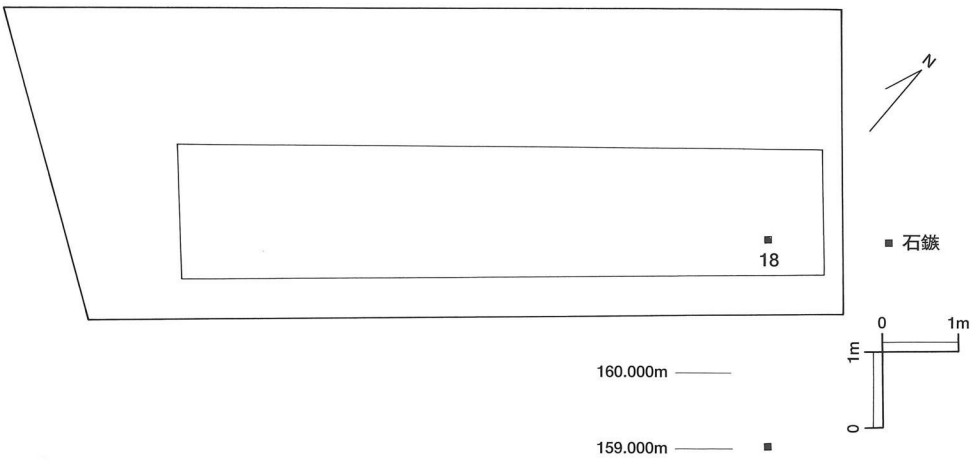
第32図　3～5号トレンチ出土の石器（S=1/1）



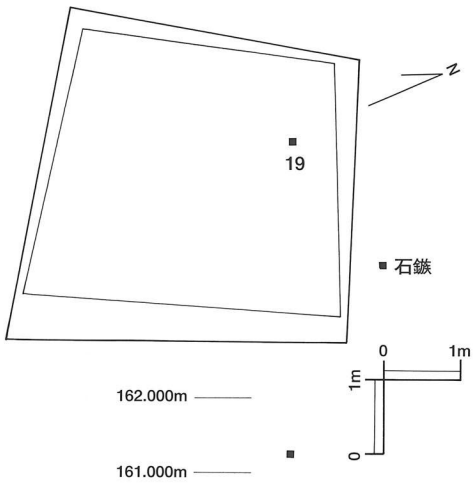
第33図　2号トレンチ遺物出土状況



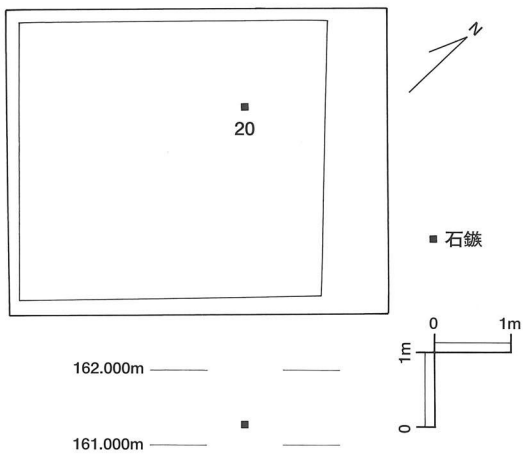
第34図　3号トレンチ遺物出土状況



第35図　4号トレンチ遺物出土状況

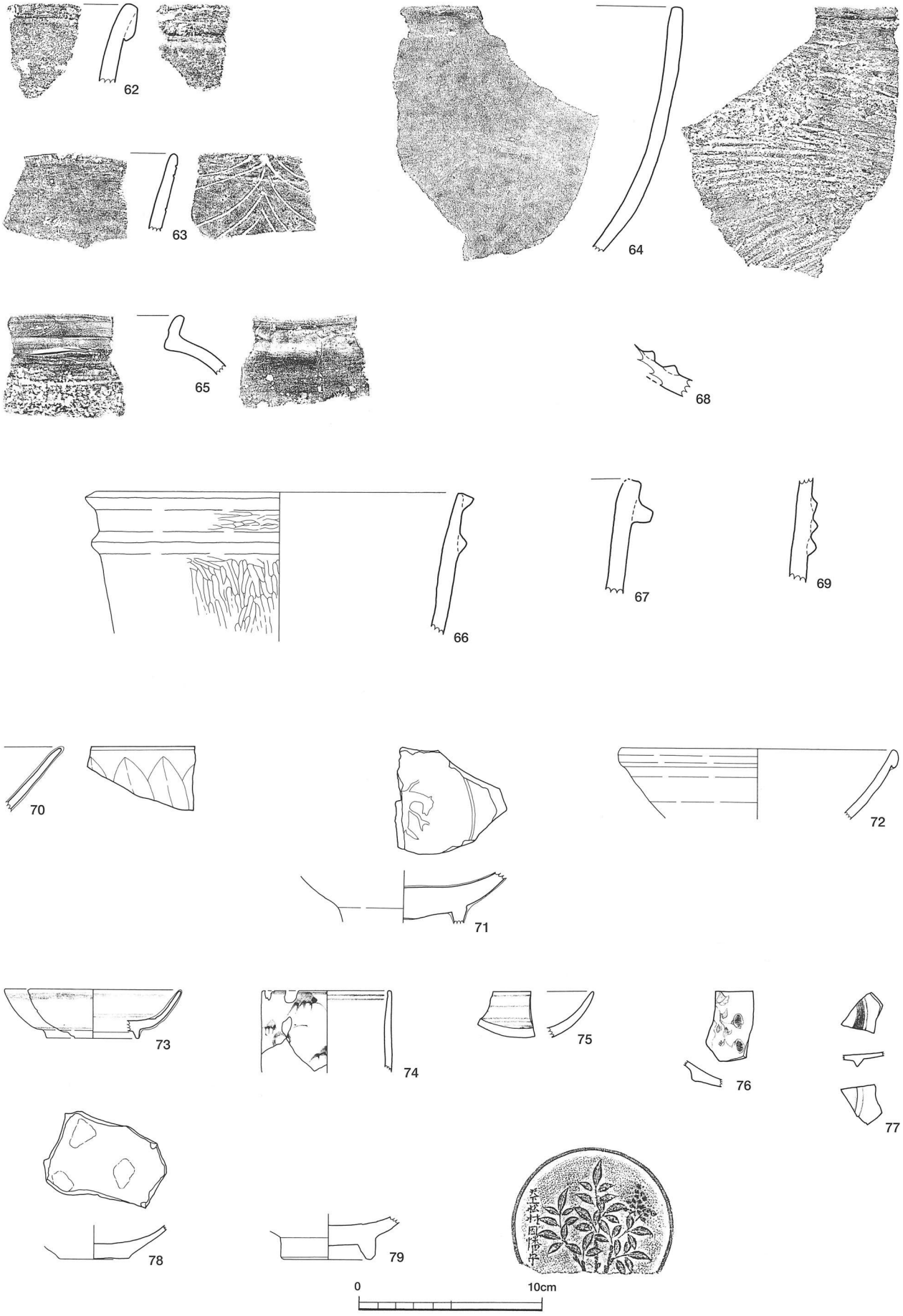


第36図　5号トレンチ遺物出土状況



第37図　6号トレンチ遺物出土状況

図版6　細石刃と細石刃核（S≒1/1　番号は第31図に対応）



第38図　参考遺物実測図（S=1/3）　　試掘トレンチ及び表採

第Ⅲ章 自然科学分析の結果

(株)古環境研究所

第1節 土層とテフラ

1．はじめに

宮崎県南部に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、姶良、鬼界、霧島など多くの火山に由来するテフラ(火山砕屑物，いわゆる火山灰)が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代の不明な土層が検出された大岩田上村遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、採取された試料を対象にテフラ検出分析と屈折率測定を行って示標テフラの層位を把握し、土層の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、深掘トレンチである（C区道路敷設部分確認トレンチ）。

2．土層の層序

深掘トレンチでは、下位より灰色砂層(層厚20㎜以上)、黄灰色砂層(層厚17㎝）円磨された黄色軽石混じり灰色砂層(層厚９㎝、軽石の最大径42㎜）、灰褐色砂質土(層厚26㎝）、橙色軽石混じり褐色土(層厚24㎝、軽石の最大径５㎜）、若干色調が暗い褐色土(層厚26㎝)、黄色軽石混じりで若干色調が暗い褐色土(層厚13㎝、軽石の最大径４㎜）、黄色細粒火山灰層のブロックや黄色軽石を含む褐色土(層厚７㎝、軽石の最大径６㎜)、暗褐色土(層厚12㎝）、黒褐色土(層厚15㎝)、黄色軽石を多く含み赤褐色スコリアを少量含む黒褐色土(層厚７㎝、軽石の最大径９㎜、スコリアの最大径２㎜）、黄色軽石に富み赤褐色スコリアを少量含む黒褐色土(層厚13㎝、軽石の最大径17㎜、スコリアの最大径２㎜）、黄色軽石を多く含む黒色土(層厚６㎝、軽石の最大径６㎜）、黒色土(層厚７㎝）、黒褐色土(層厚４㎝）、成層したテフラ層(層厚37㎝）、暗灰色土(層厚７㎝）、灰色粗粒火山灰混じり黒色土(層厚20㎝)、黄色軽石を多く含む黒色土(層厚４㎝、軽石の最大径５㎜）、黄色軽石層(層厚24㎝、軽石の最大径16㎜、石質岩片の最大径２㎜）、黄色軽石を多く含む暗灰色土(層厚29㎝、軽石の最大径６㎜）、暗灰色土(層厚16㎝）が認められる(図１)。

これらのうち、成層したテフラ層は、下部の褐色火山豆石を含む黄色軽石層(層厚３㎝、軽石の最大径14㎜、火山豆石の最大径４㎜）と、上部の正の級化構造をもつ火山灰層(層厚34㎝）からなる。火山灰層の下部(層厚７㎝）は粗粒火山灰に富み、黄灰色を呈する。一方、その上部(層厚27㎝）は、橙色細粒火山灰からなる。このテフラ層は、その層相から約6,300年前*1に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah，町田・新井，1978)に同定される。

3．テフラ検出分析

（1）分析試料と分析方法

深掘トレンチにおいて基本的に厚さ５㎝ごとに採取された試料のうち、５㎝おきの試料を中心とした

16点を対象にテフラ検出成分析を行い、示標テフラの降灰層準の把握を行った。分析の手順は、次の通りである。

1）試料15gを秤量。

2）超音波洗浄により泥分を除去。

3）80°Cで恒温乾燥。

4）分析篩により、1/4-1/8㎜の粒子を篩別。

5）実体顕微鏡によりテフラ粒子の特徴や量を観察。

（2）分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。軽石としては、試料18(軽石の最大径1.6㎜）、試料15～9、試料6～2に、スポンジ状に発泡した白色軽石が認められた。とくに、試料14から11にかけて(軽石の最大径43㎜）と、試料4～2(軽石の最大径29㎜）に比較的多く含まれている。

火山ガラスはいずれの試料からも検出された。K-Ahより下位の試料には、約2.4～2.5万年前*1に姶良カルデラから噴出した姶良入戸火砕流堆積物(A-Ito，荒牧，1969，町田・新井，1976)とそれに伴う姶良Tn火山灰(AT，町田・新井，1976，1992，松本ほか，1987，池田ほか，1995)に由来すると考えられる透明なバブル型ガラスが含まれている。また、K-Ahの上位では、そのほかにK-Ahに由来する淡褐色や褐色のバブル型ガラスが認められるようになる。試料21には、繊維束状に発泡した軽石型ガラスが特徴的に含まれている。

層相と以上の分析結果を合わせると、肉眼で認められたテフラ層のほかに、下位より試料21、試料18付近、14付近、試料4付近にテフラの降灰層準があると考えられる。

4．屈折率測定

（1）測定試料と測定方法

土層観察およびテフラ検出分析によって検出されたテフラと、示標テフラとの同定精度を向上させるために、4試料について温度一定型屈折率測定法(新井，1972，1993)により屈折率の測定を行うことになった。

（2）測定結果

屈折率測定の結果を、表2に示す。試料21に含まれるテフラの火山ガラス(n)の屈折率は、1.499-1.510である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石(γ)の屈折率は、1.710-1.714である。試料18に含まれるテフラの火山ガラス(n)の屈折率は、1.499-1.509である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石(γ)の屈折率は、1.705-1.708である。

試料4には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石のほかに、ごく少量の角閃石が認められる。斜方輝石(γ)と角閃石(n_2）の屈折率は、各々1.711-1.714と1.674-1.676である。さらに試料1の軽石層に含まれる火山ガラス(n)の屈折率は、1.509-1.511である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石(γ)の屈折率は、1.724-1.729である。

5．考察－示標テフラとの同定とその層位について

試料21に降灰層準のあるテフラは、層相、火山ガラスの形態や屈折率(低い屈折率のガラスはA-Itoあるいは AT起源)、さらに斜方輝石の屈折率などから、約1.15万年前*1に桜島火山から噴出した桜島薩摩テフラ(Sz-S，小林，1986，町田・新井，1992，奥野，1996)と考えられる。試料18付近に降灰層準があるテフラは、斜方輝石の屈折率を、約9,500年前*1に桜島火山から噴出した桜島13テフラ(P-13，小林，1986，奥野，1996)のそれ(γ：1.709-1.713，古環境研究所，未公表資料)と比較すると低い。したがって、約8,000年前*1に桜島火山から噴出した桜島12テフラ(P-12，小林，1986，奥野，1996)に由来している可能性が考えられる。しかし、桜島火山起源の縄文時代のテフラについての岩石記載学的資料が少ないことから、高精度の同定は今後の課題としたい。

試料14付近に降灰層準があるテフラのうち、黄色軽石については、その層位や層相から桜島嫁坂軽石(Sz-Ym，早田，1997)に由来する可能性が高い。このテフラは、層位や層相などから、約7,500年前*1に桜島火山から噴出した桜島11(P-11，小林，1986，奥野，1996)に同定されると思われる。また同じような層準にある赤褐色スコリアは、その岩相や層位などから、約7,400～8,200年前*1に霧島火山から噴出した霧島蒲牟田スコリア(Kr-Km，井ノ上，1988，早田，1997)に由来すると考えられる。

K-Ahを挟んでその上位の試料４付近に降灰層準があるテフラは、その層位や角閃石を少量ながら含むこと、さらに斜方輝石や角閃石の屈折率などから、約5,500～5,700年前*1に池田湖から噴出した池田湖テフラ(Ik，成尾・小林，1984，奥野，1996)に由来すると考えられる。さらにその上位にある、試料１の軽石層は、層相、火山ガラスの屈折率、重鉱物の組み合わせ、さらに斜方輝石の屈折率などから、約4,200年前*1に霧島火山御池火口から噴出した霧島御池軽石(Kr-M，町田・新井，1992，早田，1997)と考えられる。

6．小結

大岩田上村遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、下位より桜島薩摩テフラ(Sz-S，約1.15万年前*1)、桜島嫁坂軽石(Sz-Ym，約7,500年前*1)および霧島蒲牟田スコリア(Kr-Km，約7,400～8,200年前*1)、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah，約6,300年前*1)、池田湖テフラ(Ik，約5,500～5,700年前*1)、霧島御池軽石(Kr-M，約4,200年前*1)などの示標テフラを検出することができた。

*1　放射性炭素（^{14}C）年代．一般に暦年代とは異なることに注意．

<参考・引用文献>

新井房夫(1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254-269.

新井房夫(1993) 温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法－研究対象別分析法」，p.138-148.

荒牧重雄(1969) 鹿児島県国分地域の地質と火砕流堆積物．地質雑，75，p.425-442.

池田晃子・奥野　充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫(1995) 南九州，姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の 加速器質量分析法による^{14}C年代．第四紀研究，34，p.377-379.

井ノ上幸造(1988) 霧島火山群高千穂複合火山の噴火活動史．岩鉱，83，p.26-41.

小林哲夫(1986) 桜島火山の形成史と火砕流．文部省科研費自然災害特別研究「火山噴火に伴う乾燥粉体流（火砕流等）の特質と災害」（研究代表者　荒牧重雄），p.137-163.

Machida,H(1999) Quaternary widespread tehra catalog in and around Japan:recent progress. Quat. Res. 38,p.194-201.

町田　洋・新井房夫(1976) 広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義．科学，46，p.339-347.

町田　洋・新井房夫(1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰．第四紀研究，17，p143-163.

町田　洋・新井房夫(1992) 火山灰アトラス．東京大学出版会，p276.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗(1987) 姶良Tn火山灰(AT)の^{14}C年代．第四紀研究，26，p.79-83.

成尾英仁・小林哲夫(1984) 池田カルデラ形成時の降下堆積物(要旨)，火山，29，p.148.

奥野　充(1996) 南九州の第四紀末テフラの加速器^{14}C年代(予報)．名古屋大学加速器質量分析計業績報告書，7，p.89-109.

早田　勉(1997) 風土と自然環境．宮崎県史通史編，p.3-77.

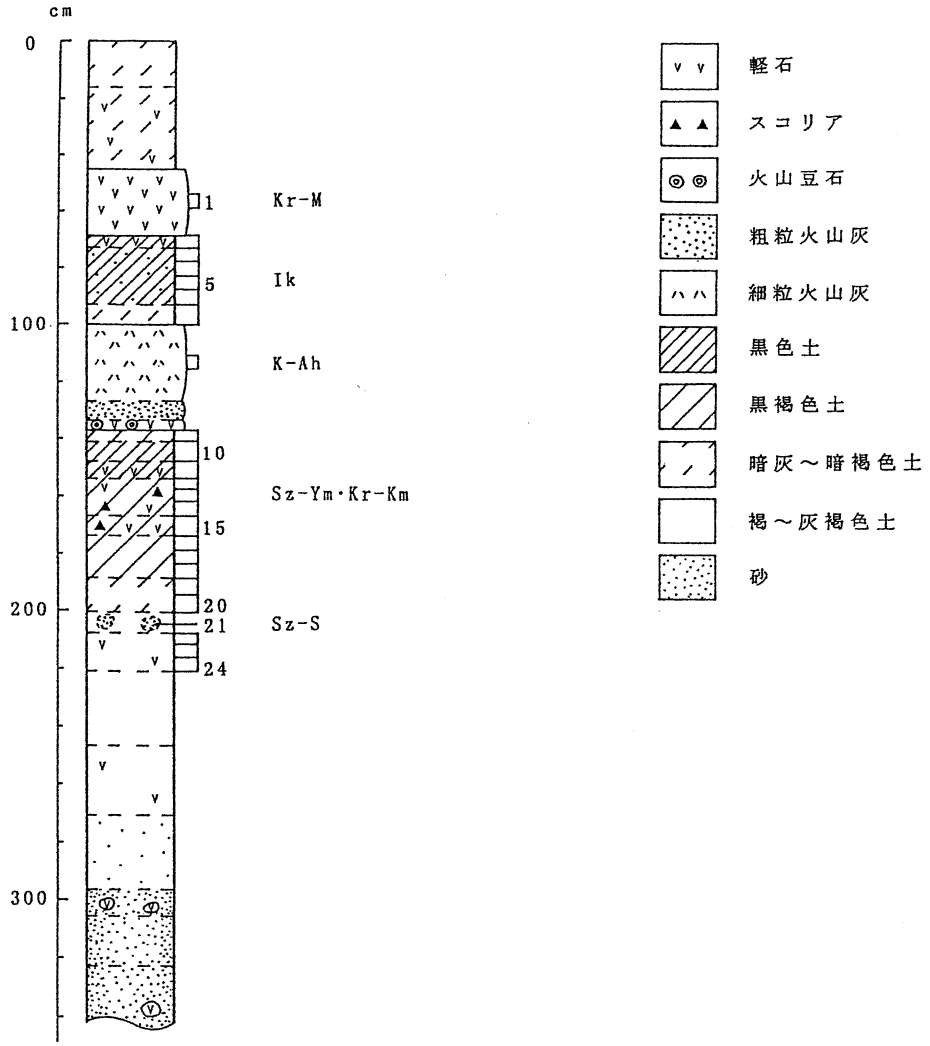


図1　深掘トレンチの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

表1　テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
深掘トレンチ	2	++	白	.9	+	pm,bw	白,淡褐,透明
	4	++	白	1.3	+	pm,bw	白,淡褐,透明
	6	+	白	1.3	++	bw,pm	淡褐,透明,白
	7	-	-	-	+++	bw	淡褐,透明
	9	+	白	2.1	++	bw	透明,淡褐
	10	+	白	1.9	+	bw>pm	透明
	11	++	白	4.3	+	bw>pm	透明
	12	++	白	3.1	++	pm>bw	白,透明
	14	++	白	4.3	++	pm>bw	白,透明
	15	+	白	3.9	+	pm,bw	白,透明
	16	-	-	-	+	bw,pm	透明,白
	18	+	白	1.6	+	bw,pm	透明,白
	20	-	-	-	+	bw,pm	透明
	21	-	-	-	++	pm>bw	透明
	22	-	-	-	++	bw,pm	透明
	24	-	-	-	++	bw,pm	透明

＋＋＋＋：とくに多い，＋＋＋：多い，＋＋：中程度，＋：少ない，－：認められない．
最大径の単位は，mm．bw：バブル型，pm：軽石型．

表2　屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス（n）	重鉱物	斜方輝石（γ）	角閃石（n₂）
深掘トレンチ	1	1.509-1.511	opx>cpx	1.724-1.729	-
	4	-	opx>cpx,(ho)	1.711-1.714	1.674-1.676
	18	1.499-1.509	opx>cpx	1.705-1.708	-
	21	1.499-1.510	opx>cpx	1.710-1.714	-

屈折率の測定は，温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）による．
opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，ho：角閃石．()は，量が少ないことを示す．

第２節　植物珪酸体分析

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石(プラント・オパール)となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山，2000)。

２．試料

分析試料は、３号トレンチ・４号トレンチから採取された計25点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

３．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原，1976)をもとに、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)

２）試料約１gに直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)

３）電気炉灰化法(550℃・６時間)による脱有機物処理

４）超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散

５）沈底法による20μm以下の微粒子除去

６）封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成

７）検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g) をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ(赤米)の換算係数は2.94(種実重は1.03)、ヨシ属(ヨシ)は6.31、ススキ属(ススキ)は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属(チシマザサ節・チマキザサ節)は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

４．分析結果

（１）分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を

行い、その結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、オオムギ族(ムギ類の穎の表皮細胞由来)、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型(おもにススキ属)、ウシクサ族Ａ(チガヤ属など)、ウシクサ族Ｂ(大型)、モロコシ属型、シバ属、Ｂタイプ(ヌマガヤ属類似)

〔イネ科ータケ亜科〕

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型(チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型(おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、マダケ属型(マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

〔イネ科ーその他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

ブナ科(シイ属）、クスノキ科、その他

（２）植物珪酸体の検出状況

現表土(試料１)からA-Ito直上層(試料40)までの層準について分析を行った。その結果、A-Ito直上層(試料40)では、ヨシ属、ウシクサ族Ａ、Ｂタイプ、クマザサ属型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。A-Itoの上層(試料39)からSz-S直下層(試料33)にかけては、ミヤコザサ節型が大幅に増加しており、ヨシ属は見られなくなっている。Sz-S混層(試料31)では、クマザサ属型がやや増加し、キビ族型やススキ属型が出現している。Sz-Ym(P11）・Kr-Km直下層(試料28)にかけては、ススキ属型やウシクサ族Ａが増加しており、クマザサ属型やミヤコザサ節型は減少傾向を示している。Sz-Ym(P11)・Kr-Km混層(試料26)からK-Ah直下層(試料22)にかけては、メダケ節型やネザサ節型が出現・増加しており、試料22ではモロコシ属型が出現している。K-Ah層(試料21)では、K-Ah直下層とおおむね同様の分類群が検出されたが、いずれも少量である。

K-Ah直上層(試料20)では、メダケ節型やネザサ節型が多量に検出され、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族Ａ、クマザサ属型なども検出された。Kr-M直下層(試料16)にかけては、ネザサ節型が大幅に増加しており、樹木(その他)が出現している。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。なお、すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく、落葉樹では形成されないものも多い。

Kr-M混層(試料14)では、Kr-M直下層とおおむね同様の分類群が検出されたが、いずれも少量である。Kr-M直上層(試料12)では、ススキ属型が増加しており、その他の分類群も増加傾向を示している。Sz-3直下層(試料５)にかけては、メダケ節型やネザサ節型が大幅に増加しており、試料５と試料６ではイネが検出された。イネの密度は1,000個/g未満と低い値である。Sz-3直上層(試料４)では、オオムギ族(ムギ類の穎の表皮細胞由来)やシバ属が出現しており、メダケ節型やネザサ節型は減少している。現表土(試料１)にかけては、イネが大幅に増加しており、マダケ属型および樹木起源のブナ科(シイ属)やクスノキ科が出現している。イネの密度は、試料１では7,500個/gと高い値であり、試料３でも3,600個/gと比較的高い値である。

おもな分類群の推定生産量によると、Sz-Ym(P11)・Kr-Km直下層より下位ではおおむねミヤコザサ

節型が優勢であり、それより上位層ではおおむねメダケ節型やネザサ節型が優勢となっていることが分かる。

5．植物珪酸体分析から推定される植生と環境

姶良入戸火砕流堆積物(A-Ito，約2.4～2.5万年前)の直上層の堆積当時は、クマザサ属(おもにミヤコザサ節)などのササ類を主体としてウシクサ族なども見られるイネ科植生であったと考えられ、部分的にヨシ属やイネ科Bタイプ(ヌマガヤ属？)などが生育する湿地的なところも分布していたと推定される。その後、桜島薩摩テフラ(Sz-S，約11,500年前)直下層にかけては、クマザサ属(おもにミヤコザサ節)などのササ類を主体としたイネ科植生が継続されていたと考えられ、とくに細石器が検出されたSz-Sの下位層準ではミヤコザサ節が繁茂する状況であったと推定される。

タケ亜科のうちメダケ属ネザサ節は温暖、クマザサ属は寒冷の指標とされており、ネザサ率(両者の推定生産量の比率)の変遷は、地球規模の氷期－間氷期サイクルの変動と一致することが知られている(杉山・早田，1996，杉山，2001)。ここでは、クマザサ属が圧倒的に卓越していることから、当時は寒冷～冷涼な気候条件で推移したと推定される。クマザサ属は氷点下5℃程度でも光合成活動をしており、雪の中でも緑を保っていることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカなどの草食動物の重要な食物となっている(高槻，1992)。遺跡周辺にこれらのササ類が豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要である。

Sz-Sの上層から桜島嫁坂軽石(Sz-Ym(P11)，約7,500年前)および霧島蒲牟田スコリア(Kr-Km，約7,400～8,200年前)の直下層にかけては、ススキ属やチガヤ属などが増加し、クマザサ属は減少したと推定される。クマザサ属は森林の林床でも生育が可能であるが、ススキ属やチガヤ属は日当りの悪い林床では生育が困難である。このことから、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく、日当りの良い比較的開かれた環境であったと推定される。

Sz-Ym(P11)・Kr-Km混層では、メダケ属(メダケ節やネザサ節)を主体としてススキ属やチガヤ属なども見られるイネ科植生に移行したと考えられ、クマザサ属はあまり見られなくなったと推定される。このような植生変化は、完新世における気候温暖化の影響によるものと考えられる。メダケ節のメダケは、高さ7ｍ、直径3㎝になり、建築用材や竹細工の材料などとして有用である(室井，1969)。鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah，約6,300年前)直下層にかけては、メダケ属(メダケ節やネザサ節)がさらに増加したと考えられ、キビ族やモロコシ属なども生育していたと推定される。

その後、K-Ahの堆積によって当時の植生は一時的に破壊されたと考えられるが、K-Ah直上層では比較的早い時期にK-Ah直下層とほぼ同様のイネ科植生が回復したと推定される。このような比較的早い植生の回復には、現在よりも平均気温が約2℃前後高かったとされる当時の高温・多湿な気候環境の影響が大きいと考えられる。霧島御池軽石(Kr-M，約4,200年前)直下層にかけては、メダケ属(メダケ節やネザサ節)が繁茂する状況であったと考えられ、部分的にススキ属やチガヤ属なども生育していたと推定される。また、周辺には何らかの樹木が分布していたと考えられる。

その後、Kr-Mの堆積によって当時の植生は破壊されたと考えられるが、ススキ属やチガヤ属、メダケ属(メダケ節やネザサ節)などのイネ科植物は比較的早い時期に再生したと推定される。桜島文明軽石

(Sz-3，1471年)直下層の堆積当時は、メダケ属(メダケ節やネザサ節)を主体としてススキ属やチガヤ属なども見られる草原的な環境であったと考えられ、調査地点もしくはその近辺では稲作が行われていたと推定される。遺跡の立地や周辺の植生から、ここで行われた稲作は畑作の系統(陸稲)であった可能性が考えられる。

Sz-3直上層から現表土にかけては、継続的に稲作が行われていたと考えられ、ムギ類の栽培も行われていたと推定される。当時の遺跡周辺には、ブナ科(シイ属)やクスノキ科などの照葉樹林が分布していたと考えられ、マダケ属またはホウライチク属も見られたと推定される。マダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用なものが多く、建築材や生活用具、食用などとして利用価値が高いが、これらの植物が現れるのはSz-3以降の比較的最近のことと考えられる。

＜参考・引用文献＞

杉山真二(1987)タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83.

杉山真二・早田勉(1996) 植物珪酸体分析による宮城県高森遺跡とその周辺の古環境推定－中期更新世以降の氷期－間氷期サイクルの 検討－．日本第四紀学会講演要旨集，26，p.68-69.

杉山真二(1999)植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究．38(2)，p.109-123.

杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール)．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

杉山真二(2001)植生と環境．季刊考古学第74号．雄山閣出版，p.14-18.

高槻成紀(1992)北に生きるシカたち－シカ、ササそして雪をめぐる生態学－．どうぶつ社.

藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

室井　綽(1969)竹・笹の話－よみもの植物記－，北隆館

表1　宮崎県、大岩田上村遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料	第3トレンチ・第4トレンチ																							
			1	3	4	5	6	8	10	12	14	16	18	20	21	22	23	24	26	28	29	31	33	35	37	39	40
イネ科	Gramineae (Grasses)																										
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)		75	36	14	7	7																				
オオムギ族(穎の表皮細胞)	Wheat husk Phytolith		7		7																						
キビ族型	Paniceae type				7	14	29		7	14		22	7	7	7		7	11	7	14		7					
ヨシ属	*Phragmites* (reed)								7																		14
ススキ属型	*Miscanthus* type		41	122	100	49	73	78	36	78	13	45	37	34	15	7	21	11	35	69	29	14	13				
ウシクサ族A	Andropogoneae A type		34	29		7	22	28	21	43	13	15	74	21		14	14	22	90	103	43	21	7	7		7	29
ウシクサ族B	Andropogoneae B type						15					7				7						7					
モロコシ属型	*Sorghum* type															7											
シバ属	*Zoisia*			65	64																						
Bタイプ	B type																			7	14		27	15	7	36	51
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)																										
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*		130	100	50	232	233	240	143	50	13	260	141	261	30	206	137	142	97								
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*		402	215	201	549	655	410	257	50	13	438	793	171	7	185	172	164	104								
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)		41	7	7	21	36	35	7				22	34		43	34	33	21	14	43	85	7				7
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*		41	14	21		22	14	14				7		7	50	21	77	83	117	129	228	301	331	302	115	58
マダケ属型	*Phyllostachys*		14	14																							
未分類等	Others		102	151	136	190	291	155	235	64	47	349	393	391	7	242	378	383	202	48	43	28	7	7	14	22	7
その他のイネ科	Others																										
表皮毛起源	Husk hair origin		20	22	7		7	21		7						21	7	11	7	7			7	15	7	7	22
棒状珪酸体	Rod-shaped		273	258	294	345	517	480	449	121	100	453	652	453	7	391	522	509	390	214	229	142	53	66	7	50	238
茎部起源	Stem origin																	5									
未分類等	Others		580	466	458	591	728	558	520	391	246	690	734	562	37	646	625	597	564	503	487	434	321	427	331	323	390
樹木起源	Arboreal																										
ブナ科(シイ属)	*Castanopsis*		7	7																							
クスノキ科	Lauraceae		7	7																							
その他	Others		7	29	7							7															
植物珪酸体総数	Total		1780	1543	1375	2004	2636	2020	1697	818	446	2285	2862	1934	120	1819	1938	1965	1600	1096	1017	968	742	869	669	561	817

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	2.21	1.05	0.42	0.21	0.21																				
ヨシ属	*Phragmites* (reed)							0.45																		0.91
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.51	1.51	1.24	0.61	0.90	0.96	0.44	0.97	0.17	0.55	0.46	0.43	0.19	0.09	0.26	0.14	0.43	0.85	0.36	0.18	0.17				
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*	1.50	1.17	0.58	2.69	2.70	2.79	1.65	0.58	0.15	3.01	1.63	3.02	0.35	2.39	1.59	1.65	1.13								
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*	1.93	1.03	0.96	2.63	3.15	1.97	1.23	0.24	0.06	2.10	3.81	0.82	0.04	0.89	0.82	0.79	0.50								
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)	0.31	0.05	0.05	0.16	0.27	0.26	0.05				0.17	0.26		0.32	0.26	0.25	0.16	0.10	0.32	0.64	0.05					0.05
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*	0.12	0.04	0.06		0.07	0.04	0.04				0.02		0.02	0.15	0.06	0.23	0.25	0.35	0.39	0.68	0.90	0.99	0.91	0.34	0.17

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*	39	51	35	49	44	55	55	71	71	59	29	74	86	64	58	57	55								
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*	50	45	58	48	51	39	41	29	29	41	68	20	9	24	30	27	25								
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)	8	2	3	3	4	5	2				3	6		9	9	8	8	23	45	48	5				24
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*	3	2	4		1	1	1				0		6	4	2	8	12	77	55	52	95	100	100	100	76

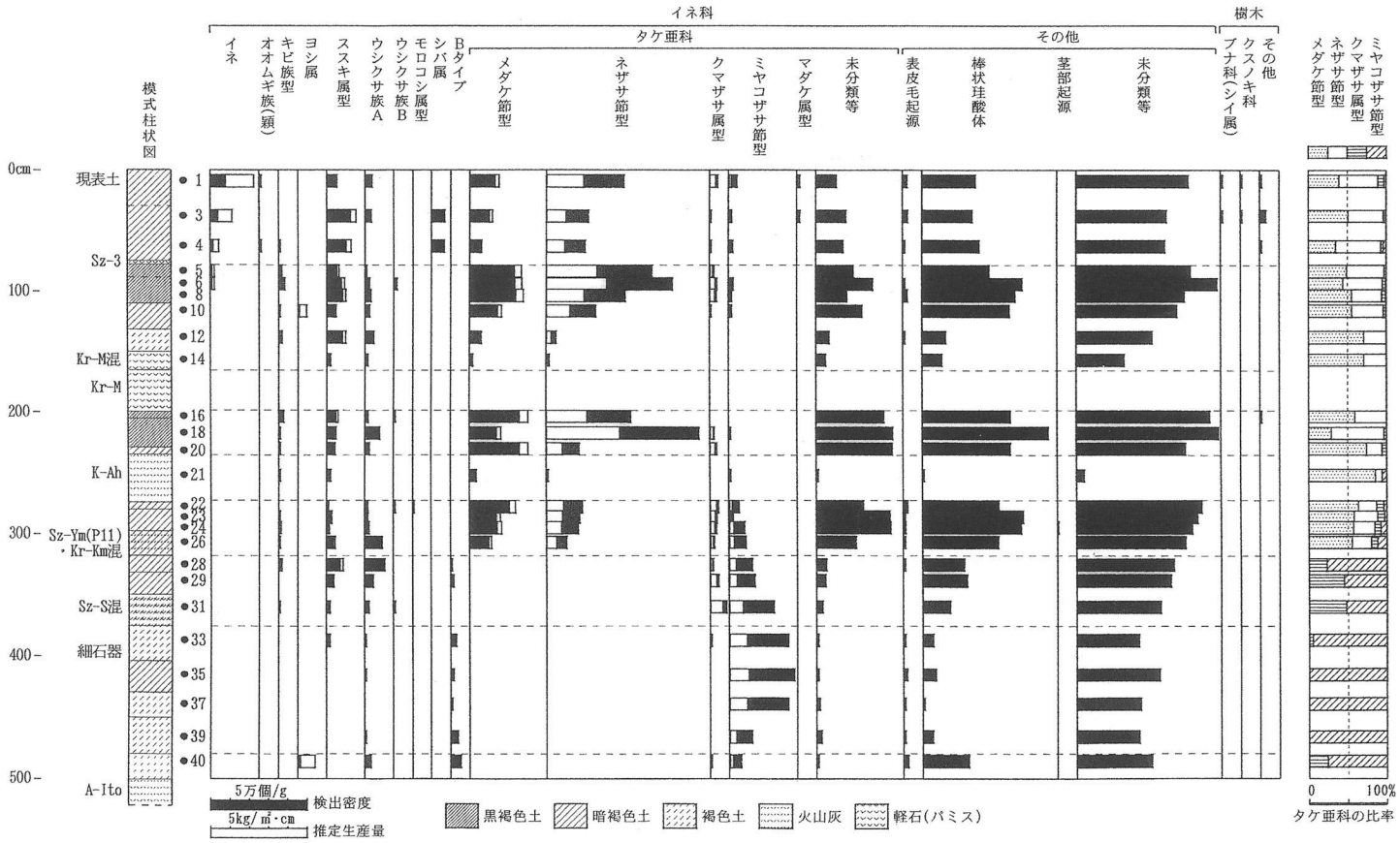
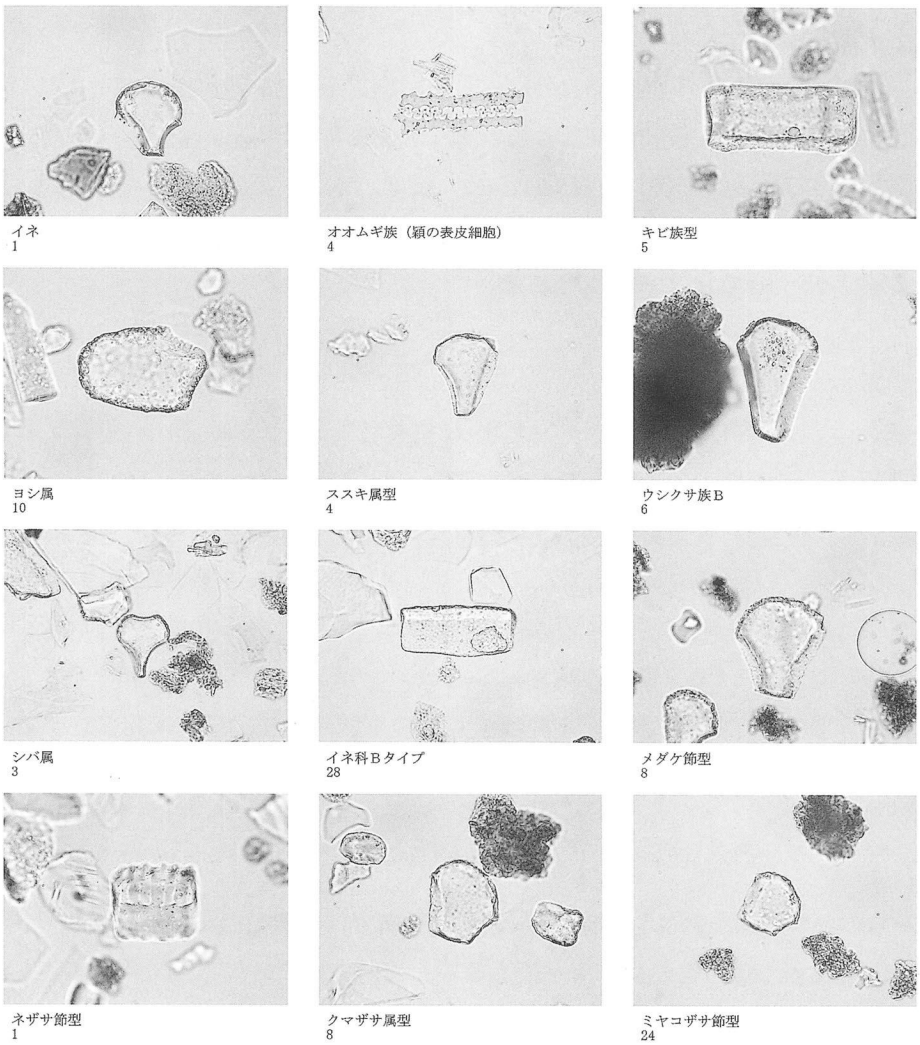


図1　大岩田上村遺跡における植物珪酸体分析結果



植物珪酸体の顕微鏡写真　——— 50μm

第３節 大岩田上村遺跡出土のウマの遺体

西中川 駿・久林朋憲
(鹿児島大学獣医学科解剖学教室)

１．はじめに

わが国のウマの起源、系統については、今日まで林田や野澤らにより体型や血液学的な観点から調査がおこなわれ、林田は小型馬の起源を中国の四川、雲南に求め、南から黒潮に乗って北上して来たといい、野澤は、わが国のウマはすべて中型の蒙古ウマに起源し、朝鮮半島経由で渡来したことを論じている。筆者らはこれまでわが国の遺跡から出土したウマの遺体を調査し、少なくとも623カ所から検出されていることを報告した。地域別では関東が247カ所最も多く、次いで九州(105)、近畿(95)である。

宮崎県下のウマの出土例は、古墳時代の久見迫１号土壙や中世の祇園原地区遺跡など７カ所から報告されている。

今回、調査を依頼された大岩田上村遺跡は、宮崎市大岩田町6809番地に所在し、農用地総合整備事業区画整理に伴い、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが平成11・12年に調査を実施し、旧石器～近世の遺構が検出された遺跡である。動物遺体は、埋葬土坑(近世)から検出され資料は発掘調査後当研究室へ持ち込まれたもので、子ウマの遺体であり、ここではその概要を報告する。

２．遺体の出土状況

埋葬土坑は、発掘時の図面をみると子ウマ１頭が入る長楕円形で、遺体は頭部を北にして頚を曲げて頭骨切歯部を後方へ向け、前、後肢を伸ばした状態で埋葬されている。当教室へ持ち込まれた資料は、左上顎乳臼歯、左右下顎骨と乳臼歯、上腕骨、胸椎、腰椎、寛骨、大腿骨などであるが、形を留めているものは上顎乳臼歯(DP^2～DP^4) と左右乳臼歯(DP_2～DP_4)のある下顎体のみで、完形骨はない(図版１の１～６参照)。出土総重量は552.0ｇである。

３．出土骨の概要

計測可能な資料は、上顎乳臼歯(DP^2～DP^4) と左右乳臼歯(DP_2～DP_4)を有する下顎体のみで、他は骨は骨の種類を同定することができる程度の保存状態である。左上顎DP^2の歯冠長、幅、中心高は28.89・17.19・23.46㎜であり、DP^3・DP^4のそれらは31.58・19.26・30.25㎜、29.57・18.25・25.45㎜である。また、左下顎のDP_2の歯冠長と歯冠幅は31.02・8.99㎜であり、DP_3・DP_4のそれらは28.80・9.68㎜、E32.01・11.02㎜である。乳臼歯の計測値からの体高の推定式は作成されていないので、左下顎DP_4の後縁、M_1の前縁における下顎体の高さ54.34㎜から、筆者らの方法で下顎全長を求め、林田らの方法で体高を推定すると98.29㎝である。年齢は永久歯の下顎第一後臼歯が萌出前であることから、１歳未満であると推測される。

４．考察

九州の遺跡からのウマの出土例は、105カ所を数え、県別では福岡の41カ所が最も多く、次いで熊本県の28カ所である。時代別では中世の43カ所が最も多く、次いで古墳時代の29カ所である。縄文時代のウ

マの出土例として、長谷部は石器時代にウマありと論じ、また、林田(1956)は、鹿児島県出水貝塚からウマの遺体を検出し、小型馬の存在を報告している。しかし、出水貝塚のウマは、近藤ら(1992)のフッ素による年代測定で、13世紀に下がることを報告している。ウマの渡来時期については、長崎県福江市の大浜遺跡出土の臼歯がC^{14}でＡＤ40±90年と測定され、これが最も古く、現在のところ弥生中期に蒙古系のウマが朝鮮半島経由で北部九州周辺に渡来したと考えられている。

宮崎県下のウマの出土例は、古墳時代の六野原１号墳、久見迫１号土壙など７カ所から報告されており、最近では祇園原地区遺跡や林遺跡から出土例が報告されている。祇園原地区遺跡のウマは、臼歯のみの出土であるが、体高が129～132㎝と推定され、典型的な中型馬であり、林遺跡のウマは推定体高122～126㎝と少し小さいが、中型馬の範疇にある。本遺跡のウマは、１歳未満で体高98㎝の子ウマで、土坑内に埋葬されており、これまでの子ウマが埋葬されている例は九州では極めて珍しい。ウマは一般的に農耕や運搬、騎馬などに使役されているが、本遺跡のウマはおそらく病死か不慮の事故により死亡し、埋葬されたものと考える。

５．まとめ

大岩田上村(近世)出土の動物遺体について調査した。

１．大岩田上村遺跡からは、ウマの埋葬遺体が出土し、発掘時にはほぼ全身の骨格が存在していたが、取り上げができたものは、上顎臼歯、下顎臼歯、胸椎、腰椎、上腕骨、大腿骨などで、完全な形のものはなく部分骨であり、総重量は552.0ｇである。

２．上、下顎の臼歯は乳臼歯で、それらの計測値は前述した。左側の下顎体の高さから体高を推測すると、98.29㎝であり、年齢は１歳未満の子馬であることが推測される。

３．ウマは一般に農耕、運搬や騎馬に使役されているが、本遺跡のウマは子馬であり、おそらく病死か不慮の事故により死亡し、埋葬されたと考えられる。

＜参考文献＞

1.長谷部言人　石器時代に馬に関して，人類誌40(4)，131—135(1925)

2.林田重幸　本馬の系統に関する研究　ｐｐ．１—180，日本中央競馬会、東京(1978)

3.金子浩昌ら　中世遺跡における動物遺体 —鎌倉市内遺跡の調査例を中心として— 鎌木義昌先生古稀記念論集，考古学と関連科学，ｐｐ．407—435(1988)

4.近藤　恵他　出水貝塚出土ウマ遺存体の年代学的研究，日本文化財学会研究発表旨論,pp.70—71(1991)

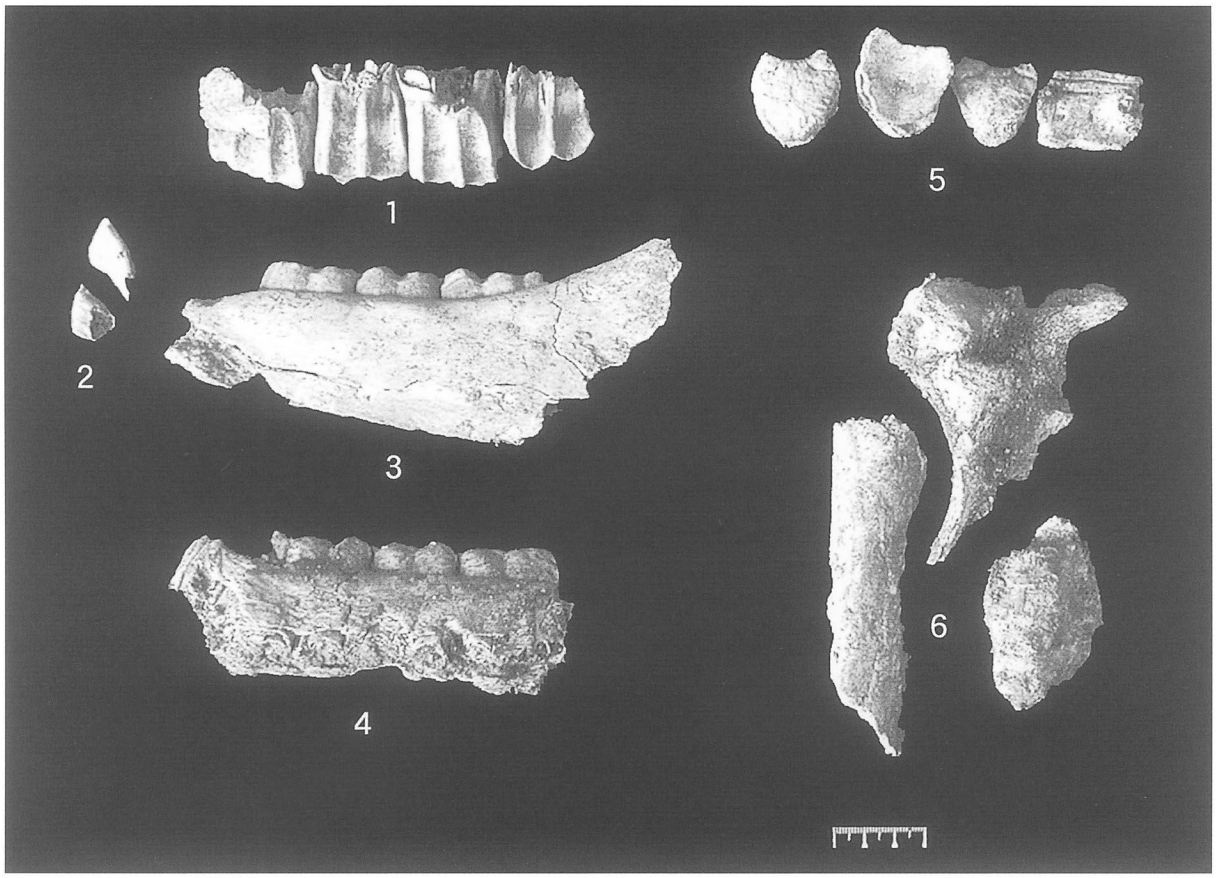
5.宮崎県教育委員会　新富町祇園原地区遺跡出土の馬歯，祇園原地区遺跡，ｐｐ．91—95(1996)

6.宮崎市教育委員会　松添貝塚、宮崎市発掘調査報告書，２，ｐｐ．1—21(1974)

7.西中川　駿ら　古代遺跡出土骨からみたわが国の牛，馬の渡来時期とその経路に関する研究，平成２年度文部省科学研究費補助金(一般研究Ｂ)研究成果報告書，ｐｐ．1—195(1991)

8.野澤　謙　東亜と日本在来馬の起源と系統，日本ウマ科学雑誌，３，１，ｐｐ．1—１８(1992)

9.芝田清吾　日本古代家畜史の研究，ｐｐ．100—293(1969)



図版１（１～６）

第Ⅳ章　まとめ

今回の調査では、旧石器時代から中世にかけての遺構・遺物を検出した。中でも、都城市では初めて検出された旧石器時代の細石刃石器群や、中世の道路状遺構は注目されるものである。

以下、調査で確認された遺構と遺物について簡単にまとめてみたい。

１．遺物について

縄文時代の土器

縄文土器は主に第Ⅳ～Ⅵ層から出土している。大半は破片資料で全形を知りえるものは少ない。Ｃ区で出土した本遺跡で最も大きい遺物である35は中岳Ⅱ式土器群に該当するものである。桒畑光博氏(1989)の形式分類ではⅡ－２型式に相当し、三万田式と御領式土器に並行する縄文時代後期後葉から晩期前葉の間に位置付けられる。隣接する大岩田村ノ前遺跡でも出土しており、在地形態と考えられる。Ａ区では縄文時代晩期に比定される黒川式土器が多数出土している。Ｃ区に設定した５号トレンチにおいてＰ11火山灰層の下層(第ⅪⅠｂ層)中に土器片１点を確認した。層位的に判断して縄文時代早期前半の位置付けを考えている。

弥生時代の土器

弥生土器は主に第Ⅳ～Ⅴ層およびＢ区－１号土坑から出土している。何れも器種は甕である。弥生時代中期の所産と思われる。43・45は逆「Ｌ」字形の口縁部形態から、中期中葉の段階に位置し、石川悦雄氏のⅢ期にあたる。46～55は２～４条の断面三角形の突帯が巡らされている。突帯には爪で斜め方向の細かい刻み目が施されているが、貼付によるものか、つまみだしによるものかは不明である。

2．遺構について

竪穴住居跡

竪穴住居跡はA区で2軒、C区で1軒の計3軒が確認されている。何れも床面積が約5.2～6.4㎡と小さく、通常の住居とは考えにくいが、その性格等については特定できていない。所属時期については、遺物等から推測して縄文時代後期後葉から晩期前葉の間と考えている。

掘立柱建物跡

C区－1号掘立柱建物跡は、構造は桁行1間(2.06m)、梁行1間(1.60m)の東西棟である。調査区外に延びるため全貌は明らかでない。構築時期及び性格については不明である。

道路状遺構

A区－1号道路状遺構は、全長約37.5m、幅員約0.7～4.3m、深さは完掘状態で最深部で1.6mを測る。その断面は大きくV字状を呈し、溝の基底部(硬化面B)と西側の法面中段(硬化面A)に硬化面を有する。土層断面より、最初に硬化面Aを伴う浅い台形状の溝が掘り込まれており、それを切るようなかたちで硬化面Bを伴うV字状の溝が掘り込まれている。最深部の路面(硬化面B)の使用時期については、文明軽石の自然堆積が硬化面直上で観察されていることから、15世紀中葉までと考える。

硬化面Bには約24mの間に37基のピットが掘り込まれている。多くのピットは楕円形を呈し、路面の主軸方向に直行するように長径を持つピットが大半で、ほとんどは道路状遺構の立ち上がりを切り込むようなかたちで掘削されていた。近年、このような道路状遺構(ピット列を伴う)の事例が数多く報告されているが、用途目的については、①枕木やコロ説②路床基礎工事説③自然発生説(ポットホール説)④排水施設説⑤足掛り説などが提示されており、また牛馬歩行痕という説もある。

当遺跡の場合は、硬化面を形成する土がいずれも等質な土であり、また各々のピットの覆土も同様に等質であることを踏まえると、②の可能性が高いと考える。また、当遺跡の道路状遺構が5°の勾配で登っていることを考慮すると、⑤足掛り説も否定できない。

溝状遺構

A区(A区－Ⅰ；25条　A区－Ⅱ；12条)で37条、C区で1条の計38条が確認されているが、中には自然流路が含まれている可能性もある。中世から近世にわたるものと考えている。

土壙墓

A区南側の南西から北東に緩やかに傾斜する斜面上で2基が隣接して確認されている。A区－1号土壙墓からは土師器の坏が1枚、錆で錆着した銭貨7枚が出土している。南部九州で多く認められる事例同様、7枚組の六道銭を副葬したものと想定される。銭貨は明銭の「洪武通寶」(5枚)・宋銭の「景祐通寶」(1枚)・「祥符元寶」(1枚)である。その規格等から判断して、何れも渡来銭の可能性が高い。

A区－2号土壙墓からは30枚の銭貨が出土している。そのうち3枚は「崇寧通寶」(1枚)・「元祐通寶」(2枚)の大型銭で、錆で錆着した状態で確認されている。一つの土壙墓に大型銭3枚を同時に副葬している事例は珍しい。都城市内で土壙墓から大量の銭貨が出土した遺跡としては、油田遺跡がある。そこでは7基の中世土壙墓から82枚の銭貨が出土しているが、8割が「洪武通寶」であり、大型銭は出土していない。また、2号土壙墓では、大型銭3枚の他に3地点で計27枚の銭貨も確認されている。27枚の銭貨については、錆が著しく剥離できないため銭貨名がわからないものもあるが、「洪武通寶」が

約4割近くを占めている他、無文銭7枚などがある。「洪武通寶」の中にはその書体から筑前洪武(筑前国で鋳造されたとされる)に類似した銭貨も4枚含まれる。27枚の銭貨については何れも国内で鋳造された模鋳銭の可能性が高い。

道路敷設部分の調査

これまでの旧石器時代の人類生活の痕跡の乏しかった都城市域において、当該時代の遺物包含層の存在を確認できたことは大きな成果であろう。3号トレンチでは細石刃石器群の存在がその出土層位を含めて明らかとなった。調査面積は狭いものの、いわゆる野岳(のだけ)・休場(やすみば)型の細石刃核のみが検出されている。くわえて砕片・剥片を組成する事実からは、この場における細石刃剥離作業の行使が想定される。また、細石刃剥離以前の石核調整を示唆する稜付きの細石刃も2点検出された。今後の技術論的研究に寄与するところがあろう。製品の存在は確認していないが、2号トレンチおよび3号トレンチの一部の石器群は、その出土層位・使用石材などから、ナイフ型石器を組成する石器群の存在を窺わせる。火山灰分析の結果なども踏まえ、その性格と帰属年代については、慎重な検討を要しよう。また、今回は肉眼的分類のみにとどめたが、黒曜石の産地分析なども、必要である。

これら大要二時期にわたる石器群について、遺跡内分布などの検討あるいは器種組成の全容把握という作業は今回の調査条件では望み得なかった。とはいえ、従来、分布上の空白地帯であったこの地にひとつの点がうたれたことの意義は大きい。大岩田上村遺跡の旧石器時代遺物についてその編年論・分布論的な位置づけを追求し、隣接地域の研究動向を視野に入れつつこれを地域史のなかに組み込んでゆくことが今後に残された課題といえよう。

＜参考文献＞

原山一郎　「九州鋳銭に関する一考察」『九州貨幣史』第4号　九州貨幣史学会 1977

石川悦雄　「宮崎平野における土器編年試案ー素描(MR.Ⅱ)」『宮崎考古』第9号　宮崎考古学会 1984

都城市教育委員会　『大岩田村ノ前遺跡発掘調査報告書』都城市文化財調査報告書第14集 1991

都城市教育委員会　『油田遺跡発掘調査報告書』都城市文化財調査報告書 第25集 1993

宮崎県埋蔵文化財センター　『市位遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第10集 1998

桒畑光博　「東南部九州におけるある縄文土器の形式組列～中岳Ⅱ式土器の再検討～」『鹿児島考古』第23号　鹿児島考古学会1989

雄山閣　『日本土器事典』 1998

宮崎県埋蔵文化財センター　『牧の原第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第19集 1999

宮崎県埋蔵文化財センター　『横市地区遺跡群』都城市文化財調査報告書 第50集 2000

宮崎県埋蔵文化財センター　『右葛ヶ迫遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第21集 2000

宮崎県埋蔵文化財センター　『王子原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第19集 2001

高橋照彦　「日本における銭貨生産と原料調達」国立歴史民俗博物館研究報告 第86集　国立歴史民俗博物館 2001年3月

東　和幸　『考古資料と民具資料の総合的研究』財団法人鹿児島育英会財団 平成13年研究助成報告書 2002

堂込秀人　「南九州縄文晩期土器の再検討」―入佐式と黒川式の細分―『鹿児島考古』第31号 鹿児島考古学会

第３表　出土遺物観察表(1)

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口経	底経	器高	外面	内面	外面	内面		
1	縄文土器	浅鉢 口縁	A－Ⅰ Ⅳ～ Ⅴ層				横ナデ ススト付着	丁寧な横ナデ	黒褐	褐 黒褐	1㎜以下の明黄褐・褐灰色粒、黒光沢粒	
2	縄文時代	浅鉢 口縁	A－Ⅱ Ⅵ層	推 13.8			ナデ ススト付着	ナデ	灰黄褐 黒	灰黄褐 褐灰	2.5㎜以下の灰白色粒 1㎜以下の透明粒	
3	縄文土器	浅鉢 口縁	A－Ⅰ Ⅴ層				ミガキ 沈線	ミガキ 炭化物付着	黒褐	褐灰 灰黄褐	3㎜以下の淡黄・灰白・褐灰・黒褐色粒	
4	縄文土器	浅鉢 口縁	A－Ⅰ Ⅳ～ Ⅴ層				ミガキ 沈線	ミガキ	にぶい黄橙	黄灰	微細な黒褐色粒 微細な無色透明光沢粒	
5	縄文土器	深鉢 口縁	A－Ⅰ Ⅳ～ Ⅴ層				ナデ 沈線 貝殻文 ススト付着	ナデ	黒褐	にぶい黄橙	3㎜以下の光沢粒 1㎜以下の浅黄橙・黒褐色粒	
6	縄文土器	深鉢 口縁	A－Ⅰ Ⅳ～ Ⅴ層				ナデ 沈線(２条) ススト付着	ナデ	黒褐	黒褐	1㎜以下の無色透明光沢粒・黄褐色粒 2㎜以下の灰・黒褐色粒	
7	縄文土器	深鉢 口縁	A－Ⅰ Ⅳ～ Ⅴ層				ススト付着 風化ぎみ	風化ぎみ	明黄褐	黄橙	3～5㎜の光沢粒 1㎜以下の淡黄・灰白・黒褐・褐灰色粒	
8	縄文時代	深鉢 口縁	A－Ⅱ Ⅴ層				斜方向の条痕後 横ナデ	横方向の条痕	にぶい橙 褐灰	灰黄褐	微細～2㎜の透明・黒光沢粒、浅黄橙・褐灰・灰白色粒	
9	縄文土器	深鉢 口縁	A－Ⅱ Ⅵ層				ナデ 一部ススト付着	ナデ	にぶい黄褐 黄灰	浅黄 暗灰黄	微細～3㎜の灰白・褐・褐灰色粒	
１０	縄文土器	深鉢 口縁	A－Ⅰ Ⅳ～ Ⅴ層	推 20.8			風化が著しい	風化が著しい	にぶい橙	にぶい橙	2㎜以下の褐色粒 1.5㎜以下の灰白色粒 1㎜以下の黒色粒	
１１	縄文土器	浅鉢 口縁 ～胴部	A－Ⅰ Ⅴ層	推 25.8			横ミガキ 凹線 ススト付着	風化ぎみ	にぶい褐	灰黄褐	3㎜以下の暗灰色粒 2.5㎜以下の灰白・褐色粒 1.5㎜以下の透明光沢粒	
１２	縄文土器	浅鉢 口縁 ～胴部	A－Ⅰ Ⅳ～ Ⅴ層				ナデ ススト付着	ナデ	黒褐 にぶい黄褐	灰黄褐	2.5㎜以下の透明光沢粒、褐色粒 微細な透明光沢粒	
１３	縄文土器	浅鉢 口縁 ～胴部	A－Ⅰ Ⅳ～ Ⅴ層				横方向の条痕後 ナデ ススト付着	横方向の条痕後ナデ	にぶい橙	にぶい橙	5㎜以下の赤褐色粒 4㎜以下の黒褐色粒 3㎜以下の乳白色粒	
１４	縄文土器	浅鉢 口縁 ～胴部	A－Ⅰ Ⅳ～ Ⅴ層				横ミガキ 沈線	丁寧なナデ	にぶい橙	灰黄褐	微細な黒褐色粒 微細な無色透明光沢粒	
１５	縄文土器	浅鉢 口縁 ～胴部	A－Ⅰ Ⅳ～ Ⅴ層				ナデ 刻目突帯 ススト付着	ナデ	橙 黒褐	明黄褐 黒褐	3㎜以下の光沢・灰白・黄灰・黄橙色粒	
１６	縄文土器	浅鉢 口縁 ～胴部	A－Ⅰ Ⅳ～ Ⅴ層	推 26.8			ミガキ 一部風化	ミガキ 一部風化	黄灰	黄灰	微細な無色透明光沢粒 2㎜以下の黄褐色粒 微細な黒色粒	
１７	縄文土器	深鉢 口縁 ～胴部	A－Ⅰ Ⅴ層				ミガキ 沈線 ススト付着	ミガキ	灰黄褐	にぶい黄橙	3㎜以下の浅黄橙・灰白・褐灰色粒	
１８	縄文土器	浅鉢 頸部	A－Ⅰ Ⅳ～ Ⅴ層				蝶ネクタイ状突起 ススト付着	ナデ	にぶい褐	にぶい橙 にぶい黄橙	3㎜以下の黒褐粒　2㎜以下の灰・灰白色粒、黒光沢・半透明光沢粒	
１９	縄文土器	深鉢 頸部	A－Ⅰ Ⅳ～ Ⅴ層				沈線(５条) ススト付着	ナデ	明赤褐	橙	6㎜以下の灰色粒 2㎜以下の乳白色粒 微細な透明光沢粒	
２０	縄文土器	浅鉢 胴部	A－Ⅰ Ⅳ～ Ⅴ層				蝶ネクタイ状突起 ミガキ	ミガキ	明黄褐	にぶい黄橙	1.5㎜以下の暗灰色粒 5㎜以下の赤褐色粒	
２１	縄文土器	浅鉢 胴部	A－Ⅱ Ⅴ層				横方向のミガキ	横方向のミガキ	浅黄橙	灰黄	微細な灰白・黒色粒	

第４表　出土遺物観察表(2)

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底経	器高	外面	内面	外面	内面		
２２	縄文土器	深鉢 胴部	Ａ－Ⅰ Ⅳ～ Ⅴ層				風化ぎみ ススト付着	風化ぎみ	黒褐	黒褐	1㎜以下の無色透明光沢粒 黒色光沢粒・黒色粒 2㎜以下の黄褐色粒	
２３	縄文土器	深鉢 胴部	Ａ－Ⅰ Ⅳ～ Ⅴ層				風化ぎみ ススト付着	風化ぎみ	橙 にぶい黄橙 浅黄橙	にぶい黄橙 褐灰	微細～6㎜の白灰・浅黄橙・褐灰・黒褐・明赤粒、褐色光沢粒	
２４	縄文土器	深鉢 胴部	Ａ－Ⅰ Ⅳ～ Ⅴ層		10.8		ナデ 指頭痕	ナデ	橙	にぶい黄橙	8㎜の赤褐色粒　4㎜以下の赤褐・灰色粒　2㎜以下の灰白・黒色粒、半透明粒	
２５	縄文時代	浅鉢 底部	Ａ－Ⅱ Ⅴ層		5.5		横ナデ後、縦・斜方向のミガキ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	微細～4㎜の透明光沢粒、灰白・浅黄橙・褐灰色粒	
２６	縄文土器	深鉢 底部	Ａ－Ⅰ Ⅳ～ Ⅴ層		11.5		横ナデ	ナデ 炭化物付着	にぶい黄橙橙	にぶい黄橙	4㎜以下の灰色粒 2㎜以下の灰白色・半透明光沢粒	
２７	縄文時代	深鉢 底部	Ａ－Ⅰ Ⅳ～ Ⅴ層		11.0		ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	2㎜以下の黒色光沢粒、灰色粒　微細～1㎜以下の灰色粒　3㎜以下の赤褐色	
２８	縄文時代	深鉢 底部	ＡⅠ Ⅴ層				縦方向の丁寧なナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	5㎜以下の褐灰色粒　2㎜以下の灰色粒、無色透明光沢粒　1㎜以下の黒色光	
２９	縄文時代	浅鉢 胴部	Ｂ Ⅵ層				横方向のナデ	横・斜方向のナデ	にぶい黄褐	灰褐	3㎜以下の灰白・浅黄橙・黒褐色粒、光沢粒	
３０	縄文土器	浅鉢 口縁	Ｃ Ⅴ層				横方向のナデ ススト付着	丁寧な横方向のナデ	灰褐	にぶい赤褐 暗灰	3㎜以下の浅黄色粒 2㎜以下の透明光沢粒 1,5㎜以下の黒色鈍光沢粒	
３１	縄文土器	浅鉢 口縁	Ｃ Ⅴ層	推 30.2			ミガキ	ミガキ	にぶい褐	にぶい褐	2㎜以下の灰白色粒、透明光沢粒 1,5㎜以下の黒色光沢粒	
３２	縄文土器	浅鉢 口縁	Ｃ Ⅴ層				ミガキ	ミガキ	灰褐	にぶい赤褐	1,5㎜以下の灰白色粒　2㎜以下の半透明粒　1㎜以下の透明光沢・黒色鈍光沢粒	
３３	縄文土器	浅鉢 口縁	Ｃ Ⅴ層				斜め方向のミガキ ススト付着	ミガキ 炭化物付着	褐 黒褐	褐	1㎜以下の褐・灰白色粒 2㎜以下の透明粒	
３４	縄文土器	深鉢 口縁	Ｃ Ⅴ層				ナデ ススト付着	ナデ	灰褐	にぶい赤褐 灰黄褐	微細～1,5㎜の無色透明光沢粒　微細黒色光沢粒　2㎜以下の灰白・灰・赤褐色粒	
３５	縄文時代	深鉢 胴部	Ｃ Ⅴ層				ナデ ススト付着	ナデ	橙 黒褐	灰黄褐 明赤褐	3㎜以下の灰白・明黄褐・黒褐光沢粒	
３６	縄文時代	深鉢 口縁 ～底部	Ｃ Ⅴ層	推 32.0			凹線文 凹点文 ミガキ	ミガキ 風化ぎみ	赤褐 褐	褐 灰黄褐	微細～3㎜の透明粒・黒色粒、褐灰色光沢粒、浅黄橙・灰褐・灰白・赤褐色粒	
３７	縄文時代	深鉢 口縁 ～胴部	Ｃ Ⅴ層	推 26.0			風化著しい ススト付着	風化著しい	橙 黒褐	灰黄褐 明赤褐	3㎜の暗赤褐色粒 3㎜以下の褐灰・浅黄橙・黄橙色粒　微細な光沢粒	
３８	縄文土器	深鉢 口縁 ～胴部	Ｃ Ⅴ層				凹線(２条) 楕円形押圧 ナデ	ナデ	にぶい赤褐 にぶい黄褐	灰黄褐	微細～1㎜の無色透明光沢粒　1㎜以下の黒色光沢粒 2㎜以下の灰褐色粒	
３９	縄文時代	浅鉢 底部	Ｃ Ⅴ層		推 7.8		風化 ススト付着	風化 ススト付着 炭化物	にぶい橙 黒褐	灰褐 黒	3㎜以下の光沢粒・灰白・褐灰・黒褐粒	
４０	縄文土器	深鉢 底部	Ｃ Ⅴ層		推 7.4		ミガキ	ナデ 炭化物付着	にぶい赤褐	黄灰 にぶい褐	2㎜以下の金色光沢粒 1㎜以下の灰白色光沢粒 2.5㎜以下の無色不透明粒	
４１	縄文時代	深鉢 底部	Ｃ Ⅵ～ Ⅴ層		7.25		ミガキ	ナデ 炭化物付着	にぶい褐 にぶい橙	褐灰	微細～3㎜の透明・黒色光沢粒、灰白・淡黄褐灰色粒	
４２	弥生土器	浅鉢 胴部	Ａ－Ⅰ Ⅳ～ Ⅴ層				貼付突帯 風化ぎみ	風化著しい	橙	橙	5㎜以下の赤褐　1㎜以下の黒光沢・白光沢粒、黒褐色粒	

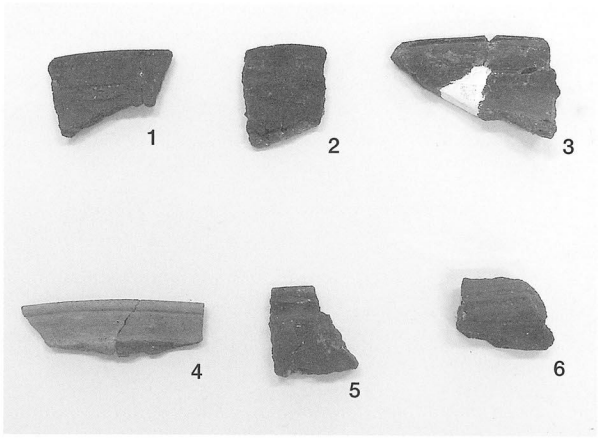
第5表　出土遺物観察表(3)

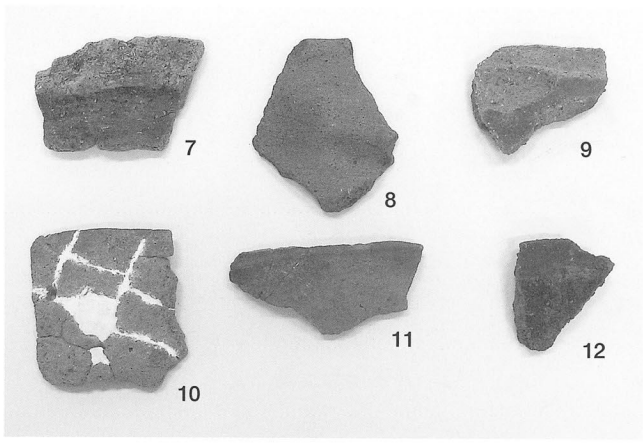
遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口経	底経	器高	外面	内面	外面	内面		
43	弥生土器	甕口縁	A－Ⅰ Ⅳ～Ⅴ層	19.6			貼付突帯 押線 ミガキ	ナデ	橙	橙	3.5㎜以下の鈍金色光沢粒 2㎜以下の半透明粒 1㎜以下の灰白色粒	
44	弥生土器	甕口縁	A－Ⅰ Ⅳ～Ⅴ層				ナデ スス付着	ナデ	暗褐	黒褐	3㎜以下の灰白・褐灰・黒褐色粒、光沢粒	
45	弥生土器	甕口縁	A－Ⅰ Ⅳ～Ⅴ層				押線 ナデ 風化ぎみ	ナデ 風化ぎみ	橙	にぶい橙 浅黄	2.5㎜以下の灰白色粒、透明光沢粒	
46	弥生土器	甕胴部	A－Ⅰ Ⅳ～Ⅴ層				貼付突帯(2条) ナデ 風化ぎみ	ナデ 風化ぎみ	にぶい赤褐	にぶい褐	3㎜以下の浅黄橙・黒褐色粒、透明光沢粒 5㎜以下赤褐色粒	
47	弥生土器	甕胴部	A－Ⅰ Ⅳ～Ⅴ層				貼付突帯(3条) ナデ 風化ぎみ	ナデ 風化ぎみ	橙	にぶい褐	4㎜以下の灰褐色鈍光沢粒 暗灰・黄橙色粒 1㎜以下の灰白色粒	
48	弥生土器	甕胴部	A－Ⅰ Ⅳ～Ⅴ層				貼付突帯(2条) ナデ 風化ぎみ	ナデ 風化ぎみ	橙	橙	3.5㎜以下の赤褐色粒 2㎜以下の鈍金色光沢粒	
49	弥生土器	鉢胴部	A－Ⅰ Ⅳ～Ⅴ層				貼付突帯(2条) ナデ 風化ぎみ	ナデ 風化ぎみ	橙 黒褐	橙	2.5㎜以下の赤褐色粒 1.5㎜以下の鈍金色光沢粒 1㎜以下の灰白色粒	
50	弥生土器	甕頸部	A－Ⅰ Ⅳ～Ⅴ層				貼付突帯?(4条) つまみだし? ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	3㎜以下の赤褐色粒 2㎜以下の灰白色光沢粒 1.5㎜以下の灰白色粒	
51	弥生土器	甕胴部	A－Ⅰ Ⅳ～Ⅴ層				貼付突帯?(4条) つまみだし? ナデ	ナデ	褐	明褐	2㎜以下の茶色粒、黒色光沢・透明光沢粒	
52	弥生土器	甕胴部	A－Ⅰ Ⅳ～Ⅴ層				貼付突帯?(4条) つまみだし? ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	2㎜以下の灰白・褐色粒、黒光沢粒、透明光沢粒	
53	弥生土器	甕胴部	A－Ⅰ Ⅳ～Ⅴ層				貼付突帯?(2条) つまみだし? ナデ	ナデ	灰褐	橙	1㎜以下の赤褐色粒、黒色光沢・半透明粒 2㎜以下の灰白色粒	
54	弥生土器	甕胴部	A－Ⅰ Ⅳ～Ⅴ層				貼付突帯?(2条) つまみだし? ナデ	ナデ	橙	にぶい褐	1㎜以下の透明粒、白色粒	
55	弥生土器	甕胴部	A－Ⅰ Ⅳ～Ⅴ層				貼付突帯(3条) ヘラ痕跡 横方向のナデ	ナデ	橙 明赤褐	明赤褐	1.5㎜以下の浅黄色粒 2㎜以下の半透明粒　1㎜以下の透明粒、暗灰色粒	
56	弥生土器	甕胴部	A－Ⅰ Ⅳ～Ⅴ層				刻目 横方向のミガキ スス付着	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下の黒褐色粒 微細な透明光沢粒	
57	弥生土器	甕胴部	B SC1				貼付突帯 横方向のナデ スス付着	斜め方向のナデ	明褐	明褐	2.5㎜以下の灰白・褐色、透明粒 2㎜以下の透明光沢粒、金色光沢粒	
58	弥生土器	甕底部	B SC1		6.5		刷毛目	ナデ 炭化物付着	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の灰白、褐色粒 1㎜以下の半透明光沢粒	
59	弥生土器	甕口縁	B Ⅴ層				貼付突帯 指押さえ跡 ナデ	ナデ	にぶい赤褐 黒褐	にぶい赤褐 黒褐	1㎜以下の光沢微細粒、灰白・黒褐・暗赤褐・褐灰色粒	
60	弥生土器	甕胴部	B Ⅴ層	推45.2			ミガキ 貼付突帯 スス付着	ミガキ	明褐	にぶい褐	3.5㎜以下の半透明灰色粒　4㎜以下の赤褐色粒　1.5㎜以下の灰色粒　2㎜以下の金色光沢粒	
61	中世	土師皿	A SD1	10.5	7.0	2.85	回転ナデ スス付着	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な無色透明光沢粒	

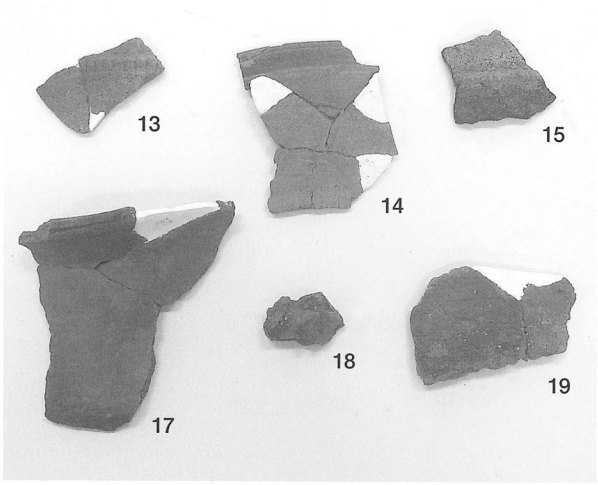
第６表　出土遺物観察表(参考資料)

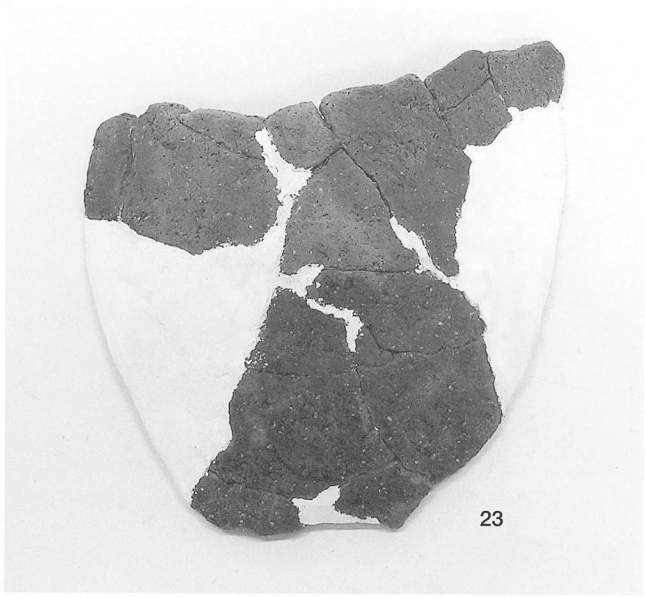
遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口経	底経	器高	外面	内面	外面	内面		
６２	縄文土器	深鉢 口縁	Ａ－Ⅰ トレンチ	19.6			ナデ スス付着	ナデ	にぶい黄橙 明褐	にぶい黄橙	5㎜以下の赤褐色粒　1㎜以下の黒光沢･白光沢粒、黒褐色粒	
６３	縄文土器	深鉢 口縁	Ａ－Ⅰ トレンチ				ナデ 沈線 スス付着	ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙	2㎜以下の赤褐色粒　1㎜以下の灰白色粒　1.5㎜以下の灰色･透明光沢粒	
６４	縄文土器	深鉢 口縁 ～胴部	Ａ－Ⅱ トレンチ				ナデ スス付着	ミガキ	褐灰 黒褐	暗褐 黒褐	3㎜以下の灰黄･灰白･黒光沢･褐灰色粒･白光沢粒	
６５	縄文土器	深鉢 口縁 ～胴部	Ａ－Ⅰ トレンチ				ミガキ	ミガキ 部分的に風化	灰黄褐	にぶい黄橙 褐灰	3㎜以下の灰白･褐灰･黒褐色粒	
６６	弥生土器	甕 口縁	Ａ－Ⅰ トレンチ	19.6			貼付突帯 ナデ ミガキ	ナデ	黒褐 暗赤褐	暗赤褐	3～5㎜の灰黄褐色粒 3㎜以下の透明光沢粒、明赤褐･橙･黒褐色粒	
６７	弥生土器	甕 口縁	Ｃ トレンチ				貼付突帯 ナデ	ナデ	赤褐 褐灰	黒褐 赤褐	3㎜以下の金･黄橙･褐灰色粒、半透明粒	
６８	弥生土器	甕 胴部	Ｂ トレンチ				貼付突帯 ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	2.5㎜以下の灰白･褐色粒 2㎜以下の透明光沢粒	
６９	弥生土器	甕 胴部	Ｃ トレンチ				貼付突帯 ナデ スス付着	ナデ	灰褐	橙 明橙	微細～3㎜以下の灰白･白･灰褐･浅黄橙粒、黒色光沢粒	

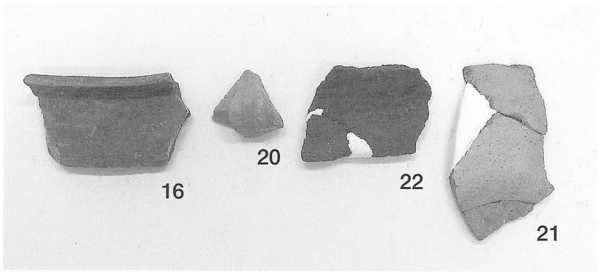
遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口経	底経	器高	外面	内面	外面	内面		
７０	青磁	碗 口縁 ～胴部	Ａ—Ⅱ 溝埋土				施釉 貫入 鎬蓮弁文	施釉 貫入	灰オリーブ	灰オリーブ	胎土調:灰 胎　土:精良 焼　成:堅緻	龍泉窯系 13C後半～14C前半
７１	青磁	碗 底部	Ｃ トレンチ				施釉 露台 高台付釉剥ぎ	施釉 見込草花？	オリーブ灰	オリーブ灰	胎土調:灰白 胎　土:精良 焼　成:堅緻	
７２	白磁	碗 口縁 ～胴部	Ａ—Ⅱ トレンチ				施釉	施釉	灰白	灰白	胎土調:灰白 胎　土:精良 焼　成:堅緻	中国産(華南系) 11C後半～12C
７３	青花	Ⅲ 口縁 ～底部	Ａ—Ⅰ 表採	9.6	5.2		施釉 高台付無釉 砂目付	施釉 蛇の目釉剥ぎ	灰白	灰白	胎土調:灰白 胎　土:精良 焼　成:堅緻	漳州窯系
７４	染付	碗 口縁 ～底部	Ａ・Ｃ 表採	7.2			施釉	施釉	明緑灰	明緑灰	胎土調:灰白 胎　土:精良 焼　成:堅緻	18C
７５	染付	Ⅲ 口縁	Ａ—Ⅰ トレンチ				施釉	施釉	灰白	灰白	胎土調:灰白 胎　土:精良 焼　成:堅緻	
７６	色絵	Ⅲ 底部	Ａ—Ⅰ 攪乱				施釉 畳台釉剥ぎ	施釉 上絵付け 草花文	灰白	灰白	胎土調:灰白 胎　土:精良 焼　成:堅緻	
７７	染付	Ⅲ 底部	Ｃ トレンチ				施釉 釉剥ぎ	施釉 染付け	灰白	灰白	胎土調:灰白 胎　土:精良 焼　成:堅緻	
７８	陶器	Ⅲ 底部 ～胴部	Ａ—Ⅰ 表採		3.9		施釉 糸切り底 目跡	施釉	黒褐 灰白	灰黄	胎土調:灰白 胎　土:精良 焼　成:堅緻	薩摩焼 (元立院窯系) 17C後半～18C
７９	陶器	碗 底部	Ｃ 表採		4.8		施釉 露台 高台内無釉	施釉 蛇の目釉剥ぎ	黒 暗赤灰	黒 暗赤灰	胎土調:橙 胎　土:精良 焼　成:堅緻	薩摩焼 (龍門司系) 18C後半～19C

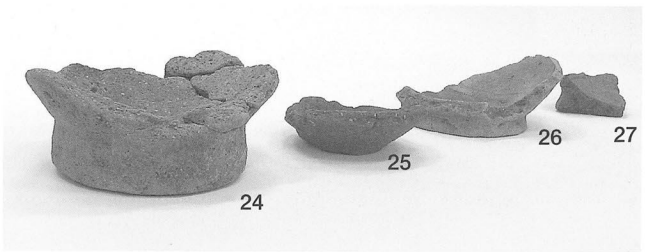

1
2
3
4
5
6

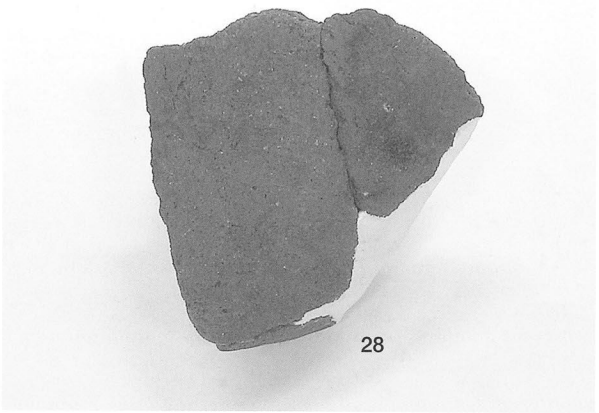

7
8
9
10
11
12

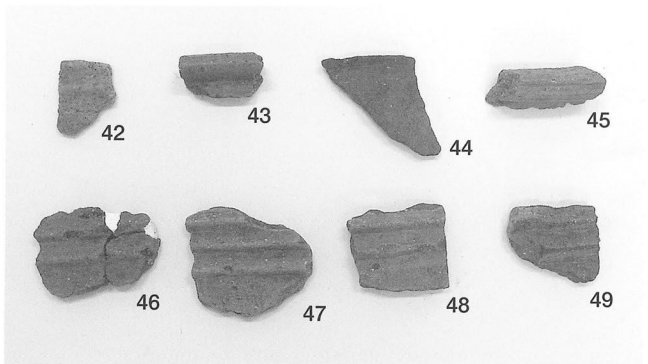

13
14
15
17
18
19


23


16
20
22
21

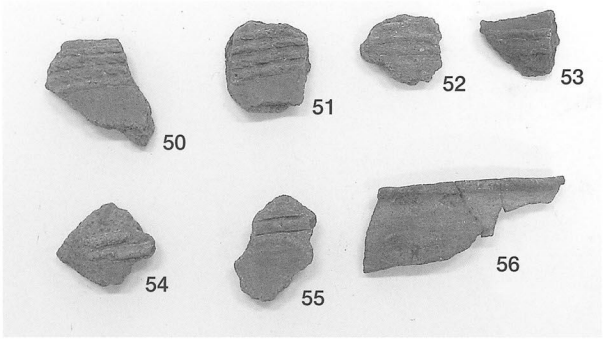

24
25
26
27


28

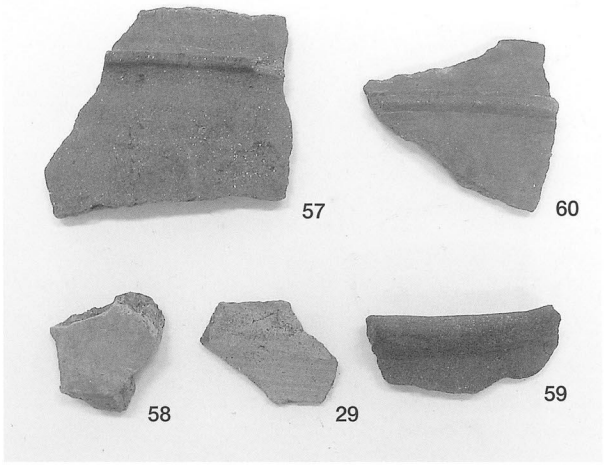

42
43
44
45
46
47
48
49

A区出土土器

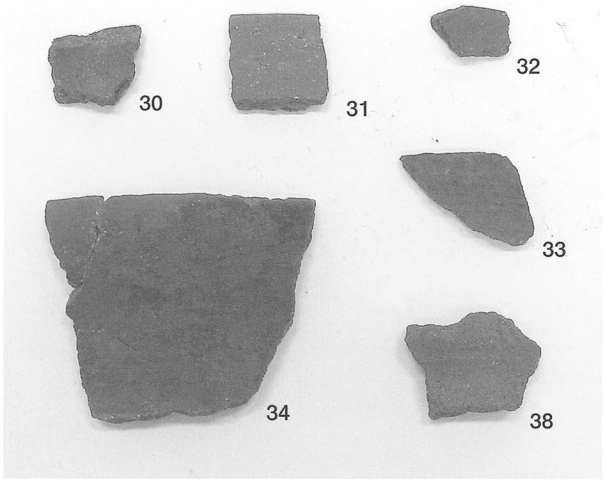
図版8



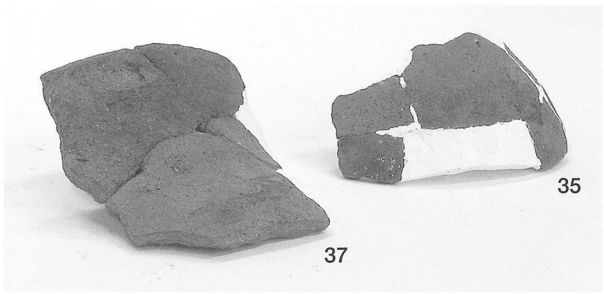
A区出土土器



B区出土土器（57.58は1号土抗出土土器）



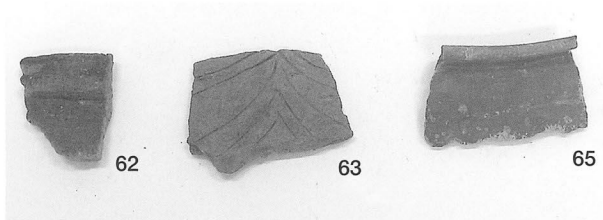
C区出土土器



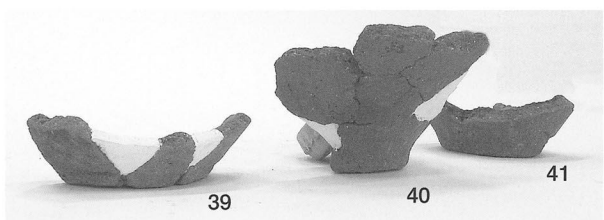
C区出土土器

A区1号土壙墓出土土器

C区出土土器

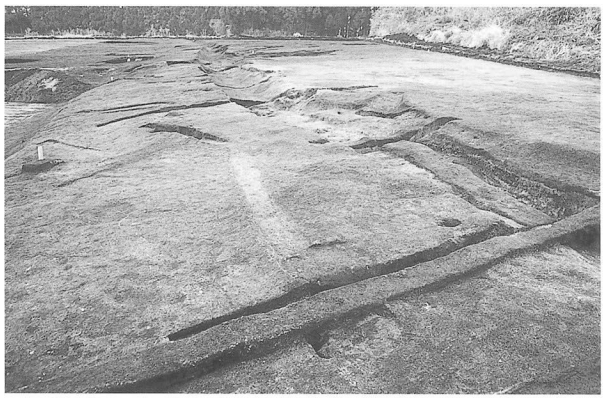


参考資料

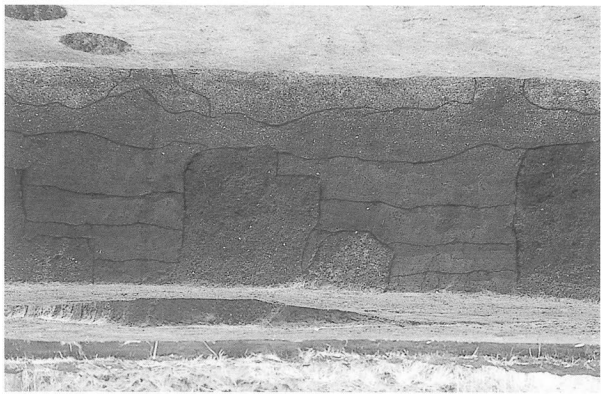


C区出土土器

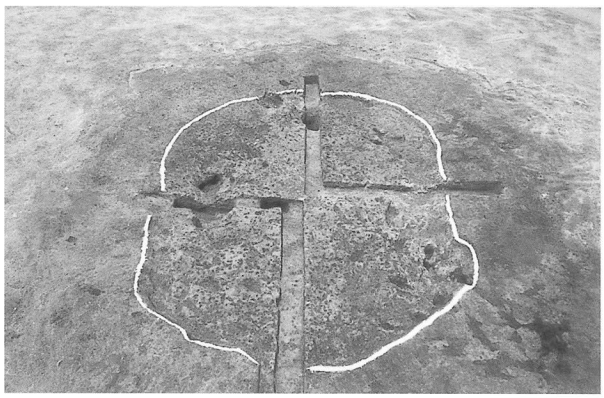
A区　中・近世遺構（溝）



A区溝（SE02）完掘状況

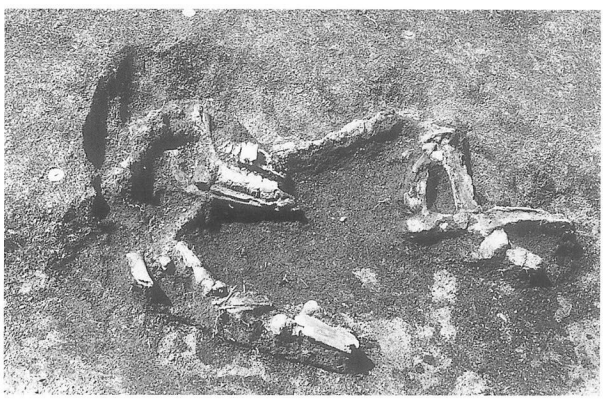


A区土層断面（第5図B-B′の一部）



A区1号竪穴住居完掘状況（東から）

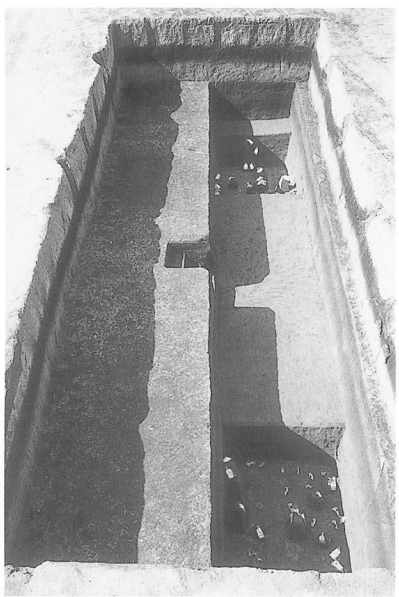
B区ピット検出状況（北から）



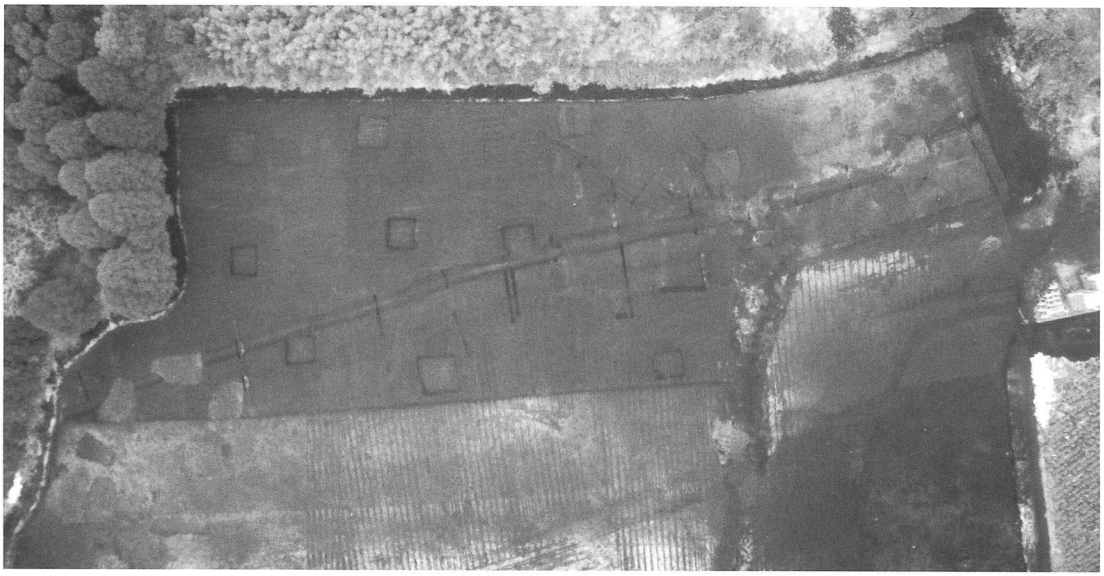
A区ウマ埋葬土抗

A区2号竪穴住居跡完掘状況（西から）

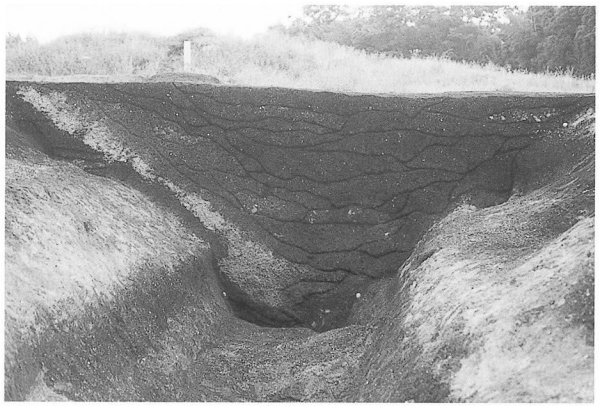
B区1号土坑遺物出土状況（東から）



C区3号トレンチ遺物出土状況（北から）

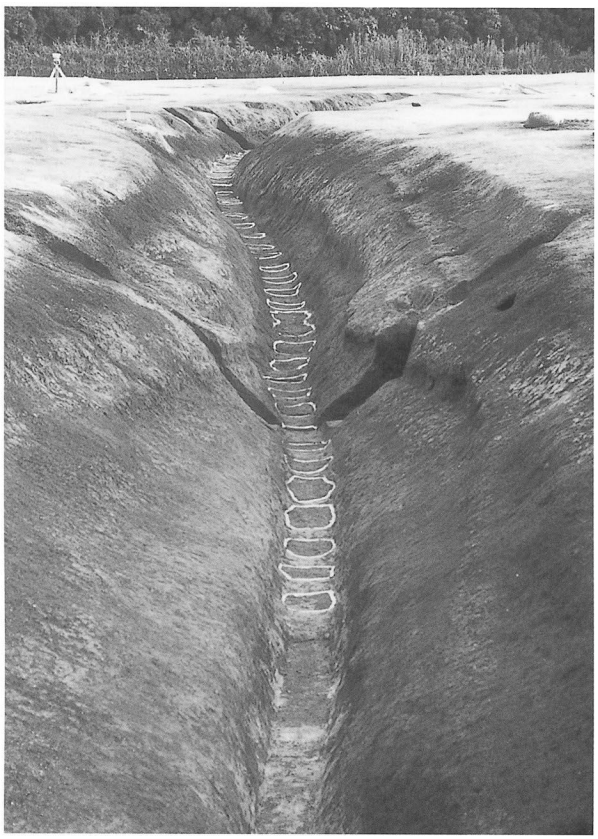


A区中・近世遺構（溝）完掘状況（北東から）



A区1号道路状遺構土層断面（南から）

A区1号道路状遺構硬化面A検出状況（南から）



A区1号道路状遺構ピット検出状況（北から）

A区1号道路状遺構ピット検出状況（南から）

報告書妙録

ふりがな	おおいわたかみむらいせき
書名	大岩田上村遺跡
副書名	農用地総合整備事業「都城区域」区画整理(今町団地)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第７７集
執筆担当者名	南正覚雅士・堀田孝博・松本　茂・谷口武範
編集機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒880-0212　宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地　TEL0985-36-1171
発行年月日	西暦2003年９月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	南緯	調査期間	調査面積	調査原因
おおいわたかみむら 大岩田上村	みやざきけん 宮崎県 みやこのじょうし 都城市 おおいわたちょう 大岩田町 6809 番地他	45202	5031	31度 41分 50秒 付近	31度 41分 57秒 付近	1999.11.17 ～ 2000.10.25	22,000㎡	農用地総合整備事業に伴う事前調査

種別	主な時代	主な遺構	主な遺構	特記事項
散布地	旧石器		細石刃石器群	・旧石器時代の細石刃石器群
	縄　文	竪穴住居跡 ピット群	縄文土器	
	弥　生	ピット群	弥生土器	・中世の溝状遺構及び道路状遺構
	中　世～近　世	溝状遺構 道路状遺構 土壙墓	土師器 中近世陶磁器 銭貨	

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第７７集

大岩田上村遺跡

農用地総合整備事業「都城地区」区画整理(今町団地)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成１５年９月発行

宮崎県埋蔵文化財センター

〒880－0212 宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地他
ＴＥＬ 0985(36)1171　　ＦＡＸ 0985(75)0660

印　刷　有限会社　富士写真印刷

〒880-0212 宮崎郡佐土原町大字下那珂字浮橋7418-2
ＴＥＬ 0985(74)2179　　ＦＡＸ 0985(74)3066